

広島市の文化財 第28集

広島市安佐北区高陽町所在

# 末光遺跡群発掘調査報告

1984.3

広島市教育委員会

## は し が き

広島市の発展にともない、なだらかな丘陵の続く高陽町一帯は、高陽ニュータウンをはじめ、多くの宅地開発が行われています。現代の人々にとって住みよいところは、古代の人々にとつてもまた同様に住みよい場所であらたと思われず。事実そのことは、このあたり一帯に多くの遺跡が存在しているところからも、うかがい知ることができます。末光遺跡群もこうした遺跡のひとつであります。この度、末光遺跡群が宅地開発にともなって消滅することになったので、記録保存することとし、広島市教育委員会が発掘調査を行いました。その結果、古代住居跡や墳墓などがみつき、古代における高陽町一帯のようすを知る資料が、またひとつ加えられました。

今回の調査にあたり、ご指導を賜りました諸先生方並びに発掘作業、整理作業に従事していただいた方々、その他調査にあたってご援助いただいた多くの方々に厚くお礼申し上げます。この報告書が歴史研究や郷土理解のために役立てば幸いです。

昭和59年3月

広島市教育長 藤 井 尚

## 例 言

1. 本書は、広島市安佐北区高陽町諸木、末光及び岩上における宅地造成工事に伴い、昭和55、58年度の2ヶ年にわたり、実施した末光遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島市高陽町岩上土地区画整理組合から委託を受けて、広島市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査において出土した人骨の鑑定は、長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝幸講師から玉稿をいただき、その結果をIX章として掲載した。
4. 上記3を除く本書の執筆は、桧垣栄次、幸田淳、橋本義和が分担して行い、文責については文末に記した。また、編集は、橋本が行った。
5. 出土遺物、遺構の実測、製図及び写真等は、桧垣、幸田、橋本が各々分担して行った。
6. 本書掲載の末光遺跡群全景の航空写真は、はにわ会会員井手三千男氏から提供を受け、D地点の航空写真は、スタジオ・ユニに委託した。
7. 遺物写真のうち、A-2地点1、B地点43、44は1/6、他は1/3とした。
8. 第1図は建設省国土地理院発行の50,000分の1、海田の地形図を複製したものである。

## 目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	3
III A 地点遺跡	6
1. A-1 地点遺跡	6
2. A-2 地点遺跡	24
IV B 地点遺跡	35
V C 地点遺跡	68
VI D 地点遺跡	72
VII E 地点遺跡	77
VIII 岩上城跡	87
IX 広島市末光遺跡群B地点出土の弥生時代人骨	90
X 考 察	96

## 挿 図 目 次

第1図	未光遺跡群の位置と周辺の主要遺跡	2	第32図	B地点第6号土壌実測図	45
第2図	未光遺跡群遺跡配置図	5	第33図	B地点第7号土壌実測図	45
第3図	A-1地点トレンチ及び遺構配置図	6	第34図	B地点弥生墳墓配置図	46
第4図	A-1地点第1号住居跡実測図	7	第35図	B地点第1号墓実測図	47
第5図	A-1地点第2号住居跡実測図	8	第36図	B地点第2号墓実測図	47
第6図	A-1地点第3号住居跡実測図	9	第37図	B地点第3号墓実測図	48
第7図	A-1地点第4号住居跡実測図	折り込み	第38図	B地点第4号墓実測図	48
第8図	A-1地点第5号住居跡実測図	折り込み	第39図	B地点第5・6号墓実測図	49
第9図	A-1地点出土サイドスクレイパー 実測図	11	第40図	B地点第7号墓実測図	50
第10図	A-1地点出土土器実測図(1)	19	第41図	B地点第8号墓実測図	51
第11図	A-1地点出土土器実測図(2)	20	第42図	B地点第9号墓実測図	52
第12図	A-1地点出土土器実測図(3)	21	第43図	B地点第10号墓実測図	54
第13図	A-1地点出土土器実測図(4)	22	第44図	B地点出土土器実測図(1)	61
第14図	A-2地点遺跡地形図	24	第45図	B地点出土土器実測図(2)	62
第15図	A-2地点遺構配置図	25	第46図	B地点出土土器実測図(3)	63
第16図	A-2地点第1～7号土壌実測図	26	第47図	B地点出土土器実測図(4)	64
第17図	A-2地点第1～7号土壌断面 実測図27	27	第48図	B地点出土土器実測図(5)	65
第18図	A-2地点第8号土壌実測図	28	第49図	B地点出土土器実測図(6)	65
第19図	A-2地点第9号土壌実測図	29	第50図	C地点土壌実測図	68
第20図	A-2地点第10号土壌実測図	30	第51図	C地点出土土器実測図	70
第21図	A-2地点第11号土壌実測図	31	第52図	D地点遺構配置図	72
第22図	A-2地点第11号土壌出土土器実 測図	32	第53図	D地点住居跡実測図	73
第23図	B地点遺構及びトレンチ配置図	34	第54図	D地点土壌実測図	74
第24図	B地点第1号住居跡実測図	36	第55図	E地点遺構配置図	76
第25図	B地点第2号住居跡実測図	37	第56図	E地点第1・2号住居跡実測図	78
第26図	B地点第3号住居跡及び第4号土 壌実測図	39	第57図	E地点第1号土壌実測図	79
第27図	B地点第4号住居跡実測図	40	第58図	E地点第2号土壌実測図	80
第28図	B地点第1号土壌実測図	41	第59図	E地点第3号土壌実測図	80
第29図	B地点第2号土壌実測図	42	第60図	E地点第4号土壌実測図	81
第30図	B地点第3号土壌実測図	43	第61図	E地点第5号土壌実測図	81
第31図	B地点第5号土壌実測図	44	第62図	E地点第1号住居跡出土鉄斧	84
			第63図	E地点第1号住居跡出土鉄鏃	84
			第64図	E地点出土土器実測図	85
			第65図	岩上城跡地形測量及び遺構配置図	88
			第66図	遺跡分布図	91

## 目 次

- PL.1 末光遺跡群全景（航空写真）
- PL.2 a. A-1地点第1号住居跡  
b. A-1地点第2号住居跡
- PL.3 a. A-1地点第3号住居跡  
b. A-1地点第4号住居跡
- PL.4 a. A-2地点遠景（調査後）  
b. A-2地点近景（調査後）
- PL.5 a. A-2地点第1・2号土壙  
b. A-2地点第3～7号土壙
- PL.6 a. A-2地点第8号土壙  
b. A-2地点第9号土壙
- PL.7 a. A-2地点第10号土壙  
b. A-2地点第11号土壙
- PL.8 a. B地点遠景（調査前）  
b. B地点近景（調査前）
- PL.9 a. B地点第1号住居跡  
b. B地点第2号住居跡
- PL.10 a. B地点第3号住居跡  
b. B地点第4号住居跡
- PL.11 a. B地点第4号住居跡  
b. B地点第4号住居跡
- PL.12 a. B地点第1号土壙  
b. B地点第2号土壙
- PL.13 a. B地点第3号土壙  
b. B地点第4号土壙
- PL.14 a. B地点第5号土壙  
b. B地点第6号土壙
- PL.15 a. B地点第2号住居跡内土壙  
b. B地点第3号住居跡内土壙
- PL.16 a. B地点弥生墳墓群第1～9号墓  
b. B地点弥生墳墓群及び第7号土壙
- PL.17 a. B地点第1・3号墓  
b. B地点第2号墓
- PL.18 a. B地点第4号墓  
b. B地点第5・6号墓
- PL.19 a. B地点第7号墓  
b. B地点第8号墓
- PL.20 a. B地点第9号墓  
b. B地点第10号墓
- PL.21 a. B地点第10号墓下層人骨出土状態  
b. B地点第10号墓上層人骨出土状態
- PL.22 a. D地点全景（航空写真）  
b. D地点近景（調査前）
- PL.23 a. D地点住居跡  
b. D地点土壙
- PL.24 a. E地点近景（調査前）  
b. E地点近景（調査後）
- PL.25 a. E地点第1・2号住居跡  
b. E地点第1号土壙
- PL.26 a. E地点第2号土壙  
b. E地点第3号土壙
- PL.27 a. E地点第4号土壙  
b. 岩上城跡遠景
- PL.28 A-1地点出土土器
- PL.29 A-1地点出土土器
- PL.30 A-2地点及びC地点出土土器
- PL.31 B地点出土土器
- PL.32 B地点出土土器
- PL.33 B地点出土土器
- PL.34 B地点出土土器
- PL.35 B地点出土土器
- PL.36 E地点出土土器及び鉄器
- PL.37 B地点第10号墓出土人骨

## 表 目 次

表 1	A- 1地点出土土器観察表	12
表 2	A- 2地点土壌計測表	28
表 3	B地点出土土器観察表	55
表 4	E地点出土土器観察表	82
表 5	大 腿 骨	90
表 6	大腿骨計測値	92
表 7	大腿骨計測値	92
表 8	大腿骨計測値	93
表 9	土壌の規模と住居跡の位置関係	98
表 10	住居跡の規模と平面形	99

# I はじめに

広島市教育委員会では、昭和54年3月、広島市安佐北区高陽町諸木、末光、岩上地区の造成計画を知り、分布調査を行った結果、埋蔵文化財の存在の可能性があることがわかった。そこで、造成主である広島市高陽町岩上土地地区画整理組合(以下組合という)と施工主である株式会社熊谷組と遺跡の取り扱いについて協議を行い、これと並行して試掘調査を実施した。その結果、6ヶ所の埋蔵文化財包蔵地を確認した。その後埋蔵文化財の取り扱いについて組合と再三協議を重ねたが、地理的条件等から設計変更は不可能であり、記録保存もやむなしとの結論に達した。これをうけて、広島市教育委員会は、昭和55・58年の2ヶ年で発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、工事を急ぐところから順次着手していき、昭和55年5月～7月にA地点を、同9月～昭和56年1月にB地点を、5月にC地点を調査し、昭和58年4月～6月にD・E地点及び岩上城跡の調査を実施した。

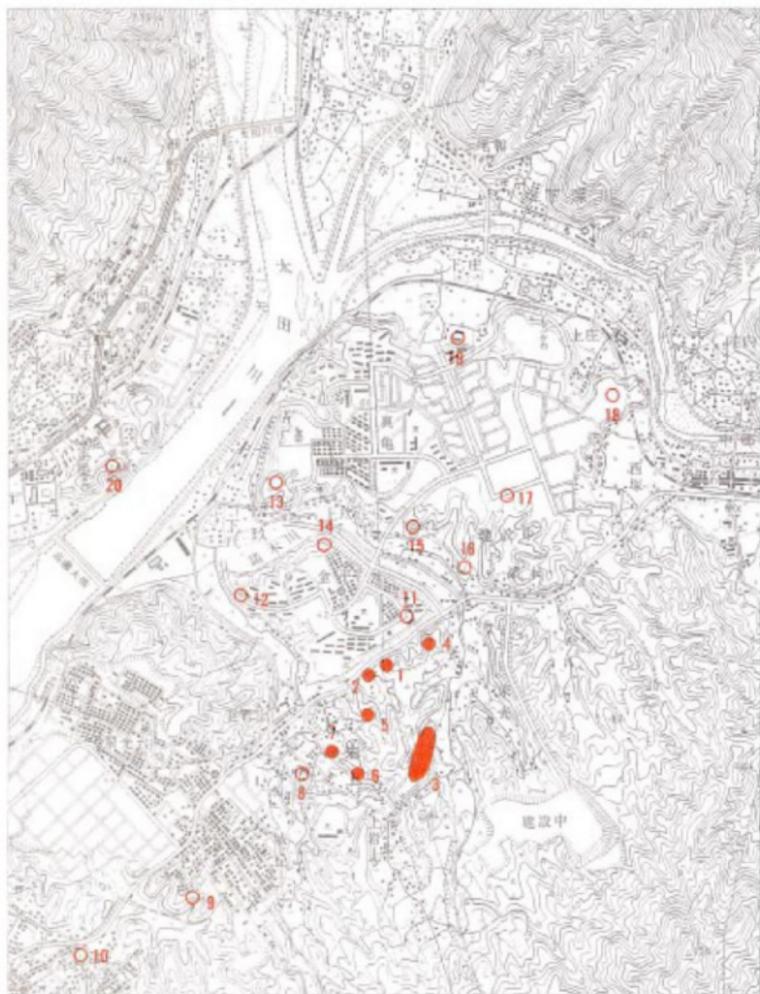
調査の実施に係る関係者は、下記のとおりである。

調査委託者	広島市高陽町岩上土地地区画整理組合
調査主体	広島市教育委員会
調査担当係	広島市教育委員会社会教育部社会教育課文化財係
調査関係者	信井正行 社会教育部長(現中央図書館長) 森脇昭之 社会教育部長 成田誠雄 社会教育課長(現青少年センター館長) 上川孝明 社会教育課長 佐藤普門 社会教育課主監 有谿盈雄 社会教育課文化財係長(現馬木公民館長) 木原亮 社会教育課課長補佐兼文化財係長
調査者	桧垣栄次 社会教育課文化財係主事 幸田淳 社会教育課文化財係主事 橋本義和 社会教育課文化財係主事

調査補助員(順不同)

吉岡肇、清水池アキエ、沖川義登、瀬垣昭義、住川努、西村雄太郎、谷本正夫、住川幸恵、迫井秀吉、蔵本節美、吉広ナミヨ、城山志信、桑田テル子、住川香代子、重本君子、井手文子、重本キヨミ、石丸千代子、城山正則、城山ヨシ子、倉本節枝、山本敬昭、中藤喜代子、坂本七五登、三浦君子、河合淳子、河合五十鈴、橋本礼子、河田キミエ、土井勝子、山村久登、織田恵子、上林陽子、岡原節子

なお、広島市高陽町岩上土地地区画整理組合、株式会社熊谷組、高陽公民館、保存科学研究会理事宇野栄氏、広島県文化財保護指導員三野文一氏、小田一義氏、はにわ会会員井手三千男氏のほか多くの方々には、調査を円滑に進めるため多大なご配慮を頂いた。さらに、報告書作成にあたっては、広島大学考古学研究室、長崎大学医学部解剖学第2教室、横浜市三蔵台考古館、(財)広島県埋蔵文化財調査センター三枝健二氏、広島県立高陽高等学校教諭中田昭氏等から広範な教示を得た。ここに記して謝意を表わしたい。(橋本)



1. 末光遺跡群 A-1 地点, 2. 同 A-2 地点, 3. 同 B 地点, 4. 同 C 地点, 5. 同 D 地点,
6. 同 E 地点, 7. 岩上城跡, 8. 岩上貝塚, 9. 高陽台遺跡群 A 地点, 10. 中矢口遺跡,
11. 大井遺跡, 12. 地藏堂山遺跡, 13. 恵下山遺跡群, 14. 山手遺跡, 15. 寺迫遺跡,
16. 諸木遺跡群, 17. 西山・北山遺跡群, 18. 龜崎遺跡, 19. 狐ヶ城遺跡群, 20. 八木城跡

第 1 図 末光遺跡群の位置と周辺の主要遺跡

## II 位置と環境

広島市域を流れる県西部最大の河川太田川は、広島県北西部の冠山（標高1339m）に源を発し、多くの支流を合わせつつ、広島市北部の可部、高陽町付近で根の谷川、三篠川と合流し、広島デルタを形成しながら広島湾に流れ込んでいる。

この太田川の東西には、阿武山（標高586.4m）・武田山（標高410.9m）・ニヶ城山（標高483.2m）など400～500mの山々が連なっており、それらの山々から延びた急峻な尾根が150～200mあたりでややゆるやかになり、東岸の高陽町周辺では、100m以下の低丘陵が河岸にまで迫っている。

また、太田川は昭和40年に大氾濫し、この時、高陽町域は大きな被害をうけている。このように灌漑・治水技術の発達している昨今でさえ、ある程度の規模をもつ河川を制御することは困難であったようで、それにもまして、土木技術が未熟であった往古では、本河川下流域の沖積地は安定しておらず、稲作等を行うのには適していなかったと考えられる。そのうえ、弥生時代後期頃には、この周辺でも人口が飛躍的に増加し、鉄器等の農具の発達も著しいものであったようで、これ以前は中山貝塚など低位に位置する小河川周辺の湿地等を可耕地にしていたと考えられる人々が、小河川を遡上しながら新しい可耕地をもとめ、集落を丘陵上で営みつつ、その傍の谷間で水田耕作を行ったと思われる。このことは、高陽町一帯から検出された多くの遺跡が、小河川の流れる谷あいを見おろす丘陵上に立地していることから明白で、今回報告する末光遺跡群もまたこうした遺跡のひとつである。

末光遺跡群は、広島市安佐北区高陽町大字末光・岩上および諸木にまたがって散在している。本遺跡群はニヶ城山から北に派生した丘陵上に位置しており、遺跡群をはさむように東西両側には、岩ノ上（落合）川、襟面（諸木）川と呼ばれる小河川が流れており、この地域としては比較的広い可耕地を形成している。また、北側はニヶ城山から延びてきた丘陵が若干落ち込み鞍部となっており、南側は大きな谷がはいり込んでいる。末光遺跡群は、A～E地点の5地点からなり、昭和55、58年度の発掘調査の結果、A・B地点は竪穴式住居跡及び墳墓からなる遺跡であり、C地点は土壌で、D・E地点は竪穴式住居を中心とした遺跡であることがわかった。そのほかに、中世山城（岩上城跡）も確認されている。

以下、末光遺跡群周辺に所在する主要な遺跡について概括してみたい。

本遺跡群の所在する高陽町一帯では、先土器・縄文時代の遺跡はほとんどみられず、わずかに弘由貴跡か

(注1)

ら縄文土器が出土している。市域においても、縄文時代の遺跡としては、比治山貝塚・中山貝塚など数例が確認されているのみで、現在のところ住居跡等の遺構は検出されていない。しかし、弥生時代にはいるとこの高陽町域においても遺跡の数は急増するが、そのほとんどが後期に属するものであり、中期の遺跡として

(注2)

弘由貴跡の弥生配石遺構が知られているにすぎない。

さて、末光A-1、B、D、E地点遺跡と同様に住居跡を伴う遺跡としては、高陽ニュータウン造成時に見つかった大井B地点遺跡・山手A地点遺跡・真亀遺跡群、寺迫遺跡・西山遺跡・北山遺跡等があげられる。

これらは、いずれも標高50～80mの低丘陵上に位置しており、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての

(注3)

竪穴式住居跡からなっている。このほかには、城前遺跡、高陽台遺跡群、中矢口遺跡が住居跡を伴う遺跡である。このうち特に、城前遺跡からは、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての10×8mを測る太田川下

(注4)

流域最大級の方形プランを有する竪穴式住居跡が2基見ついている。また、高陽台遺跡群B地点において

(注5)

は、弥生時代後期後半頃の竪穴式住居跡とともに太田川下流域初見の高床式の建物跡が検出されている。

では、末光遺跡A-2・B地点と同様に墳墓を中心とした遺跡としては、西願寺遺跡群、高陽台遺跡群、

禅昌寺西遺跡があげられる。西願寺遺跡群は、弥生時代から古墳時代前半にかけて営まれたもので、県内で  
(注6)

も希少な河原石で構築された竪穴式石室をはじめとし、箱式石柏や土壇墓などで構成されている。高陽台遺  
(注7)

跡群B地点は、箱式石棺及び粘土嚢で、禅昌寺西遺跡は箱式石棺及び土壇墓で構成されたもので、ともに弥  
(注8)

生時代後期から古墳時代前半期にかけて営まれたものである。

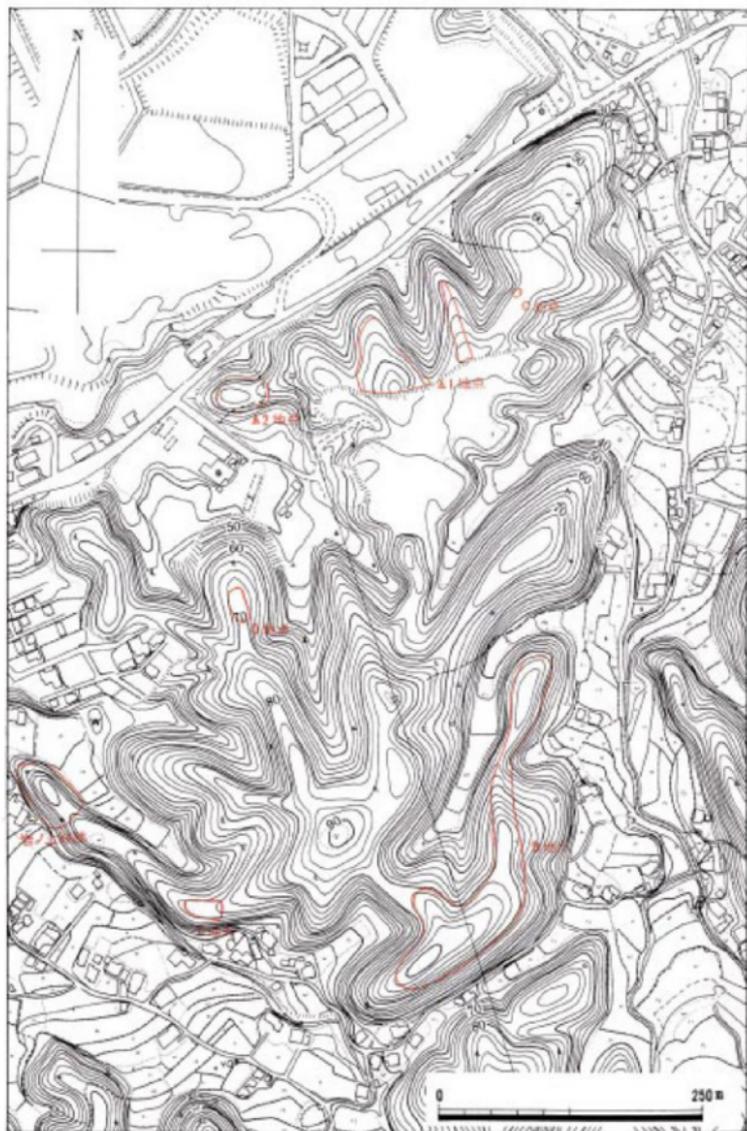
なお、末光遺跡群からは、A～E地点遺跡のほかに中世山城である岩上城跡が確認されている。このような山城は、この高陽町域においても、恵下山城跡・地藏堂山城跡・諸木城跡・亀崎城跡等が見いだされてお  
(注9)

り、市域では現在までのところ約150の山城が見つまっている。

一般的に安芸国内の中世山城は、東国に本拠をおいていた武士たちが、文永11年(1274)の蒙古襲来を契機として、安芸国内の所領に本拠を移し、その拠点として築城され始めたもので、その後、これらの武士たちは、たびたび抗争を起し、その都度離合集散を繰り返しつつ、自己の所領拡大を図っていった。しかしながら、江戸時代にはいると徳川幕府の強力な中央集権国家の成立により、この山城も、元和元年(1615)の一国一城令を境に、急速に衰退し、その役割を失っていた。(橋本)

(注)

1. 広島市教育委員会「弘住遺跡発掘調査報告」1983
2. 同上
3. 広島県教育委員会「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」1977
4. 広島市教育委員会「中矢口遺跡発掘調査報告」1980
5. 広島市教育委員会「高陽台遺跡群発掘調査報告」1982
6. 広島県教育委員会「西願寺遺跡群」1974
7. 注5と同じ
8. 禅昌寺西遺跡発掘調査団「禅昌寺西遺跡発掘調査報告」1980
9. 広島市教育委員会「山城」1982



第 2 図 末光遺跡群遺跡配置図

### Ⅲ A 地点遺跡

#### A-1 地点遺跡の概要 (第3図)

A-1 地点は、末光遺跡群の最地儲に位置し、諸木川によって形成された狭小な谷に向かって開いた小支谷の谷奥に派生した2本の小支尾根上に立地している。西側の尾根は試掘調査によって、尾根上に集落跡が存在することが推定された。調査は試掘調査の成果を参考に、西側の尾根は尾根線を中心に東西に分割した後、2m毎に幅2mのトレンチを設定し、東側の尾根(椎木山地区と呼称する)は、尾根線にトレンチを設定し、必要に応じて拡張を行うこととした。

調査の結果、西側の尾根上及びその斜面から5軒分の住居跡を検出した。尾根上に検出された住居跡は北から第1～3号住居跡、斜面から検出された住居跡は北から第4、5号住居跡と呼称することとした。遺物は、主にこの住居跡内に見られるが、第5号住居跡下方の斜面に多く集中して出土した。椎木山地区からは遺物のみが出土した。なお、調査区域の南端部は、土取り工事による崖面で、危険が予想されたため、調査範囲から除外した。



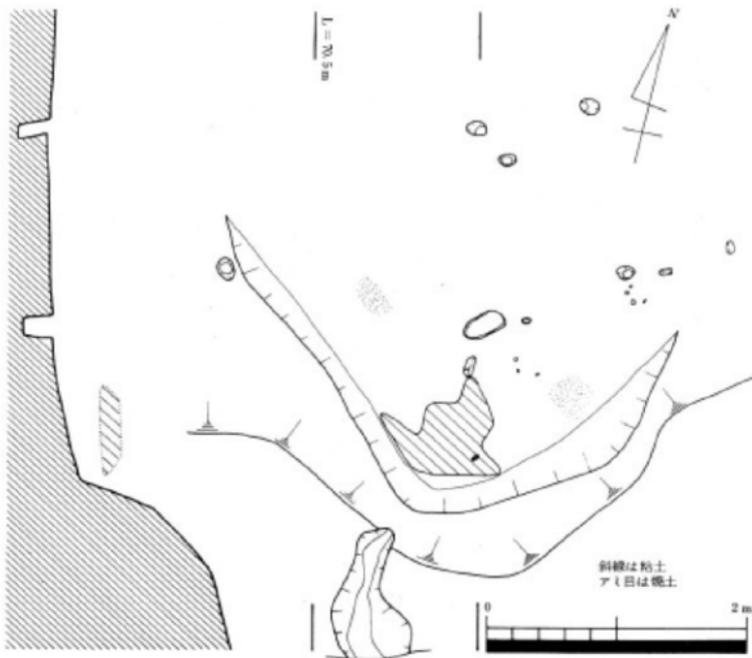
第3図 A1地点トレンチ及び遺構配置図

## 遺 構

### 1. 第1号住居跡(第4図)

尾根中心線よりやや東側斜面に寄った部分から検出された。地山を南側の高い方から約1.2m掘り込んで床面としている。斜面となる部分に造られているため、東側・北側の掘り方は見られない。検出した西側と南側の掘り方の長さは各々3m, 2mを測る。南西コーナーは若干鋭角的に検出され、全体のプランは整っているとは言いが、方形プランを意識したものと考えられる。床面からは、小ビットが数箇所検出されたが、柱穴と考えられるビットは、床面中央部の1カ所しか見られない。このため、本住居の規模は明らかにはできない。

遺物は、掘り方南西コーナー付近から、赤色粘質土と混じった状態で出土した。土器は破片のみで完形品は見られなかった。赤色粘質土は、比較的少量にまとまって出土しており、土器製作用の粘土の可能性が考えられる。

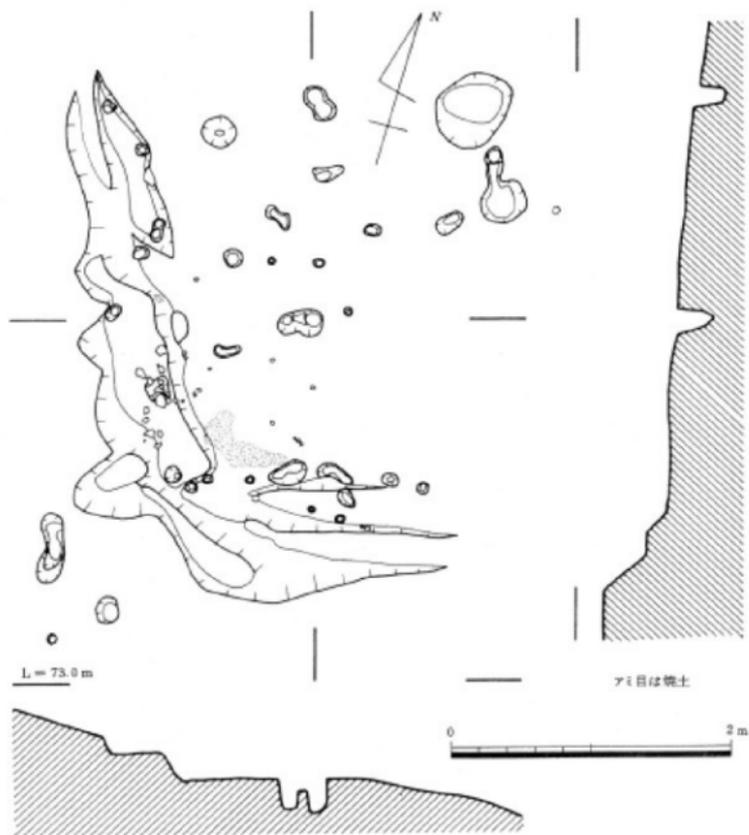


第4図 A-1地点第1号住居跡実測図

## 2. 第2号住居跡(第5図)

本住居跡は第1号住居跡の南側に隣接して尾根中心線からやや東側斜面に寄った部分から検出された。地山の高い部分を約30cm掘り込んで床面としている。地山が東、北側にゆるやかに傾斜しているため、東側と北側の掘り方は見られない。検出された西側及び南側の掘り方の長さは、明瞭に検出されないが、各6m、3mを測る。

掘り方上端から床面までに2段の狭い平坦面が見られる。この状態から、本住居は少なくとも3軒の重複がうかがえるが、明確にすることはできなかった。床面からは多数の小ピットが検出されたが、柱穴と考えられるピットは見られなかった。検出された掘り方の形状は、方形又は隅丸方形を呈しているが、明確にすることはできない。



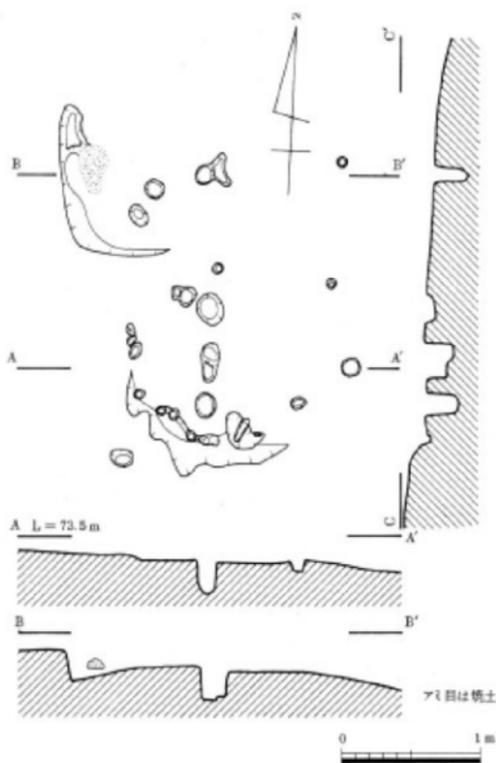
第5図 A-1地点第2号住居跡実測図

遺物は、掘り方壁面付近に出土したが、破片のみであった。

### 3. 第3号住居跡(第6図)

本住居跡は、第2号住居跡の南側に隣接して、尾根線中央よりやや東側斜面に寄った部分から検出した。掘り方と考えられる落ち込みは約1.5m離れて2カ所でほぼL字状に検出された。北側の掘り方は、最高で24cm掘り込んでおり、西及び南辺が検出され、長さは各1.5m、1mを測る。南側の掘り方は、最高で15cm掘り込んでおり、西及び南辺が検出され、長さは各々1mを測る。各掘り方の周辺から小ピットが検出されたが、柱穴と考えられるピットは見られなかった。この掘り方の検出状態、小ピットの検出状態、床面の凹凸が著しいことなどを考え合わせると、住居跡とすることは困難と言わざるを得ない。

遺物は、土器細片の他、南側の掘り方直近から砥石2点が出土した。



第6図 A-1地点第3号住居跡実測図

### 4. 第4号住居跡(第7図)

尾根中央より約10m下った西側斜面から検出された。地山の高い方を最高で37cm掘り込んで床面としている。壁に接して一部に壁溝が見られる。斜面に造られているため、床面の大部分は失われており、幅約1m、長さ約5.5mの狭い床面が検出されたにすぎない。床面からは柱穴は検出できなかった。検出された掘り方は、東壁にあたり、両端がわずかに屈曲しているところから、東壁はほぼ全体が検出されたと考えられる。このことから、本住居跡は、1辺約6mの方形又は隅丸方形のプランを呈するものと思われる。

遺物は、床面より土器細片が少量出土したのみである。

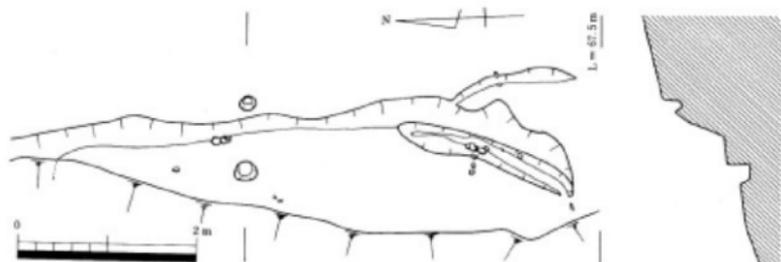
### 5. 第5号住居跡(第8図)

本住居跡は、3号住居跡の西側約10m、尾根線より約6m下った西側斜面より検出された。地山の高い方

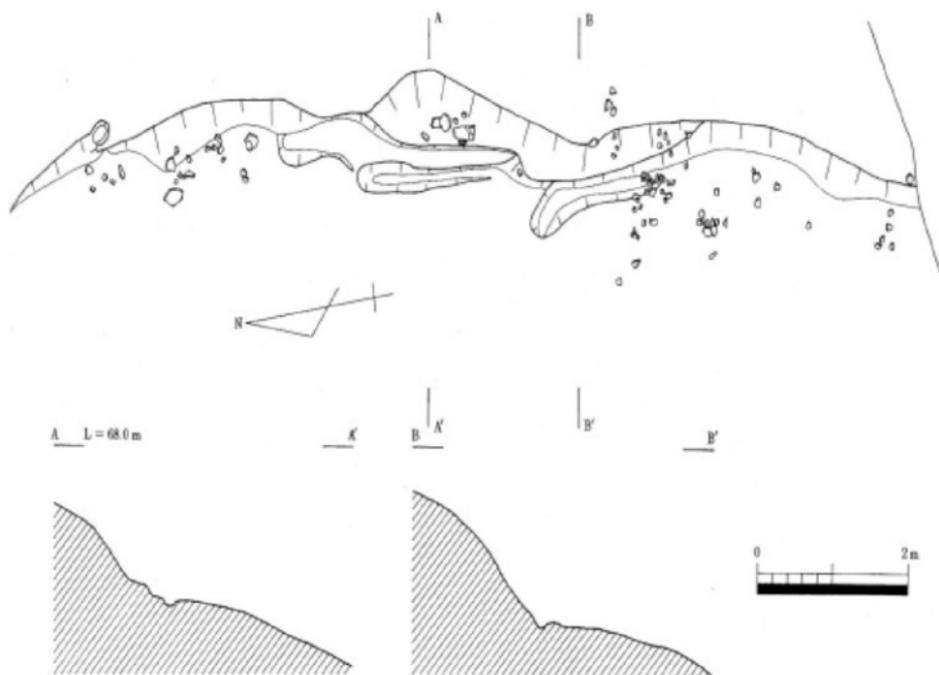
を最高で66cm掘り込んで、ほぼ南北方向に一直線状に長さ12.5mの落ち込みが検出された。この落ち込み下端に接して2カ所で短い溝が検出された。この落ち込みは、さらに南側に伸びているが、崖面となり危険なため検出することはできなかった。床面は傾斜をもって検出され、その範囲は明確に検出することはできなかった。床面より柱穴は検出することはできなかった。以上のことから、本住居跡を住居跡と断定することは困難と言わざるを得ないが、遺物の出土、壁溝と考えられる溝が検出されたことから、住居跡の可能性が強いと言える。この場合、住居の平面プラン、規模は明確にすることはできない。しかし、掘り方、壁溝の検出状態から3軒の重複が考えられよう。

遺物は、掘り方直近に並行して検出されたが、全て破片の状態であった。

なお、本住居の約6m下方から、多量の土器が破片の状態出土した。この土器群は、この住居に伴う可能性が考えられる。



第7图 A-1地点第4号住居跡実測図



第8图 A-1地点第5号住居跡実測図

## 遺 物

本地点からは、調査区域のほぼ全域にわたって遺物が出土した。特に西側斜面からは破片の状態が多量に出土した。遺物は大部分が土器類で占められており、その他の遺物は、砥石2点、刃器1点のみであった。

土器類の内訳は、楕形土器が多く、次いで壺形土器で、少量の高坏、甌が見られた。

サイドスクレイパーは、A-1地点内表面採集されたもので、結晶質の粗い安山岩系石材を用いており、全長5.7cm、幅2.6cm、厚さ約0.8cmを測る。

平坦な自然面を打面とし、剥片下辺に背面側から比較的純い角度のリタッチが施され、直線状の刃部を作り出す。背面及び主要剥離面はほぼ同一の剥離方向を示し、共に打点部附近で細かなステップを起こす。打撃方向に対する石理方向は順目を示す。

自然面のカーブ、背面及び打面の状況等から、拳大前後の安山岩亜円～円礫を表材に、母岩分割→自然面对打面の剥片剥離が想定される。

出土状態から、弥生時代後期前半頃と考えられる。



第9図 A-1地点出土サイドスクレイパー実測図

表1

## A-1地点 出土土器観察表

No	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
1	1 住	甕	口径 13.2 器高 不明	「くの字」状に強く外反する口縁部をもち, 端部は上下に肥厚しつつ平たくおさめている。	磨減が著しく調整法不明, 頭部屈曲部の約1cm下方に波状文を施しているが, 磨減のため条数については明らかではない。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 不良
2	1 住	甕	口径 14.0	「くの字」状に外反する口縁部をもち, 端部はやや丸みを帯びながらも平たくおさめている。	表面 磨減のため不明 内面 胴部はヘラ削り。	外面 橙褐色 内面 褐色 胎土 良好 焼成 軟調
3	1 住	甕	口径 12.0 器高 不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち, 端部はやや丸みを帯びながらも平たくおさめている。	磨減が著しく調整は不明であるが, 内面胴部はヘラ削り。	内外面とも褐色 胎土 良好 焼成 軟調
4	1 住	甕	口径 15.1 器高 不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち, 端部はやや器厚を減じつつ丸くおさめている。	磨減が著しく調整法不明。	内外面とも褐色 胎土 良好 焼成 不良
5	2 住	甕	胴部最大径 21.5 底径 8.2 器高 不明	卵形の胴部とし, 底部はやや凸気味としており, 不安定な器形としている。	外面 ハケ調整 内面 ヘラ削り	内外面とも暗褐色 胎土 良好 焼成 やや軟調 器壁外面スス付着
6	2 住	甕	口径 11.6 器高 不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち, 端部はわずかに肥厚し平たくおさめている。	外面は横ナデ, 内面口縁部は横ナデ, 頭部屈曲部以下は斜方向のヘラ削り。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 やや軟調
7	2 住	壺	口径 14.0 器高 不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち, 端部は下方にやや拡張し, 平たくおさめている。	外面 横ナデ 内面 屈曲部まで横ナデ, 以下はヘラ削り。	内外面とも暗褐色 胎土 良好 焼成 良好
8	5 住	壺	口径 23.0 器高 不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち, 端部はやや肥厚しつつ平たくおさめている。	外面は口縁部から胴部最大径あたりまで横ナデ, 以下はヘラナデを施している。内面は磨減のため不明。頭部屈曲部より約1cm下方に3本のヘラによる刻みが全体で何カ所であるかは不明。	外面 赤褐色, 黒斑あり 内面 橙色 胎土 良好 焼成 やや軟調

No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
9	3 住	壺	口径 19.4 器高 不明	強く外反する口縁部をもち 端部は肥厚しつつ平たくお さめている。	磨滅のため調整不明。	内外面と暗褐色 胎土 やや不良 焼成 軟弱
10	4 住	甕	口径 14.5 器高 不明	ゆるやかに外反する口縁部 をもち, 端部は器厚を保ち つつ, やや丸みを帯びなが らも平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。	外面 橙褐色 内面 褐色 胎土 やや不良 焼成 不良
11	4 住	甕	口径 10.1 器高 不明	ゆるく外反する短かい口縁 部をもち, 端部は器厚を保 ちつつ平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。頸部屈曲 部より約0.5cm下方ぬ「ノ」字 状の刻みが施されている可能性 がある。	内外面とも橙色 胎土 良好 焼成 不明
12	5 住	甕	口径 17.0 器高 不明	ゆるく外反する口縁部をも ち, 端部は肥厚しつつ平た くおさめている。	磨滅により調整法は明瞭ではな いが, 外面は口縁部より施文部 までは横ナデ, 以下はヘラナデ と思われる。内面は不明である が, 胴部はヘラ削りと思われる。 頸部屈曲部より約1cm下方に2 条のクシ歯による「ノ」字状の 刻みが施されている。	内外面とも橙色 胎土 良好 焼成 軟調 胴部にスス付着
13	5 住	鉢(?)	口径 22.0 器高 不明	ほぼ垂直に立つ胴部からゆる く外反する口縁部をもち 端部に至って下方に拡張し やや凹気味に平たくまとめ ている。内面頸部屈曲部は 明瞭な稜線を有している。	外面は口縁部より頸部屈曲部 までは横ナデ, 以下は縦方向の ナデ, 内面は口縁部より頸部 屈曲部までは横ナデ, 以下は横 方向のヘラ削り。	外面 黄褐色 内面 暗黄褐色 胎土 やや不良 焼成 やや軟調
14	5 住	壺	口径 22.6 器高 不明	外反する口縁部を上方に ほぼ垂直に拡張し, 幅約4 cmの施文帯としている。	内外面とも横ナデを施している。 施文帯のほぼ中央部に3条の波 状文を施し, その下に径約1mm の竹管の刺突をめぐらせている。	内外面とも明黄褐 色を呈する。 胎土 良好 焼成 やや軟調
15	5 住	壺	口径 27.4 器高 不明	強く外反する短かい口縁部 をもち, 端部は肥厚しつ つ平たくまとめている。	外面は口縁部より頸部屈曲部 までは横ナデ, 以下は縦方向の ナデを施す。端部は4条の凹線 を施す。内面は頸部までは横ナ デ, 以下はヘラ削り。	内外面とも橙色 胎土 良好 焼成 良好

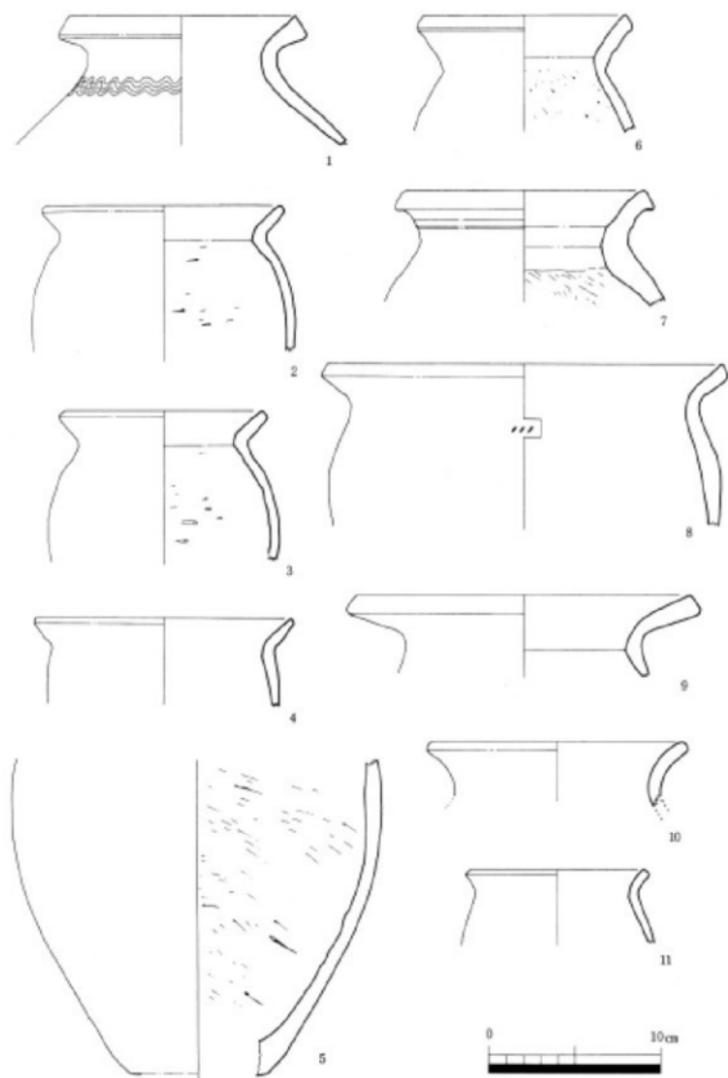
No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
16	5 住	甕	器高 不明 底径 7.2	球形の胴部に高台状の底部を貼り付けている。	外面はナゲ調整, 内面はヘラ削り。	外面 淡褐色 内面 灰褐色 ススが付着 胎土 良好 焼成 良好
17	5 住	壺	口径 18.2 器高 不明	ゆるやかに外反する口縁部をもち, 底部は平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。	外面 赤褐色 内面 褐色, 黒斑あり 胎土 やや不良 焼成 不良
18	5 住	甕	器高 不明 底径 3.6	胴部は卵形を呈し, 底部はやや凹底を呈する。胴部と底部は接合している。	外面はヘラナゲ, 内面はヘラ削りを施す。底部と胴部の接合痕が見られる。	内外面とも橙色 胎土 やや不良 焼成 軟調
19	西斜面 土器群	壺	口径 9.2 器高 9.7 底径 3.0	ゆるく外反する口縁部をもち, 底部は薄くなりつつ丸くおさめている。胴部最大径は器高のほぼ中位におく。全体に球形を呈し安定した印象を与える。	磨滅のため調整不明。口縁部は横ナゲ, 胴部上半部にヘラ削りの痕跡が見られる。	内外面とも橙色 胎土 やや不良 焼成 軟弱
20	西斜面 土器群	鉢	器高 不明 底径 5.6	わずかに外反する口縁部をもち, 底部は凹底としている。器高に比して, 最大径が大きくずんぐりした感を与える。	内面は磨滅のため調整不明。外面は口縁部は横ナゲ, 胴部は縦方向のナゲ, 底部は周辺はヘラ削り, 中心部は指頭による整形を行っている。	外面 橙色～淡褐色 底部 黒色 内面 橙色 胎土 良好 焼成 やや軟弱
21	西斜面 土器群	壺	口径 26.2 器高 不明	ほぼ直角に近く外反する口縁部をもち, 底部は肥厚しつつ平たくおさめている。	内面は磨滅のため調整不明。外面は横ナゲを施している。頭部屈曲部から1.5cm下方に「ノ」字状の長さ7～8mmのヘラによる刻みを施している。	内外面とも暗黄褐色 胎土 良好 焼成 やや軟弱
22	西斜面 土器群	甕	口径 12.5 器高 14.8 ～14.5 底径 4.4	胴部は卵を呈し, ゆるく外反する短い口縁部をもち, 底部はやや薄くなりつつ丸くおさめている。底部はわずかに凹底を呈している。外面頭部屈曲部より1cm下方にぶい稜線が見られる。	磨滅のため調整不明。内面胴部はヘラ削りと思われる。	内外面とも橙色 胎土 良好 焼成 軟弱 胴部下半スス付着

No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
23	西斜面 土器群	壺	口径 14.2 器高 不明	ゆるく外上方へ伸びる口縁部をもち、端部に至ってわずかに肥厚し平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 やや軟調
24	西斜面 土器群	甕	口径 12.5 器高 不明	ゆるく外反する短かい口縁部をもち、端部は器高を保ちつつ平たくおさめている。	内外面ともナデ調整。	外面 橙色 内面 暗褐色 胎土 良好 焼成 やや軟調
25	西斜面 土器群	甕	口径 13.6 器高 不明	強く外反する口縁部をもち、端部は肥厚しつつやや丸くおさめている。口径に比して胴部最大径は小さい。	口縁部は内外面とも横ナデ、以下は磨滅のため不明。	外面 明褐色 内面 黄褐色 胎土 良好 焼成 やや軟弱
26	西斜面 土器群	高坏	不 明	高坏の脚部と思われる。	磨滅のため調整不明。径11mmの円形の透かしは、外面から穿たれており、内面に粘土の盛り上がりが残存している。全体の配置は不明であるが、残存する部分から8か所に穿たれていたものと思われる。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 軟弱
27	西斜面 土器群	甕	口径 13.9 器高 不明	わずかに外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめている。	内面は磨滅のため調整不明。外面は口縁端部から1.8cm下方まで横ナデ、以下は縦方向のナデを施している。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 やや軟弱
28	西斜面 土器群	甕	口径 14.6 器高 不明	ゆるく外反する短かい口縁部をもち、端部はわずかに薄くなりつつ丸みを帯びながらも平たくおさめている。	外面は口縁部より施文部までは横ナデ、以下はハケ状工具による調整を施し、その後クシ歯状工具による押し引きによる施文を行っている。内面は口縁端部より頸部屈曲部までは横ナデ、以下はヘラ削りを施している。	内外面とも暗褐色 外面にススが付着 胎土 良好 焼成 良好
29	西斜面 土器群	壺	口径 14.2 器高 不明	外反する口縁端部を内側上方へ強く折り曲げ複合口縁としている。端部は薄くなりつつ丸くおさめている。	内外面ともナデ調整。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 やや軟弱

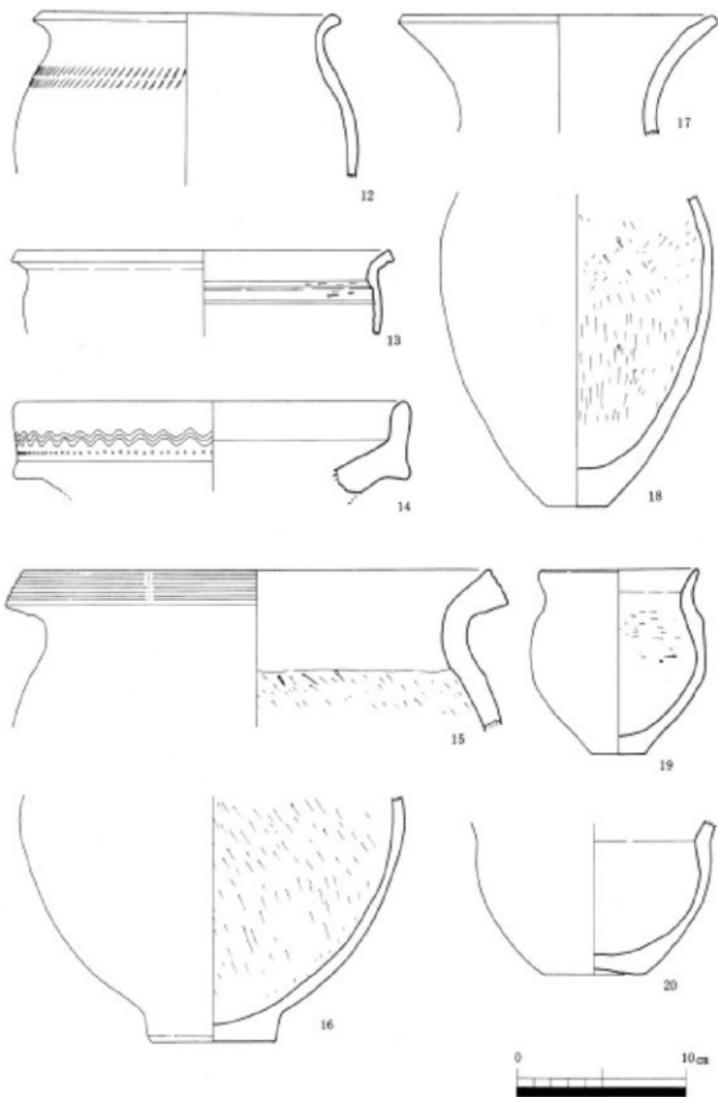
No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
30	西斜面 土器群	壺	口径 8.8 器高 不明	外反する口縁端部を内側上方に強く折り曲げて複合口縁としているものと思われる。	内外面ともナデ調整。	外面 暗赤褐色 内面 暗灰色 胎土 良好 焼成 やや軟弱
31	西斜面 土器群	甕	底径 3.2	わずかに凹気味の底部としている。	内面は磨滅のため調整不明。外面は胴部はヘラナデ、底面はナデ調整を施している。底部と胴部の接合の際の痕跡が見られる。	内外面とも暗褐色 外面にスス付着 胎土 良好 焼成 やや軟弱
32	西斜面 土器群	不明	底径 4.8	凸気味の底部としている。	内面は磨滅のため調整不明。外面はヘラナデ、底部と胴部を接合する際上方ヘナデ上げており、接合時の痕跡が見られる。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 やや不良
33	西斜面 土器群	瓶	底径 4.6 孔径 6~14mm	甕又は壺形土器の底部を穿孔して瓶としている本地点で唯一の出土である。	磨滅のため調整不明。底部の孔は焼成前に外側から穿たれている。	内外面とも暗褐色 胎土 やや不良 焼成 軟弱
34	西斜面 土器群	不明	底径 4.8	平底であるが、底面に凹凸が見られる。	磨滅のため調整不明であるが、底部内面中央は棒状工具による圧痕が見られる。	内外面とも橙褐色 胎土 良好 焼成 軟弱
35	西斜面 土器群	壺	口径 16.2 器高 不明	外反する口縁端部を上方内側に拡張し、複合口縁としている。頸部屈曲部に、幅2.4cmの突帯を貼り付け、格子状の刻みを施している。	磨滅のため調整不明。	内外面とも淡橙色 胎土 良好 焼成 軟弱
36	調査区内	壺	口径 15.4 器高 不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち、端部に至って上下に垂直に拡張し、幅1.8cmの施文帯としている。口縁端部を拡張したため、口縁内面に明瞭な稜線が見られる。	外面は横ナデの後、口縁端部に4条の凹線をめぐらせている。頸部屈曲部の下方に細かい「ノ」字状のヘラによる刻みをめぐらせている。内面は口縁部は横ナデ、頸部屈曲部から下位はヘラ削りを施している。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 良好
37	椎木山地 区	鉢	口径 器高	わずかに外反した短かい口縁部をもち、端部をわずかに薄くなりつつ丸くおさめている。	磨滅のため調整不明。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 不良

No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整、成形について	備考
38	椎木山地区	壺	口径 17.2 器高 不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち、端部は平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 不良
39	椎木山地区	壺	口径 8.8 器高 15.3 底径 2.6	胴部は卵形を呈し、ゆるやかに外反する短かい口縁部をもち、端部は平たくおさめている。底部はわずかに凸底を呈する。	外面は口縁端部から2.1cm下方までは横ナデ、以下は縦方向のナデを施している。内側は口縁端部から頸部屈曲部までは横ナデ、以下はヘラ削りを施している。外面頸部屈曲部から7mm下方に長さ5mmの細かい「ノ」字状の刻みがめぐらされている。	外面 暗褐色 内面 橙色 胎土 良好 焼成 やや軟弱
40	椎木山地区	甕	口径 11.2 器高 15.3 底径 2.4	胴部は卵形を呈し、「くの字」状に外反する口縁部をもち平たくおさめているが、一見複合口縁状としている。	磨滅のため調整不明。口縁部は横ナデ、以下不明。	内外面とも橙色 外面にスス付着 胎土 良好 焼成 やや軟弱
41	調査区内	壺	口径 16.0 器高 不明	ゆるく外反する口縁端部を内側上方へ折り曲げて施文帯とし、複合口縁としている。	磨滅のため調整法の看取は困難であるが、口縁内面は横ナデ、施文帯に長さ1.4cmのクシ歯状工具による押し引き施文が見られる。	内外面とも橙色 胎土 良好 焼成 不良
42	椎木山地区	壺	口径 17.2 器高 不明	ゆるく外反する口縁端部を内側上方に拡張し、端部は薄くなりつつ丸くおさめており、内面に明瞭な稜線が見られる。複合口縁を意識したものと思われる。	磨滅のため調整不明。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 不良
43	調査区内	壺	口径 10.8 器高 不明	わずかに外反する口縁部をもち、端部は外下方にわずかに拡張し平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。	内外面とも褐色 胎土 良好 焼成 不良
44	椎木山地区	壺	口径 14.2	「くの字」状に外反する口縁部をもち、端部はわずかに上方へ拡張しており、内面にふい稜線が見られた。一見複合口縁状を呈している。	外面はナデ、内面は口縁端部から頸部屈曲部まではナデ、以下は磨滅のため調整不明。	内外面とも赤褐色 胎土 やや不良 焼成 軟弱

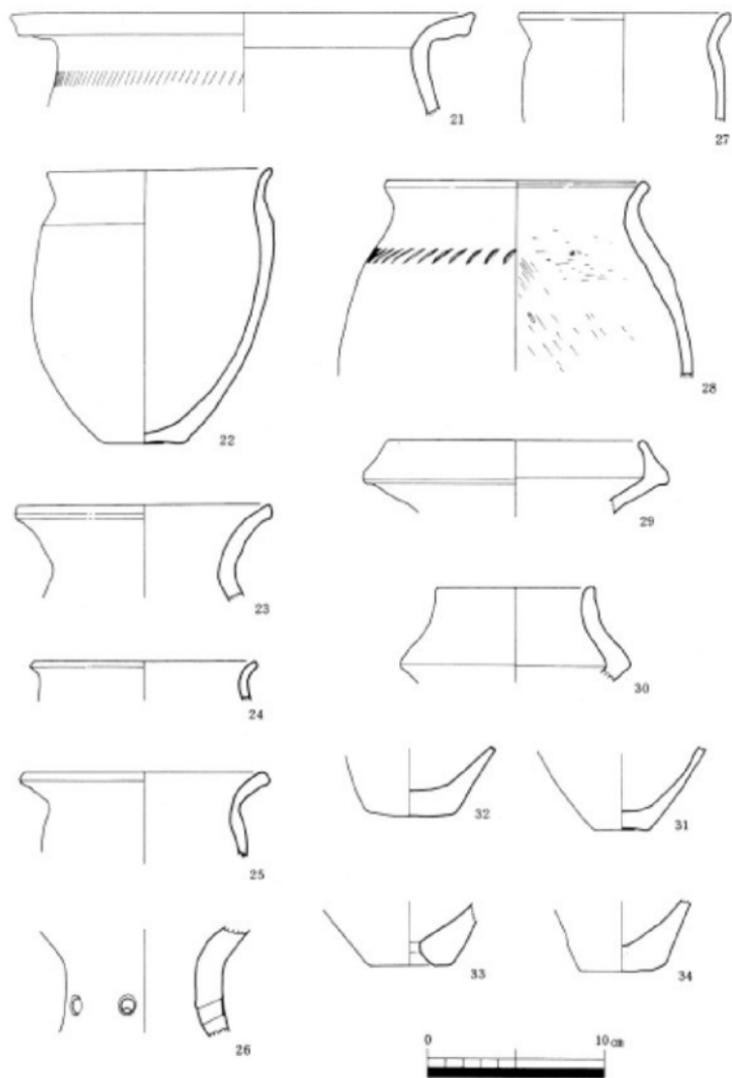
No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
45	調査区内	壺	口径 8.0 器高 不明	ゆるく外反する短い口縁部をもち、端部は薄くなりつつ丸くおさめている。	外面は口縁部より頸部屈曲部までは横ナデ、以下は縦方向のナデを施している。内面は口縁端部から頸部屈曲部までは横ナデ以下はヘラ削りの後、粗いナデを施している。	内外面とも橙褐色 胎土 良好 焼成 良好
46	調査区内	壺	口径 9.6 器高 不明	わずかに外反する口縁部をもち、端部はわずかに薄くなりつつ平たくおさめている。	外面は縦方向のハケ調整、内面は口縁端部から5cm下方までは横ナデ、以下は縦方向のハケ調整を施している。	内外面とも明赤褐色 胎土 やや不良 焼成 やや不良



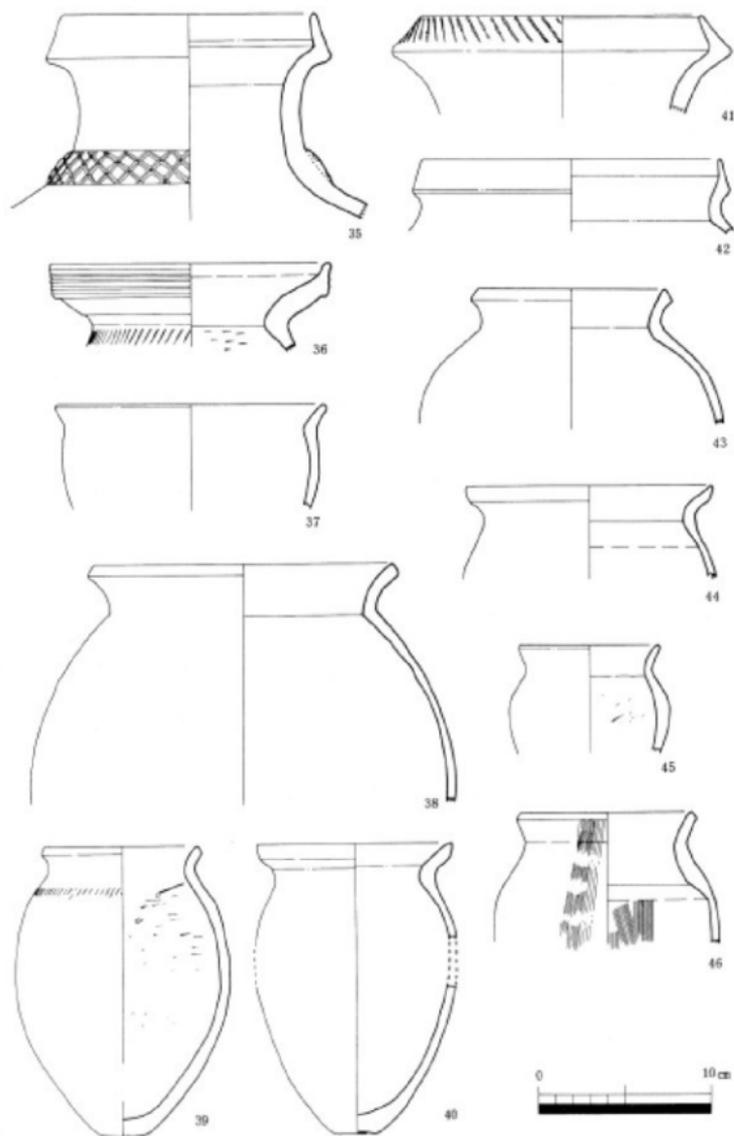
第10图 A-1地点出土土器实测图(1)



第11图 A-1地点出土土器实测图(2)



第12图 A-1地点出土土器实测图(3)



第13图 A-1地点出土土器实测图(4)

## 小 結

本地点は、以上のように住居跡5軒からなる集落であることが考えられた。しかし、検出された遺構は明瞭な竪穴式住居として検出されたものは見られず、特に2号住居跡、3号住居跡、5号住居跡については、住居跡としての疑義が残るもの。本報告では住居跡として扱うこととしたことを断っておかねばならない。また、本地点の南側は、土取り工事のため削平をうけており、この部分には、本来良好な尾根が展開していたことから、遺跡の中心は消滅した部分にあったと考えられよう。したがって、本地点は、この部分の周辺にあたりわずかに残存したものと思われる。

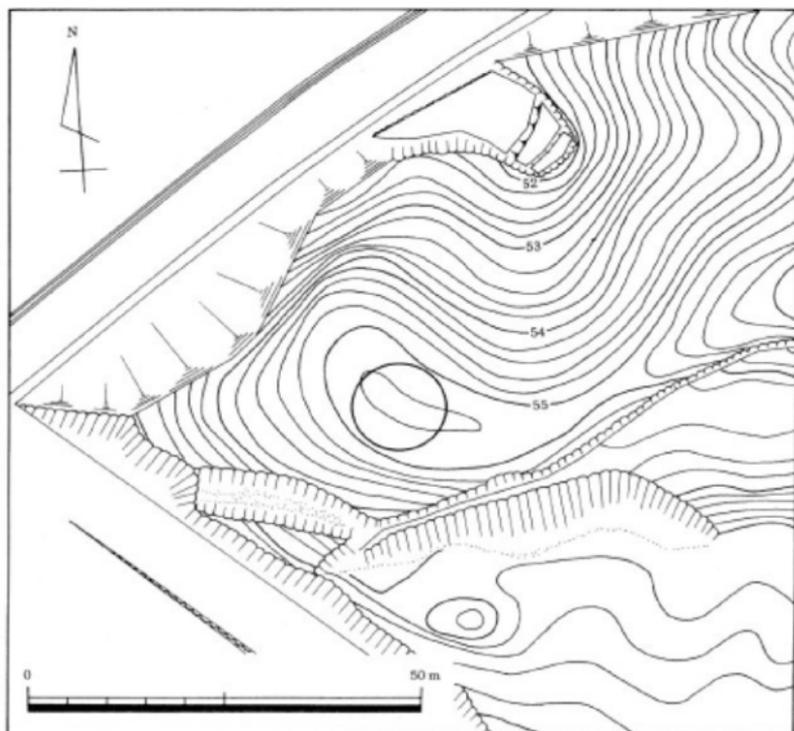
さて、本地点から検出した遺構は、住居跡5軒分である。これら5軒の内、2号住居跡、3号住居跡、5号住居跡については、2～3軒の建てかえの痕跡が見られ、最大で10軒分が想定された。しかし、各遺構の新旧関係については明らかにすることはできなかった。次に立地の点から見れば、本地点は、小支谷の谷奥に延びる小支尾根に位置し、周囲の眺望がきかない立地であることが指摘される。このような位置は、現在までに確認された遺跡が、諸木川によって形成された沖積地に面して展望のよい位置にあるか、又は比較的広い湧水点をもつ谷に面しているという特徴から見れば、極めて悪い立地であると言わざるを得ない。したがって遺構の残存状態の悪さを合わせて考えれば、これらの遺構が集落の中心的な存在ではなかった可能性もうなづけよう。

さて、本地点が営まれた時代については、出土した土器の特徴は、次の様にあげられよう。①器種については甕形土器、壺形土器が大部分を占める。②焼成は軟弱な土器が多い。③「く」字状に外反する口縁部の端は平たくおきめられているものや、④「く」字状に外反する口縁端部は薄くなりつつ丸くおさまられているものがある。⑤内面胴部はヘラ削り、口縁部は横ナデを施している。以上の特徴が指摘される。これらの特徴から、本地点出土の土器は上深川Ⅱ類、Ⅲ類に類似しているといえよう。量的には③の特徴をもつ土器が多く、④の特徴をもつ土器が少量混じっている。したがって、以上のことから、本地点は弥生時代後期中頃を中心に後期後半にかかる時に営まれたものと推定されよう。(松垣)

## A-2 地点遺跡の概要

A-2 地点は、A 地点の西約 150 m の北西に向かって突出した小尾根先端部に位置している。昭和 54 年度に実施した試掘調査の結果、尾根と直交する溝状遺構の一部及び頂部において土壌が 1 基確認されていた。このため、墳頂部を中心に四分割して調査区を設定し発掘調査を行った。

調査の結果、溝状遺構、階段状遺構及び土壌 10、弥生墳墓 1 が検出された。



第 14 図 A-2 地点遺跡地形図

## 遺 構

溝状遺構は、尾根が狭くなった部分から尾根と直交するように南北方向に、幅1.5m、深さ0.5m程度の規模で検出され、墓域の設定のための溝と考えられる。また、溝状遺構の南半部には、第10号土壌が位置している。

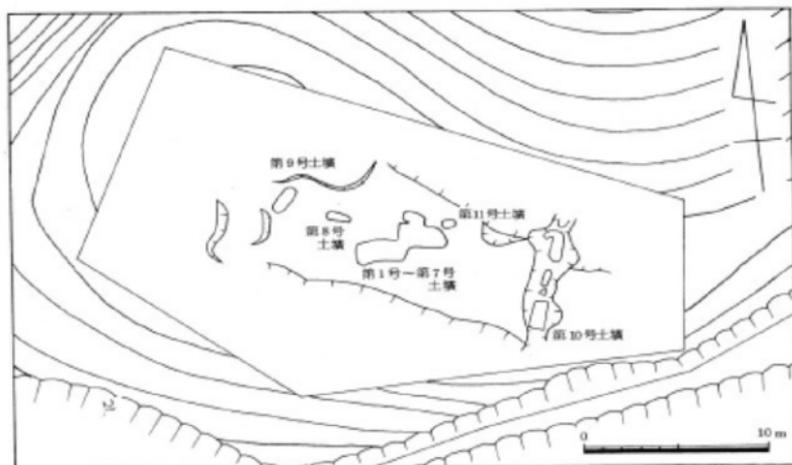
本墳墓の主体は全て土壌である。その規模等は別表に示したが、これを見ると、土壌は、長さ2m前後の大型のものと、1m前後の小型のものとの2種類に分けることができる。大型の土壌は5基あり、第2・第3・第4・第9・第10号土壌がこれにあたる。なお、第3号土壌は残存部はわずかであるが、他の大型の土壌と同程度の幅をもっていることから、大型の土壌に分類した。また第4号土壌は、床面中央に幅30cm～40cm、長さ1.5m程の範囲で赤色顔料が散布されていた。

次に主軸の方向についてみると、第2・第4・第5・第7・第9号土壌が東西を中心に北に20°、南に15°の範囲の中に納まっている。また第1・第6・第10号土壌は、南北を中心に東西25°の範囲の中にある。第3号土壌はほぼ北西～南東の方向を示している。

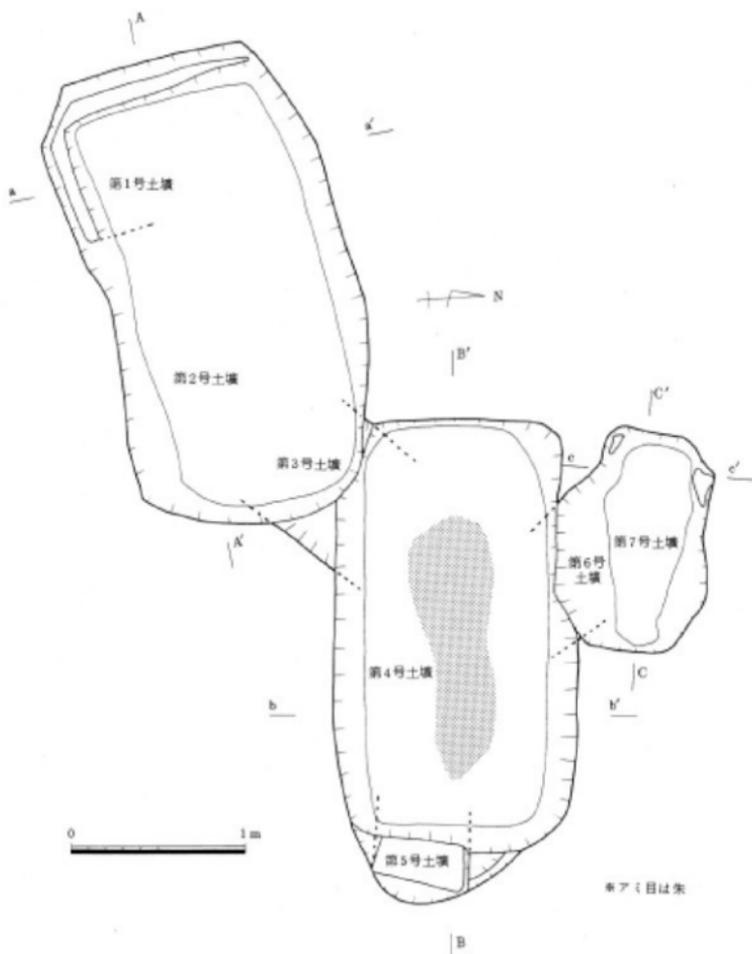
第11号土壌は、土器蓋土壌ともいえるもので、浅い土壌に遺体を埋置し、大型の壺を大きく上下に割って上半部を北側、下半部を南側に蓋をするようにかぶせ、そのすき間を小型の壺を割って埋めるような形で検出した。

また、土器の密集度は北側が高いことから、頭位は北側であったと考えられよう。

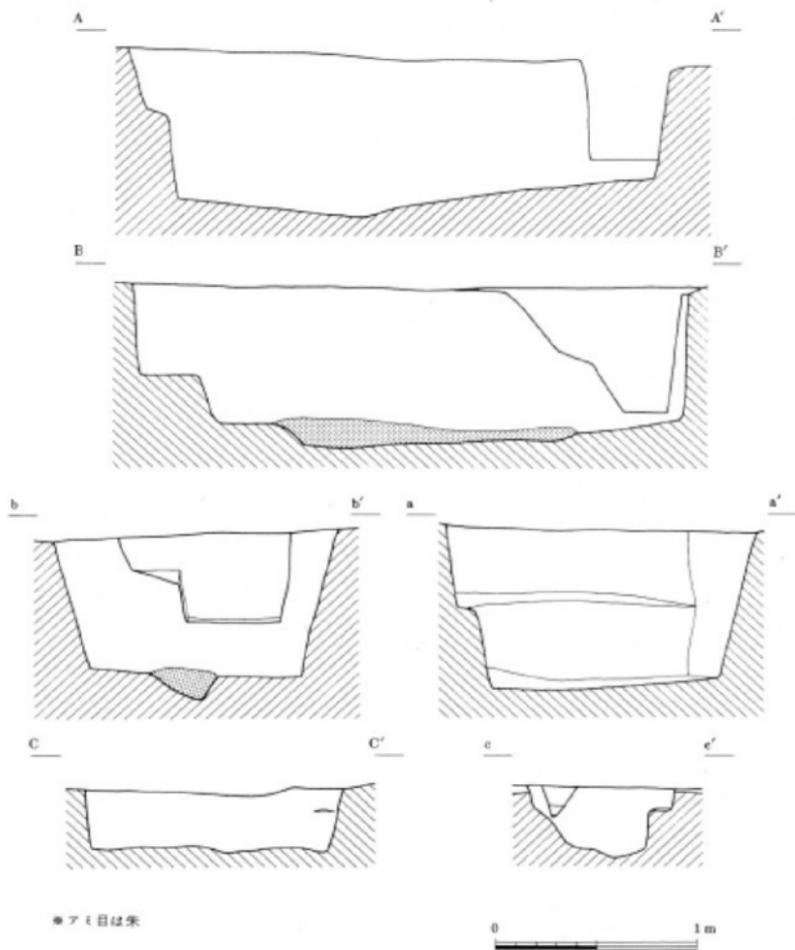
切り合い関係については、第1号～第7号土壌が相互に重複しているが不明確であった。



第15図 A-2地点遺構配置図



第16图 A-2地点第1~7号土壤实测图

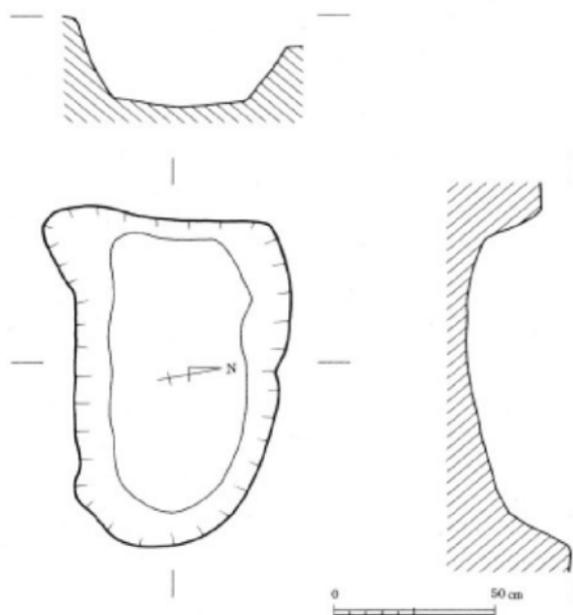


第17图 A-2地点第1~7号土壤断面实测图

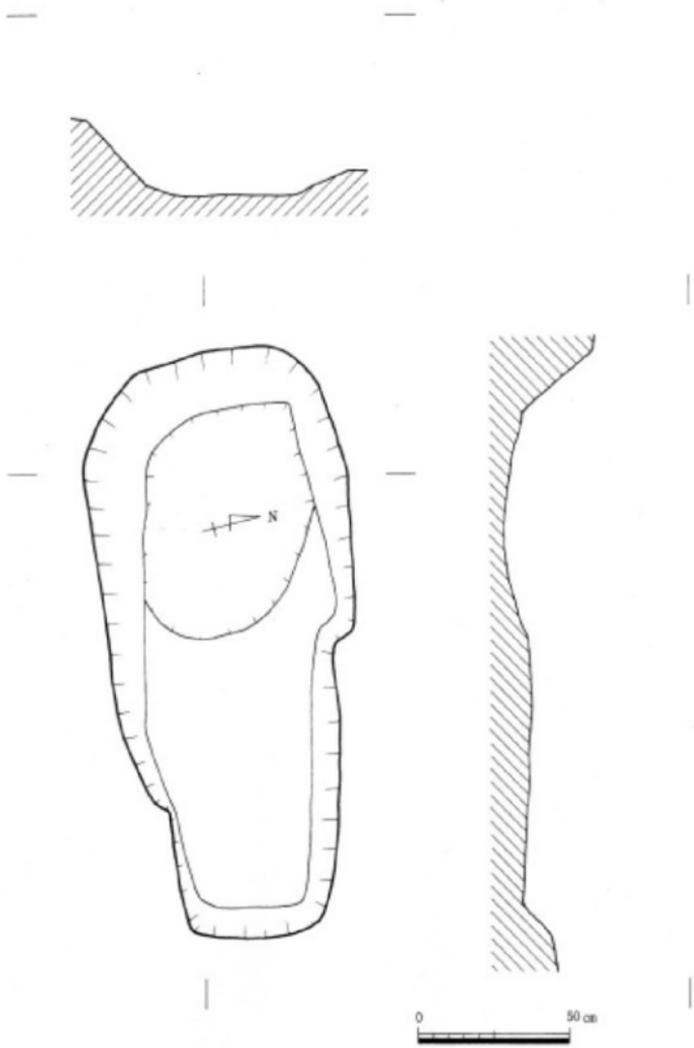
表2

A-2 地点土壌計測表

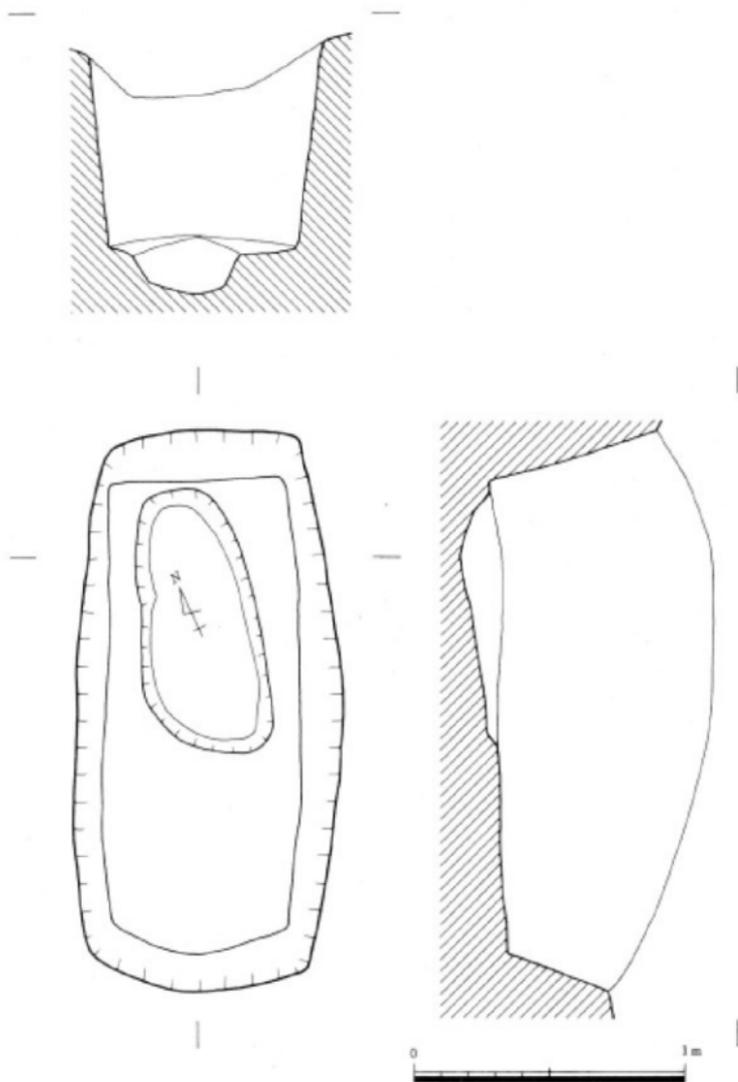
土壌番号	現在長 (cm)	現存幅 (cm)	現存の深さ (cm)	主軸の方位	その他
1		90	40	N 1° E	2号と重複
2	270	140	85	N89° W	3号と重複
3		80	65	N54° E	4号と重複
4	250	140	85	S86° W	赤色顔料散布, 5号, 6号と重複
5		55	50	S73° E	4号と重複
6		65	15	N24° W	4号と7号と重複
7	125	65	35	N79° W	6号と重複
8	120	65	25	N78° W	
9	190	85	25	S76° W	
10	205	100	90	N25° E	
11	76	63	15	N70° W	土器蓋土壌



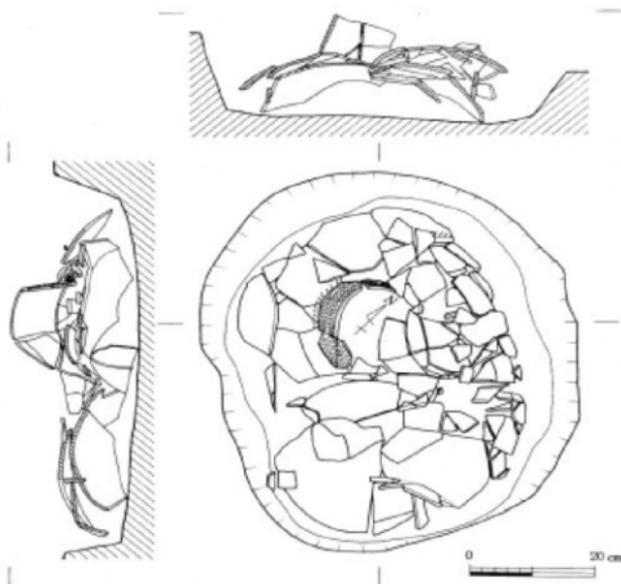
第18図 A-2地点第8号土壌実測図



第19图 A-2地点第9号土壤实测图



第20图 A-2地点第10号土壤实测图

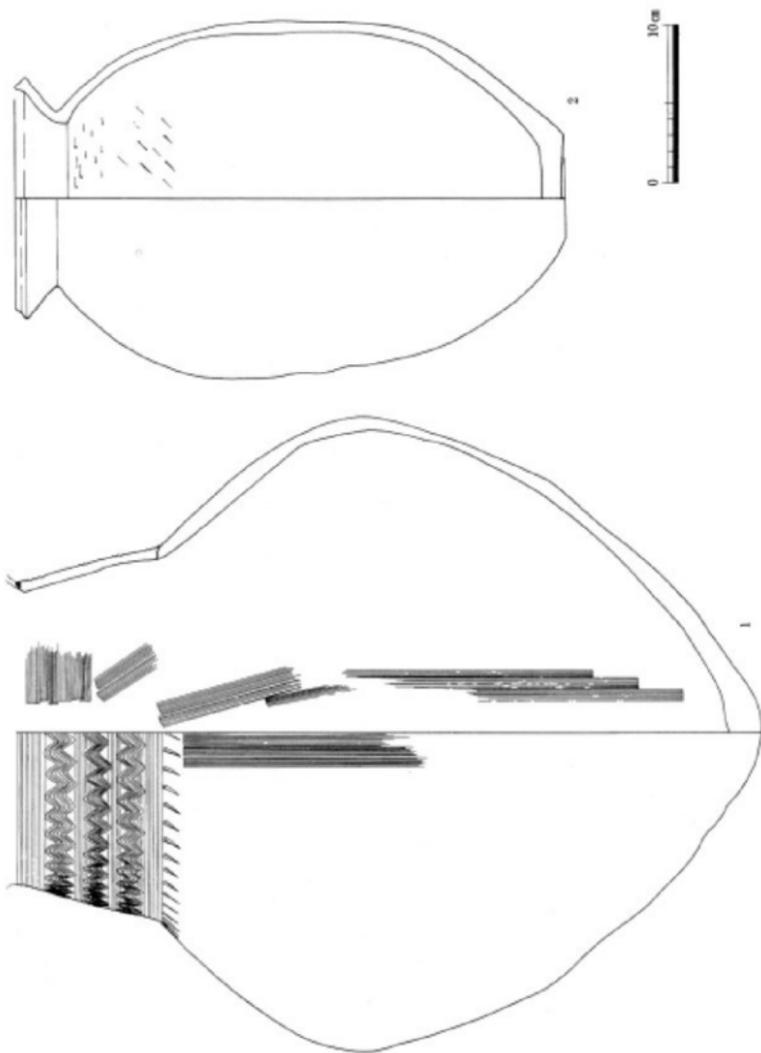


第21図 A-2地点第11号土壌実測図

## 遺物

本遺跡の遺物のうち、原形を復元し得るものは第11号土壌の土器2点のみであった。土器1の壺は、現存の器高43.3cm、胴部最大径40.2cmを測る。底部は、外見的には尖底を感じさせる丸底で胴上半部に最大径をもち、肩部から約8cmの高さをもつ頸部はゆるやかに内傾しており、口縁部は欠失している。器表面の肩部以下はタテ方向のハケ目が見られ、頸部内面にはヨコ方向、それ以下はタテ方向のハケ目が見られる。文様は、肩部にヘラによるノ字状の刻み目が施され、頸部施文帯には、3～4条の凹線文帯を4組設け、その間に8本歯のクシ歯状工具による波状文を3組施している。色調は黄褐色を呈し、焼成胎土とも良好である。

土器2の壺は、口径14cm、器高31.2cm、胴部最大径32.6cm、底径6.6cmを測る。底部はわずかに凹底で胴部のふくらみは少なく、ほぼ直立気味に上方に伸びる。口縁部は「くの字」状に外反し、口唇部に至ってわずかに上方に肥厚し、端部中央はわずかに凹線様のくぼみをもつ。調整は磨滅が著しく不明であるが、内面頸部以下にわずかにヘラ削りの痕跡を留める。色調は濃い赤褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む荒いもので、焼成も軟調である。



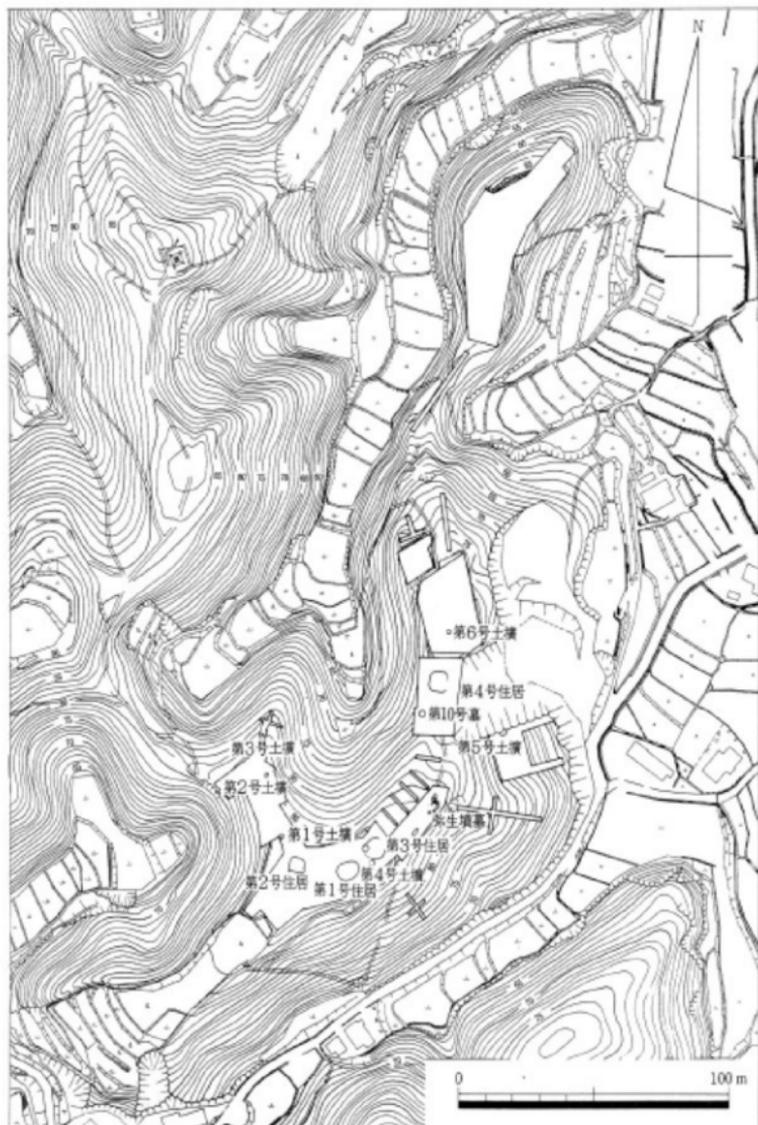
第22图 A-2地点第11号土坑出土土器实测图

## 小 結

A-2地点遺跡からは既述のとおり11基の土壌及び溝状遺構が検出されたが、遺物としては第11号土壌出土の壺2点及び少量の弥生土器片だけであったことから、この遺跡の営まれた年代を決定することは困難である。しかし、尾根の先端部を利用している点、同一の墓域の中に複数の主体部をもっている点や出土遺物等から考えて、弥生時代後期ないし古墳時代初頭と判断して大過ないであろう。

さらに、第1号～第10号土壌は主軸の方向をみると、第3号土壌を除く10基の土壌が、東西方向に主軸をもつグループと、南北方向に主軸をもつものとの2つの大きなグループに分けることができる。さらに、各グループを構成する土壌の形態などから、各グループの同時代性を推定することができよう。特に東西に主軸をもつグループは、相互に主軸の方向が近接している。これらのことから、本墳墓は時期的に大きく2つに分けて使用されたと考えることもできよう。

次に、第11号土壌についてみると、この土壌出土土器のうち土器1は、精製された土器であり、太田川流域では現在までのところ類例のない形態を示している点や、土器蓋土壌ともいえる施設に使用されていることから、特別に製作されたものと考えられる。しかし、頸部に施された凹線やクシ歯状工具によると考えられる波状文の組み合わせ、あるいは肩部にみられる「ノ」字状の刻み目の技法などから、弥生後期の特徴を備えている。土器2は、粗製であり、文様等も見られず、その使用のされ方から日用雑器の転用と考えられよう。この土器は、口縁部の形態や内面の調整技法等からみて、弥生後期のうちでもやや古い時期のものと考えられる。このことから、第11号土壌が弥生後期でも古い段階に造られたと考えられよう。(幸田)



第23図 B地点遺構及びトレンチ配置図

## IV B 地点遺跡

### B 地点遺跡の概要 (第23図)

本地点は、本遺跡群の南端、A地点より約500m南に位置している。試掘調査及び、地形観察により、遺構は尾根頂上部を中心に北及び北東に延びる2本の支尾根上に存在することが想定された。遺構の存在が想定された尾根上の平坦部は4カ所に見られた。調査にあたっては、平坦部は尾根上脊中心に2分割し、さらに任意に細分割して調査区を設定し、最終的には完掘を行った。さらに、斜面についても、遺構の存在が想定される部分はトレンチを設定し、確認を行い、必要に応じて拡張を行った。

調査の結果、尾根頂上平坦部に3軒、北東に延びる尾根のほぼ中間の鞍部に1軒の計4軒の竪穴式住居跡を検出した。また、この住居跡の周辺からは主に貯蔵穴と考えられる土蔵を7基、3号住居跡の東側の尾根平坦部から斜面にかかるあたりに墳墓10基を検出するとともに、多量の弥生式土器の外、砥石、人骨等が出土した。

## 遺 構

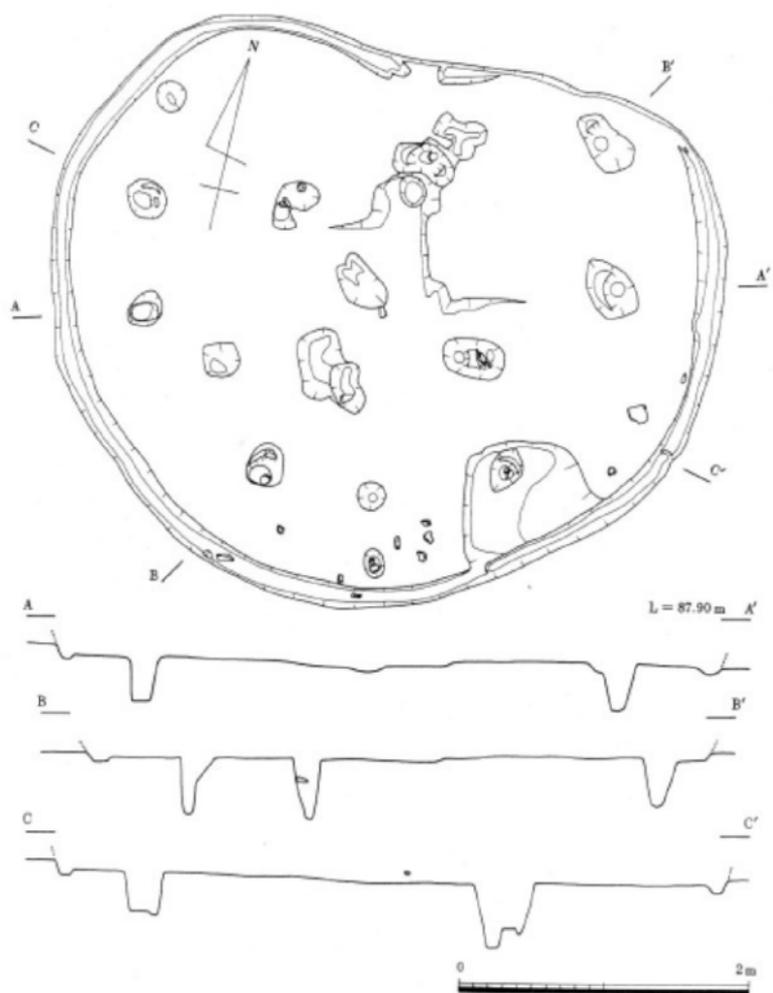
### 1. 第1号住居跡 (第24図)

本住居跡は、尾根頂上平端部のほぼ中央部で検出された本地点最大の住居跡である。地山を、北辺が直線呈する長円形に掘り込んで作られ、長径9.2m、短径7.5mを測る。壁の大部分は畑作による削平によって失われており、残存状態から、床面までの削平はうけていないと考えられる。壁溝は、北辺の一部を除いて、ほぼ全体にめぐらされており、幅20cm～35cm、深さ1cm～13cmを測る。柱穴は、壁より40cm～110cm離れた位置に、壁に平行して9本配置され、径40cm～60cm、深さ52cm～99cmを測る。柱穴間の距離は120cm～280cmを測るが、規則性に乏しい。床面中央部から、不整形のピットが検出され、炉跡と考えられる。埋土内には、木炭が含まれていたが、焼土は見られなかった。

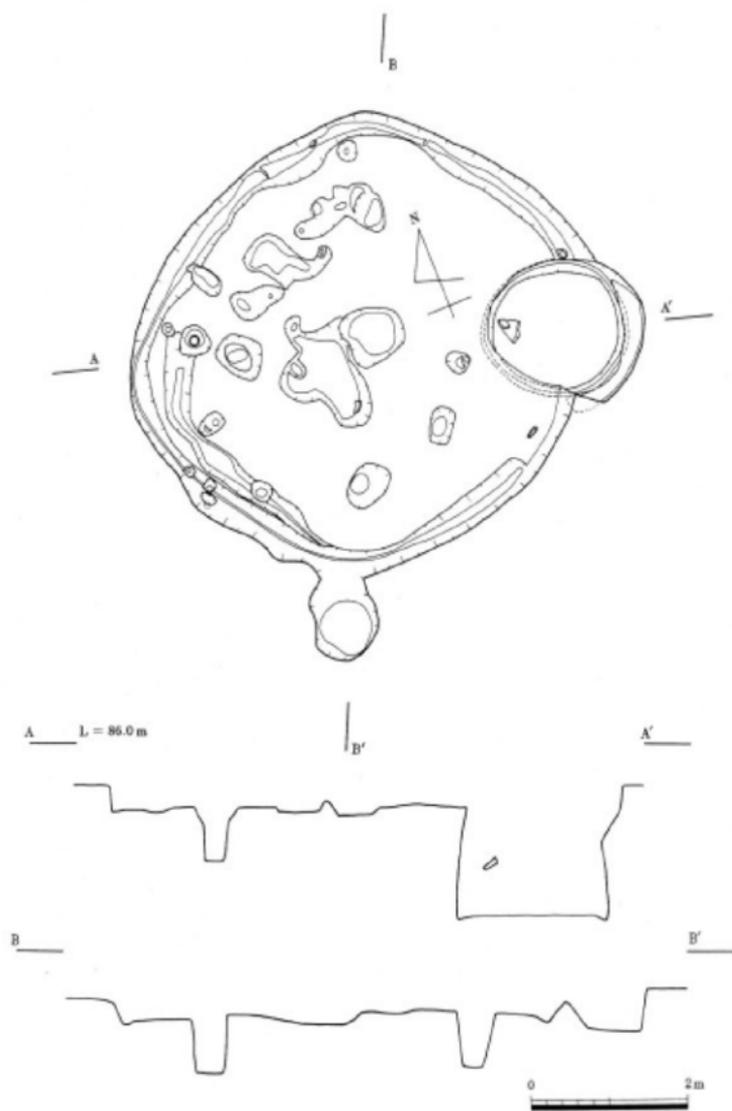
遺物は、南半部に散在して見られ、大部分は細片であったが、南辺中央部の壁直近の小ピット内から、口縁端部をわずかに欠失した長頸壺が横転した状態で出土した。

### 2. 第2号住居跡 (第25図)

本住居跡は、1号住居の西約13m、尾根頂上平端面の地端部の地山が、北側に向けてゆるやかに傾斜してゆくあたりに位置している。周囲は畑として利用されていたが、地山が傾斜しているためか、畑作による削平は認められなかった。地山を、円形に近い隅丸方形に掘り込んで作られており、5.7m×5.3mを測る。壁高は、地山が傾斜している北側に至って低くなっており、地端部はわずかに見られるにすぎず、最高で約30cmを測る。壁溝は、ほぼ全体にめぐらされており、北西側では2条となっており、幅20cm～40cm、深さ3cm～5cmを測る。柱穴は3本検出され、径50cm～60cm、深さ67cm～69cmを測る。床面中央部から65cm×78cmの焼土面が検出され、この範囲内に60cm×70cm、深さ15cmを測る不整形の土壌が検出された。埋土内からは、炭化物を含む黒褐色土が検出された。この土壌は炉跡と考えられる。南東コーナー部で、住居掘り方と重複して、口径1.8m×2m、底径2.2m×1.9m、深さ1.8m～1.4mの断面袋状を呈する土壌を検出した。本住居に伴う貯蔵穴と考えられる。底面は水平になっており、下端に接して浅い溝がめぐらさ



第 24 图 B 地点第 1 号住居跡实测图



第 25 图 B 地点第 2 号住居跡实测图

れている。土壌掘り方肩部より約30cm下った部分で幅15cmの狭小な平坦面を有している。この平坦面は、住居床面とほぼ同レベルであるところから蓋の受け部となる可能性がある。土壌内からは、角礫と土器片が出土した。南西部からは、住居掘り方外側で、100cm×80cm、深さ50cmの不整形の土壌を検出した。埋土内からは、土器細片が出土しており、本住居に伴うものと思われるが、性格は明らかにすることはできない。さて、本住居からは、3本分の柱穴しか検出されなかった。配置関係から考えれば、基本的には4本柱と考えられる。この場合、検出されなかった1本分は貯蔵穴内に配置されたものと考えられよう。貯蔵穴内に柱を建てた原因については明らかにすることはできないが、貯蔵穴内に入出入りする際の階段、又ははしごとの兼用を考えた結果ではないかと考えられる。

住居跡内からは、少量の土器片と河原石が出土した。

### 3. 第3号住居跡(第26図)

本住居跡は、第1号住居跡の東約5mの尾根線中央部に位置している。畑作により東半分は地山整形面より、約20cm下げられており、この部分では掘り方が消滅し、壁溝がわずかに残存しているのみであった。なお、本住居跡は工事中に発見され、西端部が一部削平されていた。

地山を径7.4mの規模に円形に掘り込んで作られている。壁高は残存している西側で最高約20cmを測る。壁溝は、ほぼ全体にめぐらされているものと思われるが、北東側で削平のため消滅している。残存している部分で幅約20cm～30cm、深さ約6cmを測る。柱穴は、壁より100cm～120cm離れてほぼ円形に9本検出され、径40cm～60cm、深さ70cm～80cmを測る。西側で、掘り方の一部を重複して口径1.6m、深さ1.4mの土壌を検出した。この土壌は、断面は袋状を呈し、底面は水平となる土壌で、本住居に伴う貯蔵穴と考えられる。

遺物は、南東側壁溝上で、ほぼ完形の鉢形土器1点の他少量の土器片が出土した。

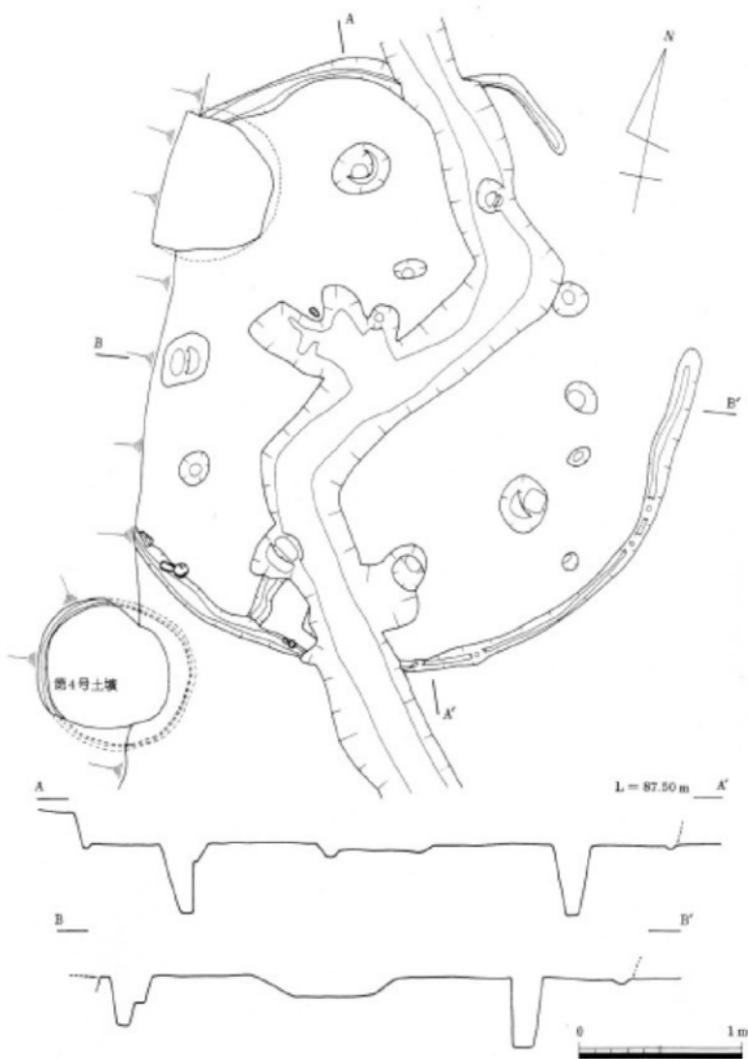
### 4. 第4号住居跡(第27図)

本住居跡は、3号住居の北東約65mの尾根上鞍部となる部分に位置している。住居の東側は土取り工事によって大きく削平され、崖面となっていた。

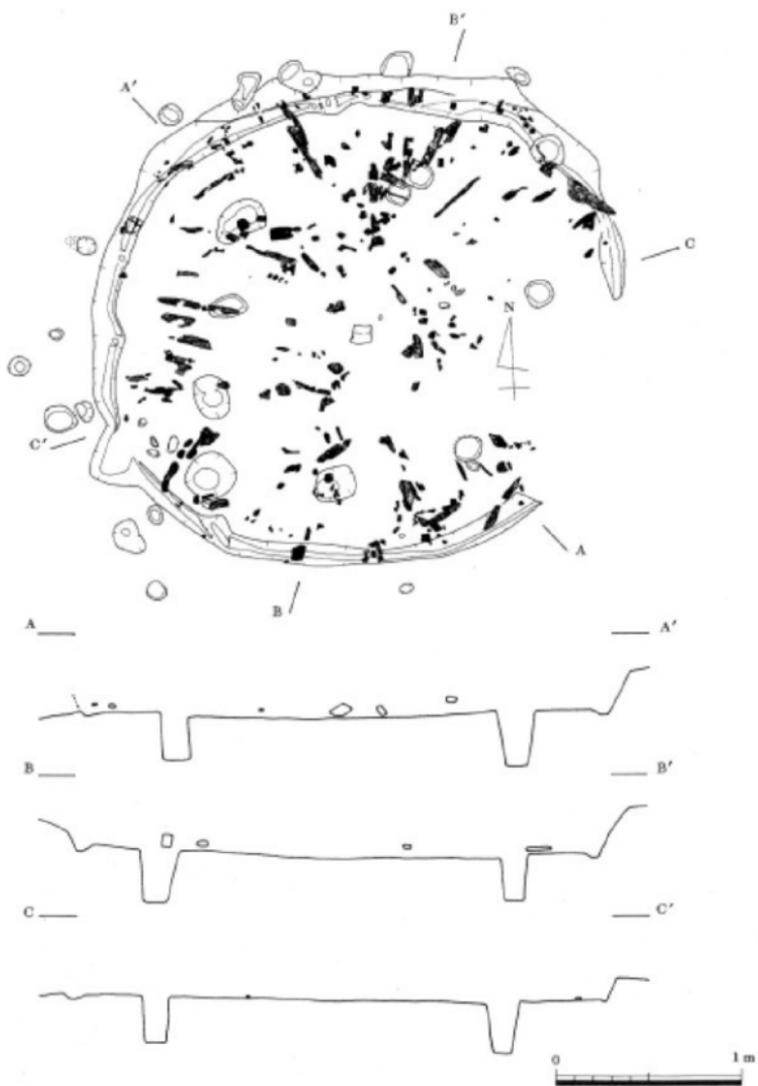
地山を径6mの円形に掘り込んでおり、壁は、東側の一部で土取りのため消滅しているが、残存する壁高は最高で約60cmを測る。壁溝は、ほぼ全体にめぐらされており、幅20cm～30cm、深さ5cmを測る。柱穴は壁より80cm～120cmの位置にほぼ円形に6本が配置され、径30cm～40cm、深さ49cm～67cmを測る。床面のほぼ中央部に角礫が検出され、周辺がわずかに凹んでいる。周辺が赤変しているため明確ではないが、炉跡の可能性はある。

本住居内からは、多量の炭化材と厚さ約20cmの灰層が検出された。床面及び壁面は赤変している部分が見られた。このことから本住居跡は焼失したことが確認された。炭化材は、ほとんど原形を保っていないため、上屋構造の復元は困難であるが、検出された炭化材の状態から、種木が放射状に構築されたことが推定される。柱材は、明確ではないが、柱穴上から検出された炭化材を手がかりとすれば、径10cm～15cmの木材を使用したものと推定される。壁の構造について明確にはできなかったが、東辺から炭化材が壁によりかかる状態で出土し、炭化材と地山との間から赤変した土が検出された。このことを手がかりとすれば、住居の壁は、壁溝上に木杭を立て、杭と杭との間に、板材又は丸太をわたし、地山との間に土を入れた構造としていたことが推定されよう。

遺物は、北辺の壁溝上の、床面から甕形土器1点の他少量の土器片が出土した。



第26图 B地点第3号住居跡及び第4号土壇実測図



第27图 B地点第4号住居跡实测图

### 5. 第1号土坑 (第28図)

2号住居北側約8mの、尾根中央部から検出した断面袋状を呈する円形土坑である。形状から貯蔵穴と考えられる。埋土上面から弥生式土器片が少量であるが検出された。

地山を開口部径118cm、底径128cm、深さ150cmに掘り込んで作られている。開口部端部から約30cm下った部分に幅80cmの狭小な平坦面が検出された。この平坦面はほぼ水平を保っているところから、本土坑の木蓋の受け部と考えられよう。底面は水平としており、周辺部に浅い溝がめぐらされている。

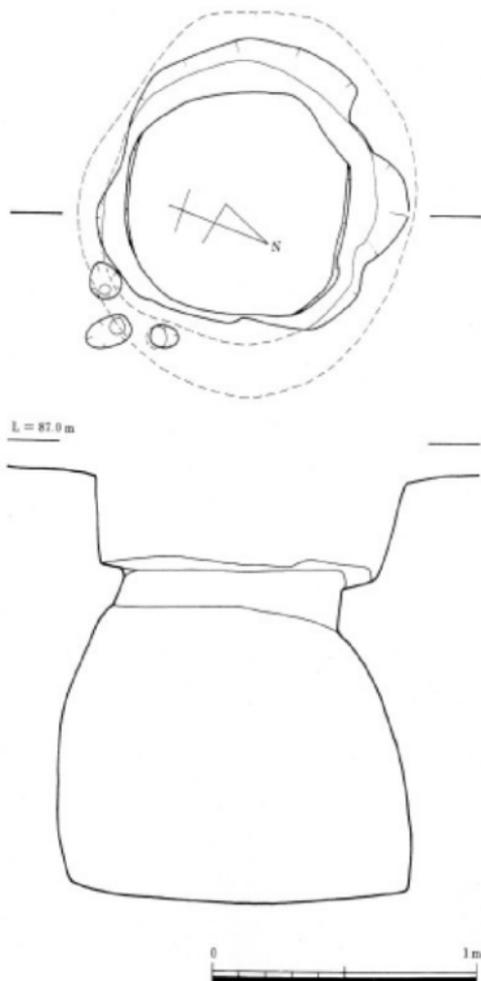
本土坑の伴うと考えられる遺構は周辺からは検出されず、確認することはできなかった。

### 6. 第2号土坑 (第29図)

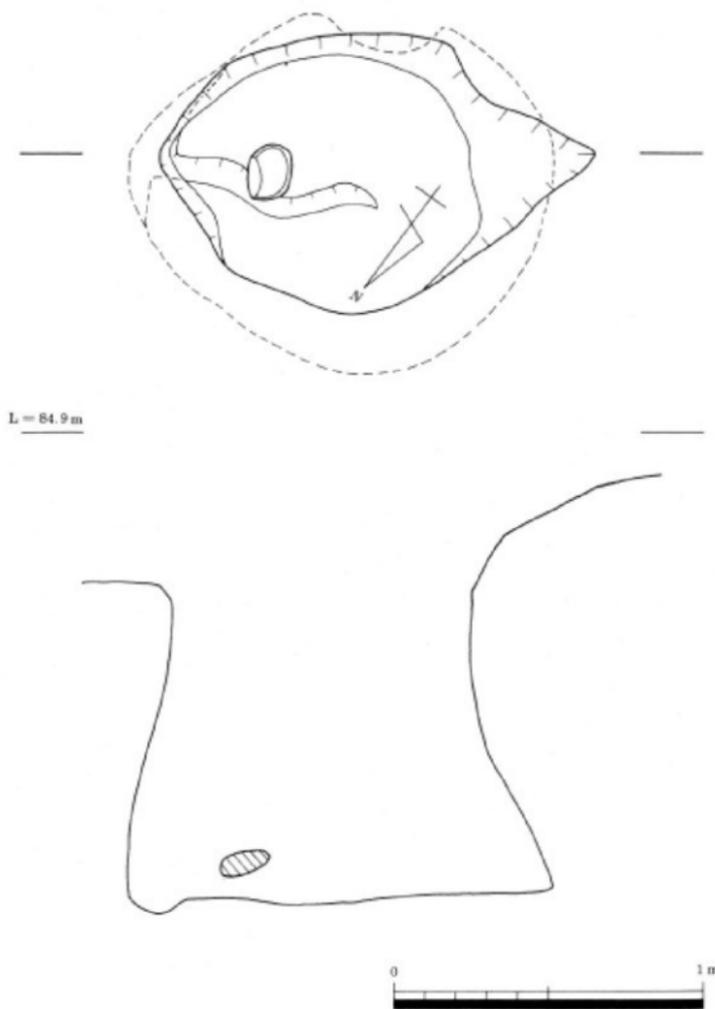
第2号住居跡から北側に向けて延びた尾根平坦部先端のやや東側斜面に寄ったあたりで検出した断面袋状を呈する円形の土坑である。形状から貯蔵穴と考えられる。

地山を、口径100cm、底径135cm、深さ120cm~105cmに掘り込んで作られている。断面は袋状を呈しており、底面はほぼ水平を保っている。底面縁辺部には浅い溝をめぐらせている。埋土内からは、弥生式土器細片と角礫が出土した。

本土坑に伴う住居跡は周辺からは検出されず、確認することはできないが、北側直近に地山を掘り下げた住居跡の平坦面が検出されており、この遺構に伴うものかもしれない。



第28図 B地点第1号土坑跡実測図



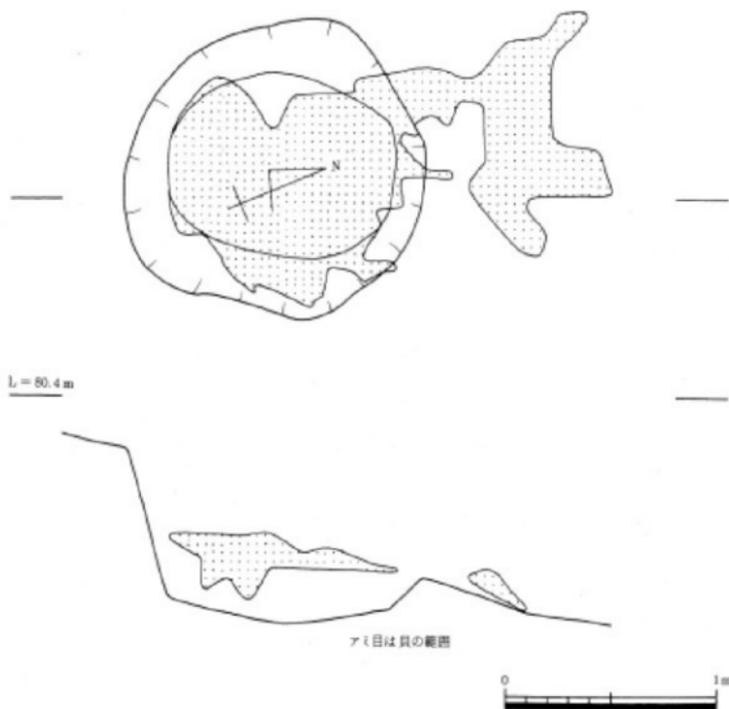
第29图 B地点第2号土坑实测图

### 7. 第3号土壌 (第30図)

第2号土壌の北側約15mの尾根上の若干傾斜がゆるやかになった部分で検出した浅い不整形の土壌である。掘り方は明瞭ではないが、地山を130cm×140cm、深さ70cmに掘り込んで作られている。この土壌内及び周辺から、土器を混入したカキを主体とした貝層の広がりが検出された。土器類は器形のうかがえるものが多いが、定形とはならず、不用品の廃棄のための土壌と考えられよう。しかし、本土壌が伴うと考えられる遺構は周辺からは確認できなかった。

### 8. 第4号土壌 (第26図)

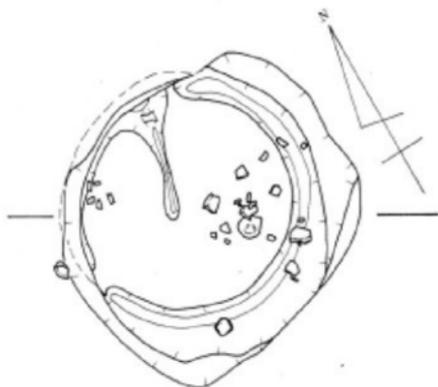
第3号住居跡の南側に隣接して検出された断面袋状を呈する円形土壌である。形状から、貯蔵穴と考えられる。地山を、開口部径180cm、底径190cm、深さ200cmに掘り込んで作られている。底面はほぼ水平としており、縁辺部は浅い溝がめぐらされている。周辺からは第1号住居跡と第3号住居跡が検出されており、いずれに伴うかは確認できなかった。



第30図 B地点第3号土壌実測図

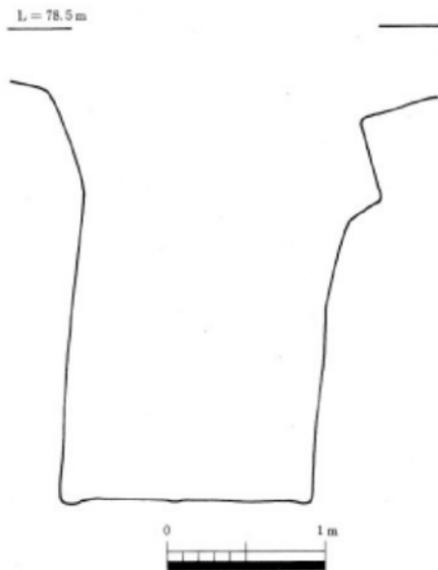
### 9. 第5号土壌 (第31図)

第3号住居跡の東側約25mの急斜面が、わずかに狭小なテラス状を呈する部分から検出した断面袋状を呈する円形土壌である。形状から貯蔵穴と考えられる。地山を開口部径200cm、底径160cm、深さ250cmに掘り込んで作っている。底面はほぼ水平を保っており、縁辺部に浅い溝をめぐらせている。埋土内からは、弥生式土器片が少量出土した。周辺からは、本土壌が伴うと考えられる遺構は検出されなかった。



### 10. 第6号土壌 (第32図)

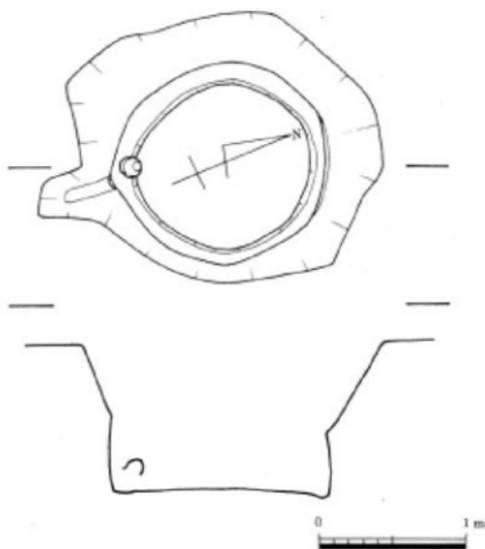
第4号住居跡の北東約15mの、尾根上平坦面のほぼ中央部から検出した、断面袋状を呈する円形の土壌である。形状から貯蔵穴と考えられる。周囲は畑として利用された痕跡がうかがえるが、遺構面までの削平は認められなかった。地山を口径200cm、底径148cm、深さ108cmに掘り込んで作っており、底面縁辺部に極めて浅い溝をめぐらせている。底面の東南隅で完形弥生式土器(鉢)1点が出土した。周辺は、比較的広い平坦面となっているが、住居跡又はその痕跡は見られず、本土壌が伴うと考えられる遺構は確認されない。しかし、4号住居に近い位置であるところから、4号住居跡に伴う可能性も考えられよう。



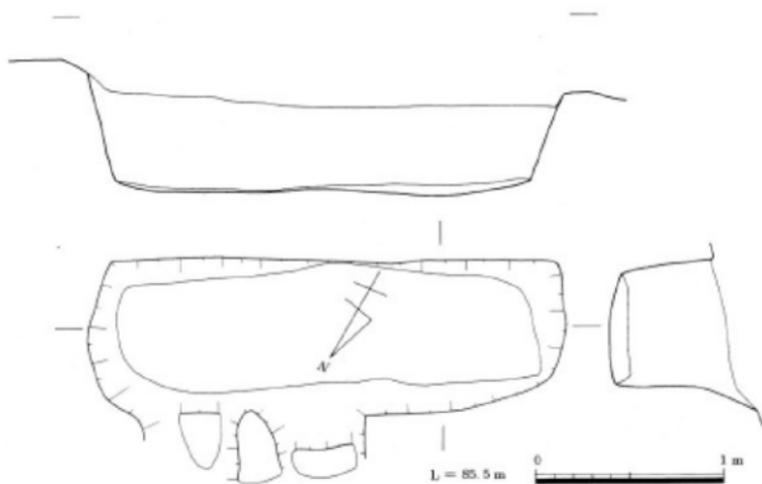
### 11. 第7号土壌 (第33図)

第3号住居跡の東側約12mの斜面から検出した方形の土壌である。地山の高い方を高さ約80cm、長さ約255cm、幅1mに掘り込んで狭小な平坦面を作り、その平坦面の東端に寄った部分に、地山を長さ250cm、幅90cm、深さ80cmの方形に掘り込んで作っている。埋土内からは遺物は出土せず、平坦面から弥生式土器細片が出土しているのみである。したがって、本土壌の時期、性格は明らかではないが、墓墳と考えられる。

第31図 B地点第5号土壌実測図



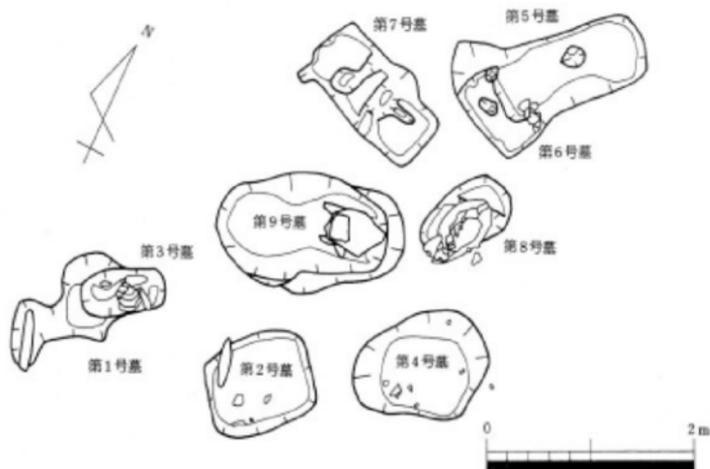
第 32 图 B 地点第 6 号土壤实测图



第 33 图 B 地点第 7 号土壤实测图

## 弥生墳墓(第34図)

本地点からは、弥生時代の墳墓が第1地点、第2地点の2カ所から検出された。第1地点は3号住居の東方約20mの、尾根中心線よりやや南側斜面に寄った部分の、4m×7mの範囲に集中して検出した。埋葬主体の内訳は、土壇7、壺棺1、石棺1の9基が確認された。これら埋葬主体の配置、主軸方向には規則性は見られず、盛り土・溝等の墓域を区画する施設は全く検出されなかった。第2地点は第1地点の北東約28m、第4号住居跡の西側約10mの斜面から検出した。主体部は第10号墓と呼称する1基で断面は袋状に近い形態を呈する土壇である。第4号住居跡の直近にあたり、位置、形状から貯蔵穴の転用と考えられる。



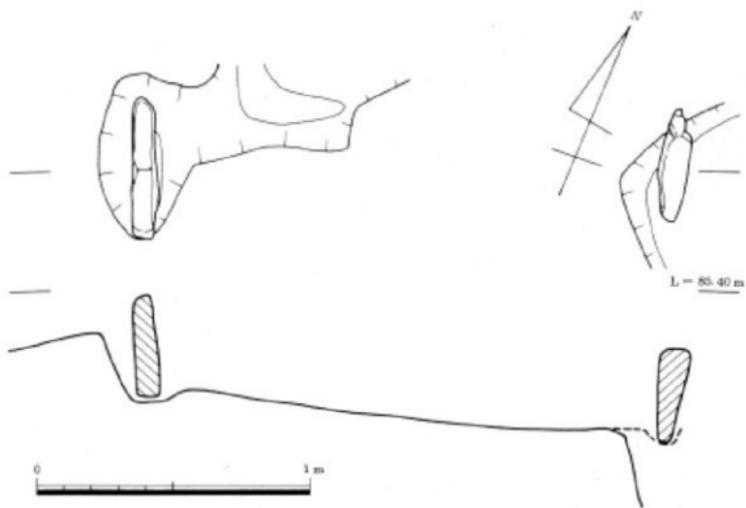
第34図 B地点弥生墳墓配置図

### 12. 第1号墓(第35図)

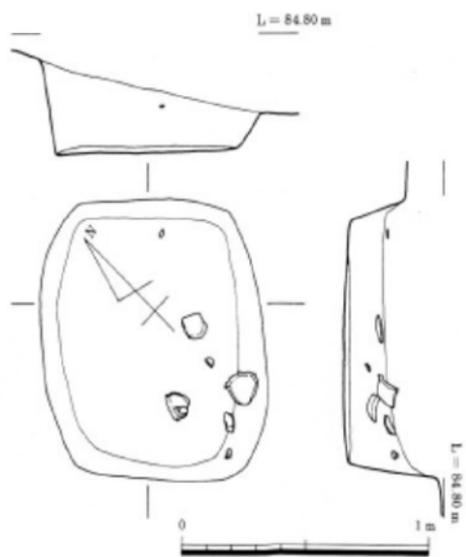
第1地点の西端に位置する。第2号墓、第3号墓と重複しているため掘り方は明瞭にすることは困難であるが、土壇と考えられる。掘り方の範囲内と推定される範囲から、長さ46cm～58cm、幅39cm～42cm、厚さ9cm～11cmの板状の石材が、約1.8m離れた位置から2枚立った状態で検出された。この石材は、検出状態から、両側の小口にあたるものと考えられる。この石材を手がかりとして考えれば、掘り方は長さ220cm、幅70cmの方形の土壇と考えられよう。埋土内からは遺物は出土しなかった。

### 13. 第2号墓(第36図)

第1号墓の東側に第1号墓と重複して検出した方形の土壇である。現存する掘り方は、104cm×90cm、深さ42cm～15cmを測る。主軸はN45°Eをとる。境内からは、鉢形土器1点を含む弥生式土器片が出土した。



第 35 图 B 地点第 1 号墓实测图



第 36 图 B 地点第 2 号墓实测图

14. 第3号墓 (第37図)

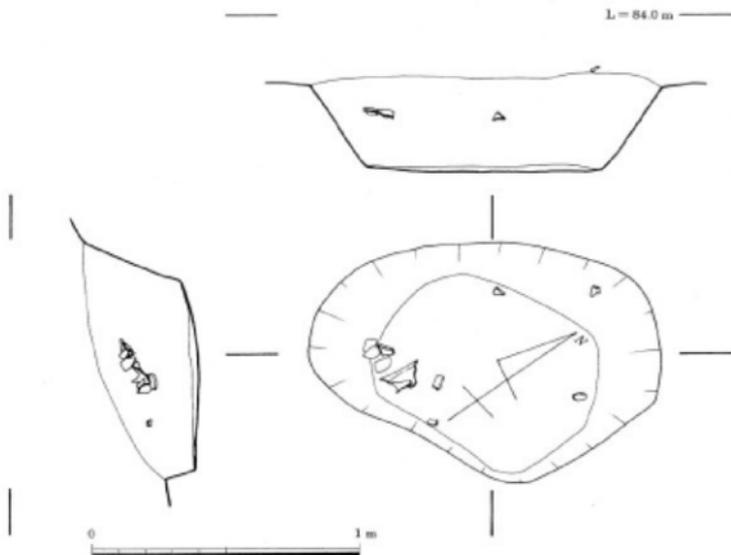
第1号墓の北側に、1号墓と重複して検出された土墳である。掘り方は不整形形を呈し、長軸100cm、短軸50cm、深さ60cm～33cmを測る。主軸はN51°Eをとる。墳内のほぼ中央部に壺形土器1点が出土した。この土器は破砕した後、その破片を積み重ねた状態で出土しており、供献用と考えられる。この土壌は、その形状から墓墳とするには疑問が残り、土器についても、1号墓に伴うことが考えられるが、検出状態からは明確にすることはできなかった。



第37図 B地点第3号墓実測図

15. 第4号墓 (第38図)

第2号墓の東側に隣接して検出された不整形形の土墳である。長軸130cm、短軸100cm、深さ42cm～12cmを測る。主軸はS39°Wをとる。墳内からは、床面から20cm～30cm浮いた状態で弥生式土器片が出土した。



第38図 B地点第4号墓実測図

16. 第5・6号墓(第39図)

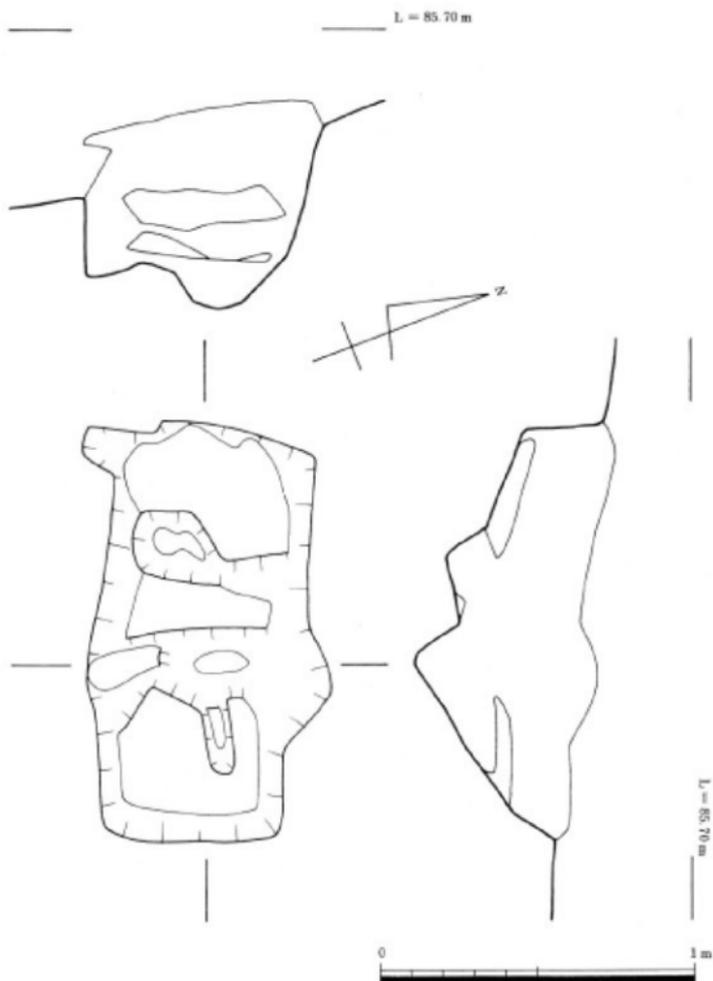
第4号墓の北約3m, 第8号墓(壺棺)の北側に隣接して検出した方形の土壌である。検出状態から, 方形の土壌2基の重複と考えられる。5号墓は, 幅約70cm, 深さ約35cm, 長さは重複のため明瞭ではないが, 推定約150cmを測る。主軸はN30°Eをとる。床面のほぼ中央部から径20cm, 深さ約10cmのビット1を検出した。6号墓は, 5号墓の西側小口で重複し, 長さ約80cm, 幅推定約50cm, 深さ12cm~15cmを測る。主軸はN80°Wをとる。墳内からは弥生式土器片が両土壌の重複部分で出土した。出土状態から, どちらの土壌に伴うものかは明らかにすることはできない。



第39図 B地点第5・6号墓実測図

17. 第7号墓 (第40図)

第6号墓の西側, 第9号墓(石棺)の北側に隣接して検出された方形の土壇で長さ135cm, 幅約70cm, 深さ25cm~60cmを測る。主軸はN63°Wをとる。床面は中央部が深くなり整っていない。境内からは遺物は出土しなかった。

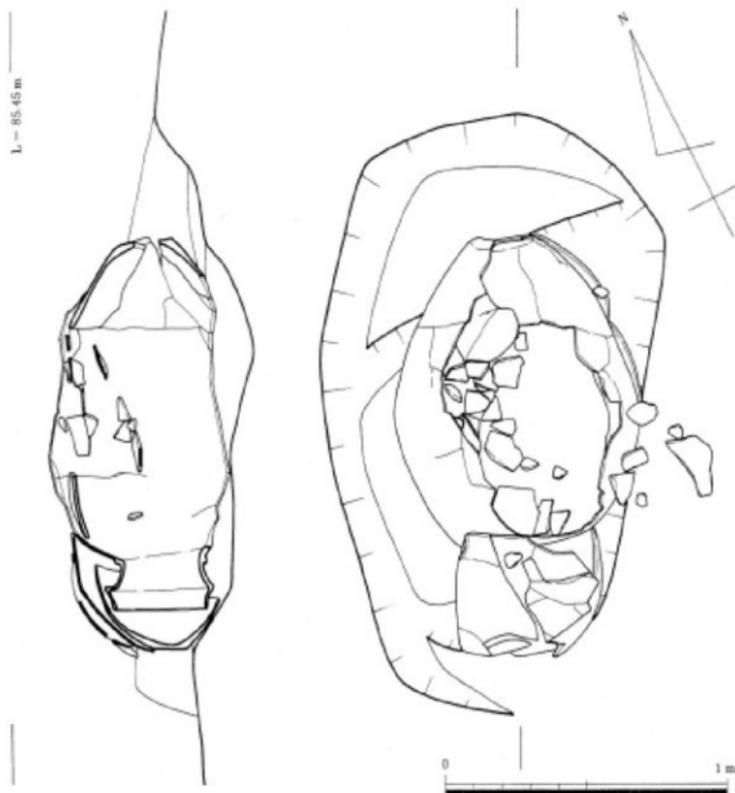


第40図 B地点第7号墓実測図

18. 第8号墓(第41図)

第1地点のほぼ中央の土壌に囲まれた部分から検出された壺棺である。表土直下から検出され、畑作により上半部が破壊されており、破片が柏内に落ち込んでいた。

地山を、長軸約90cm、短軸約60cm、深さ3cm~5cmの浅い長円形に堀り込んで墓墳としている。床面は凹凸が著しく、整った墓墳ではない。この墓墳の南西側に寄せて大型の壺形土器を横に埋置している。主軸はN27°Eをとる。棺身として使用した土器は、大型の複合口縁をもつ壺形土器を使用しており、口径17cm、高さ65cm、最大胴径45cmを測る。この土器の胴部の約1/3を縦方向に割って、遺体にかぶせるようにして埋葬している。底部は穿孔したと思われる。埋置した後、別の壺形土器を破砕し、胴部から底部にかけての部分で蓋として複合口縁部にかぶせ、残りの部分をその接合部あたりにかぶせている。この蓋として使用した土器は、器壁がもろいため復元することはできなかった。棺内からは遺物は出土しなかった。

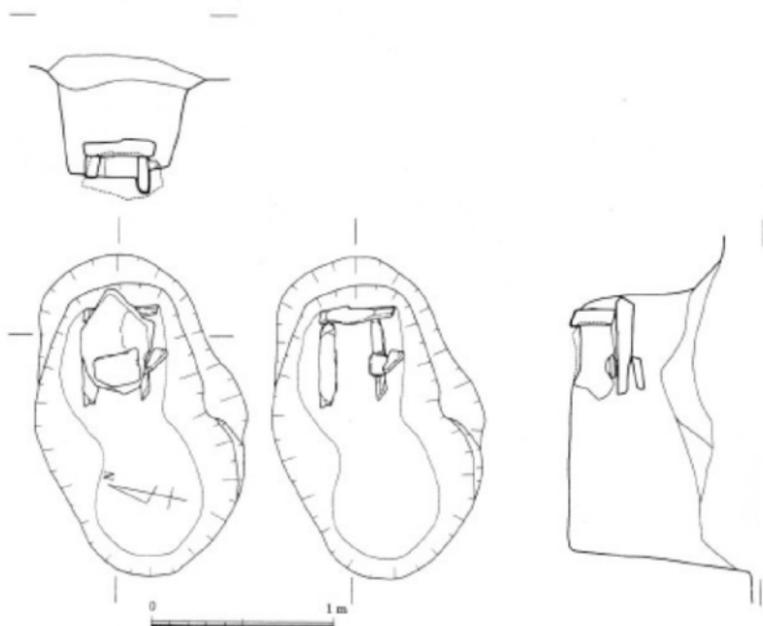


第41図 B地点第8号墓実測図

19. 第9号墓(第42図)

第8号墓に隣接して検出された深い土壌内に埋置された、小形箱式石棺である。地山を、長さ185cm、幅115cm、深さ100cm～60cmの長円形に掘り込んで墓墳としている。この墓墳の東側に寄せて石棺を構築している。石棺は、板状の石材5枚使用して構築している。内法は、長さは不明、幅21cm～23cm、深さ20cmを測る。側壁は、南北各1枚ずつを使用している。北側の石材は、長さ49cm、幅12cm、厚さ10cmを測る。東側小口は、側壁にほさむ形で構築しており、高さ41cm、幅26cm、厚さ10cmを測る。蓋石は2枚重ねて置いている。下側の石材は長さ60cm、幅40cm、厚さ10cmを測る。上側の石材は長さ25cm、幅22cm、厚さ5cmを測る。この蓋石の間からは、白色粘土が検出された。西側小口の石材は欠失している。内部から遺物は出土しなかった。規模から幼児用と考えられる。

さて、掘り方の形状を検討すると、西側部分は、円形に近い形状を呈し、東側部分は方形に近い形状を呈しており、接点あたりで、土壌は若干狭くなることが認められる。この形状と石棺の西側小口が欠失していることを考えあわせると、本墳墓は2基が重複している可能性が考えられる。即ち、石棺構築後、両側に土墳を掘り込んで、石棺の西側の一部を破壊したと考えられよう。この場合、蓋石として使用した石材の内、上側の石材は西側小口の石材であった可能性が考えられる。しかし、検出状況から明らかにすることはできなかった。



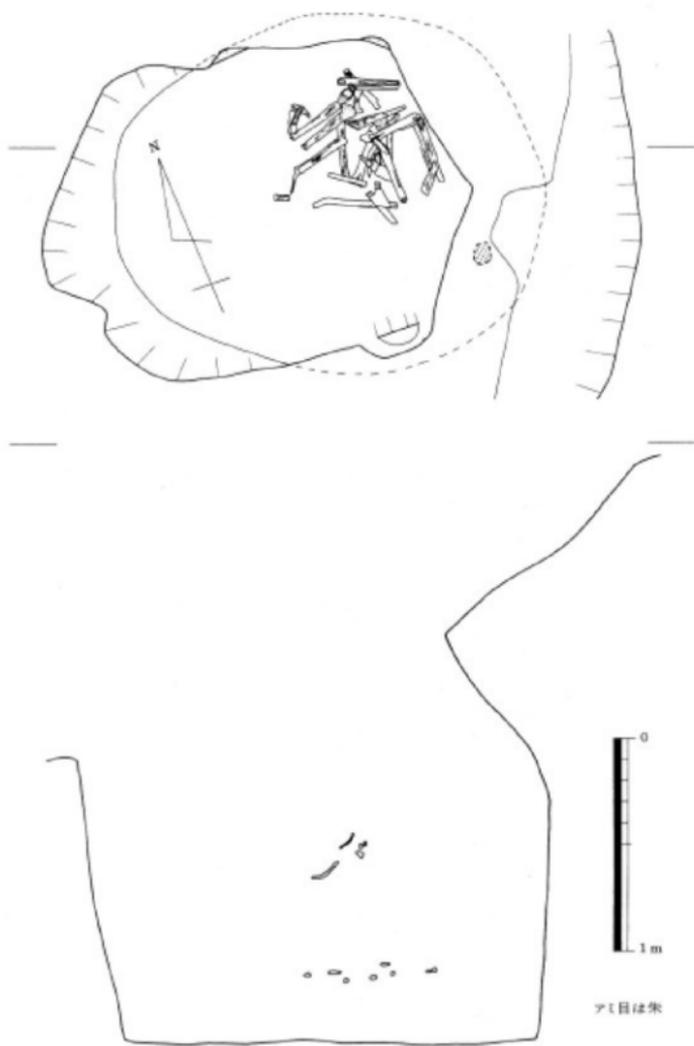
第42図 B地点第9号墓実測図

## 20. 第10号墓(第43図)

第4号住居の西側約10mの斜面から検出した土壌である。地山を口径170cm～160cm、底径約170cm、深さ190cm～130cmに掘り込んで作っている。掘り方の上半部は不整形を呈するが、下半部はほぼ円筒形に整った形状を呈している。埋土内からは、甕形土器2点の他、人骨が多数出土した。形状と位置から、第4号住居に伴う貯蔵穴を転用した墳墓と考えられる。

人骨は、上下2層に分かれて検出した。上層は床面より約70cm浮いた位置から、頭骨と数点の骨が出土し、下層は床面から約30cm浮いた状態で、少なくとも3体分の大腿骨を中心とした、比較的大きく長い骨がほぼ水平に約60cm×60cmの範囲から出土した。この骨の出土状態は、意識的に各部位を選別したことをうかがうことができ、死者が白骨又はそれに近い状態となった時点で選別し埋葬したことが考えられる。上下2層となっていることにより、2度の埋葬が行なわれたことが考えられる。しかし、それぞれに伴うと考えられる、各1点ずつの甕形土器の特徴が共通であること、各々の骨の内訳が全く異なることなどから、上下2層の骨は同時に死んだ死者の骨であることが考えられよう。したがって、上下2層の埋葬は2度の埋葬とはいえず、同時に死んだ複数の死者に対する、同時に近いほどの時間差での埋葬と考えられる。なお、下層の骨に近接して、水銀朱が微量であるが検出された。

さて、この骨の周辺から、炭化物と灰が多量に出土した。このことは骨と共に炭化物と灰を其に集めて埋葬したと考えられる。このことは、直近に位置する焼失した第4号住居との関連を強く示していると思われるが、骨に火をうけた痕跡が見られないため、明確にすることはできなかった。(検壇)



第43図 B地点第10号墓実測図

## B地点出土土器観察表

表3

No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
1	1 住	長頸壺	現存高 18.5 胴部最大 13.8 底径 5.5	頸部から口縁部にかけてはわずかに広がるが、ほぼ円筒形を呈す。胴部は球状を呈する。底部は貼り付けてあり凸状を呈し不安定である。	頸部はしぼって成形しており、しぼり痕が顕著である。頸部外面は目の細かいタテ方向のハケ目、胴部外面は細かいハケ目横又はナメ方向。底部はハケ状工具によるナデ。肩部にはヘラによる細かい「ノ」の字状の刻み目を施し2条の凹線を施している。	頸部内面 褐色 外面 淡黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
2	2 住	甕	口径 14.2	口縁部は「くの字」状に外反し、口唇部は肥厚する。	口唇部には2条の凹線を施し肩部には「ノ」字状の刻み目が見られるが、工具は磨滅のため不明。口縁部内外面は横ナデ。肩部施文帯以下はヘラナデ、胴部内面はヘラ削り。	内面 淡黄褐色 外面 赤褐色 胎土 良好 焼成 良好
3	2 住	甕	口径 15.8	口縁部の開きは小さく頸部から直立気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに開く。器壁はかなり厚い。	外面は磨滅のため調整は不明である。口縁部内面は横ナデ、胴部内面はヘラ削りの後ナデ。	内外面とも淡黄褐色 胎土 良好 焼成 軟調
4	2 住	甕	口径 11.0	口縁部は「くの字」状に外反し口唇部はわずかに肥厚する。	口唇部には2条の凹線がある。肩部には「ノ」字状の刻み目があるが、内外面とも磨滅が著しく調整等は不明。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 軟調
5	2 住	甕	口径 15.6	口縁部の開きは小さく口縁端部は肥厚するが、平らに仕上げている。	磨滅のため調整は不明。	内外面とも淡黄色 胎土 良好 焼成 軟調
6	2 住	不明	底径 3.5	底部は凹底である。	磨滅が著しく調整は不明。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 軟調
7	3 住	鉢	口径 15.7 器高 10.3 底径 5.5	口唇部の開きはなく、器壁は全体として肉厚である。	磨滅が著しく調整は不明。体部外面に繊維痕と思われるものがある。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 やや軟調
8	4 住	甕	口径 11.4 推定高 14.5	口縁部はゆるいカーブをもって開き口縁端部内側にわずかに凹みをもって上方へ肥厚する。胴部の開きは小さく器壁は全体として肉厚である。	内面頸部以下は縦及び横方向のヘラ削り、口縁部内外面は横ナデ、外面頸部以下は縦方向のハケ目の後横ナデ。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 やや軟調

No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
9	4 住	甕	口径 14.6	口縁部は大きく開き, 口縁端部はわずかに上下に肥厚する。胴部の開きはほとんどない。	内面頸部以下はヘラ削り, 口縁部内外面は横ナデ, 肩部以下はクシ歯状工具による押し引き施文, 施文帯以下は縦方向のハケ目。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
10	3 土壌	甕	口径 19.2 胴部最大径 20.0	口縁部は「くの字」状に外反し, 口縁端部はわずかに上下に肥厚し2条の凹線をもつ。胴部の開きは少ない。器壁は薄手である。	内面頸部以下はヘラ削り, 口縁部内外面は横ナデ, 外面肩部にはヘラによる上下2段の羽状文状の刻み目を施す。外面全体にハケ目の後ヘラナデ。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 良好
11	3 土壌	甕	口径 16.7	口縁部の開きは少なく胴部の開きも少ない。器壁は全体に厚手である。	内面頸部以下はヘラ削り後ナデ, 口縁部内外面は横ナデ, 他はヘラナデ。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
12	3 土壌	甕	口径 15.0	口縁部は「くの字」状に外反し, 口縁端部はわずかに上下に肥厚し, 中央はわずかに凹む。	内面頸部以下はヘラ削り, 口縁内外面は横ナデ, 外面頸部下にクシ歯状工具による押し引き施文がある。それ以下は縦方向のハケ目の後ヘラナデ。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
13	3 土壌	甕	口径 15.1	胴部の開きはほとんどなく口縁部の開きも少ない。器壁もほぼ均一の厚さをもつ。	内面頸部以下はヘラ削り後ナデ, 口縁部内外面は横ナデ, 外面頸部以下はハケ目の後ナデ。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 良好
14	3 土壌	甕	口径 19.0	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部に至ってわずかに下方に肥厚する。胴部はやや開く。	内面頸部以下はヘラ削り後ナデ, 口縁部内外面は横ナデ, 外面頸部下にクシ歯状工具による押し引き施文があり, それ以下はハケ目。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
15	3 土壌	甕	口径 10.8	口縁部はゆるやかなカーブをもって開き, 口縁端部はわずかに上下に肥厚する。	内面頸部以下はヘラ削り, 口縁部内外面は横ナデ, 外面頸部以下はヘラナデ。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 良好
16	3 土壌	甕	口径 14.0	口縁部はゆるやかなカーブをもって開くが, 胴部の開きはやや大きい。	内面頸部以下はヘラ削り, 他は横ナデ。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 難聴
17	3 土壌	甕	口径 16.3	口縁部の開きは少なく直立気味であるが, 胴部の開きはやや大きい。口縁端部はわずかに肥厚する。	内面頸部以下はヘラ削り, 口縁部内外面は横ナデ, 外面頸部下にヘラによる刻み目文があり, それ以下は縦方向のハケ目。	内外面とも淡黄褐色 胎土 良好 焼成 やや難聴

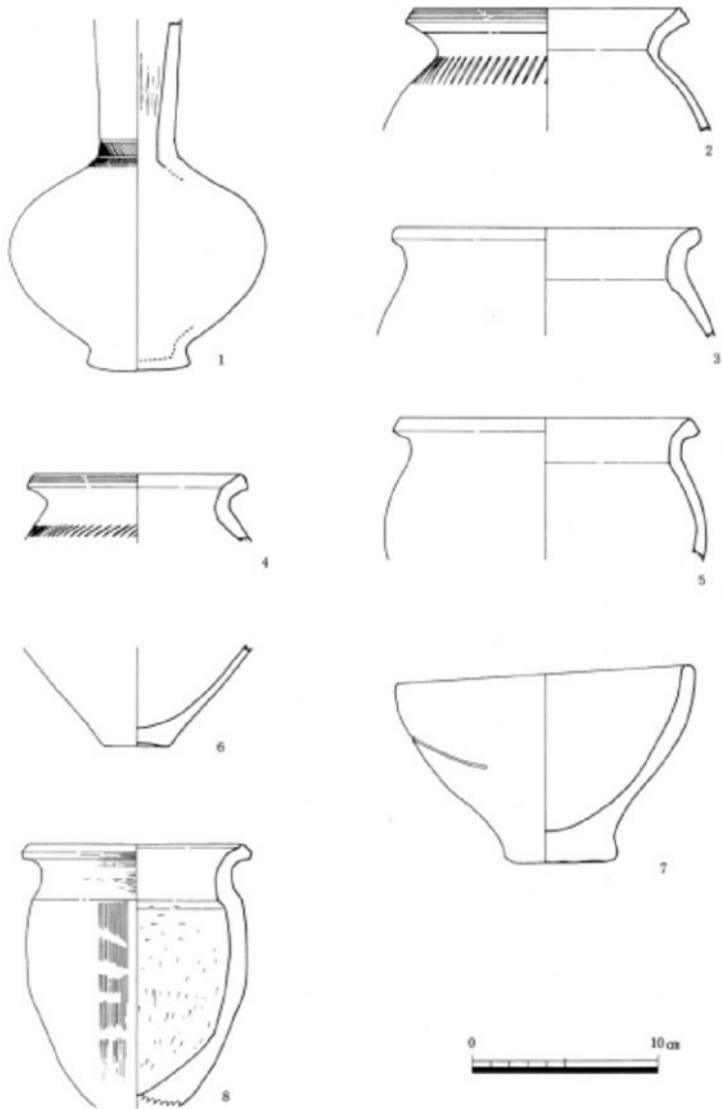
No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
18	3 土壇	甕	口径 12.2	口縁部の開きは少なく胴部の開きも少ない。口縁端部は上下にわずかに肥厚する。	内面頸部以下はヘラ削り, 口縁部内外面は横ナデ, 外面頸部以下は磨滅のため不明。	内外面とも淡黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
19	3 土壇	甕	口径 25.4	口縁部は「くの字」状に外反する。胴部の開きは少ない。大形の甕である。	内面頸部以下は磨滅のため, 調整は不明。口縁部内面は横ナデ, 外面は縦方向のハケ目の後横ナデ。外面頸部下には8本歯と思われるクシ歯工具による刺突文。それ以下は横ナデ。	内外面とも淡黄褐色 胎土 やや不良 焼成 比較的良好
20	3 土壇	甕	口径 22.0	口縁部は直立気味にわずかに開き, 口縁端部は大きく肥厚する。胴部はやや開く。	内面頸部下はヘラ削り, 他は磨滅のため不明。外面頸部下に上下2段にわたって羽状文のクシ歯状工具による押し引き施文	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 やや軟調
21	3 土壇	甕	口径 9.5 胴部最大径 12.0	口縁部はゆるやかに開き, 胴部の開きはやや大きい。口縁端部は丸みをもつが, わずかに1条の凹線がみられる。	内面頸部以下はヘラ削り, 口縁部内面から外面肩部にかけては横ナデ, それ以下はヘラナデ。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 良好
22	3 土壇	甕	口径 11.2	口縁部はゆるやかなカーブをもって開き, 胴部はやや開く。	内面頸部以下は左右方向へのヘラ削り, 口縁部内面から外面肩部まではハケ目の後横ナデ。肩部以下はヘラナデ。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 良好
23	3 土壇	甕	口径 20.4	口縁部は「くの字」状に外反し, 胴部の開きは少ない。口縁部の厚みはほぼ均一である。	内面頸部以下の下半は縦方向のヘラ削り, 上半は口縁部接合のための粘土の貼り付け後横方向のヘラ削り。口縁部内面から外面肩部までは横ナデ, それ以下はハケ目の後横ナデ。	内外面とも黄褐色 胎土 やや不良 焼成 良好
24	3 土壇	甕	口径 13.6 胴部最大径 13.2	口縁部の開きは少ないが, 胴部の開きがさらに少ないため全体として口縁の開きを大きく感じさせる。	内面頸部以下はヘラ削り後ヘラナデ, 口縁部内面はハケ目の後横ナデ。口縁部外面は横ナデ, それ以下はハケ目。	内面 淡褐色 外面 淡黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
25	3 土壇	甕	口径 12.9	口縁部はゆるやかなカーブをもって開き, 厚みも均一である。	内面頸部以下はヘラ削り, 口縁部内面はハケ目の後横ナデ, 口縁部外面は横ナデ, それ以下はハケ目の後横ナデ。	内面 淡褐色 外面 黄褐色 胎土 良好 焼成 やや不良

No	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
26	3 土壇	甕	口径 18.9	口縁部は「くの字」状に外反し、胴部の開きもやや大きい。器壁の厚みは胴部に比して口縁部はかんり肉厚である。口縁部は均一の厚みをもつ。	内面頭部以下はヘラ削り、口縁部内外面及び外面両側の施文帯以下は磨滅のため不明。施文は肩部にクシ歯状工具による押し引きが見られる。	内面 淡褐色 外面 黄褐色 胎土 良好 焼成 やや不良
27	3 土壇	甕	口径 18.0	器壁は薄く、口縁端部はわずかに肥厚し2条の凹線をもつ。	内外面とも横ナデ。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
28	3 土壇	甕	口径 21.3	口縁部の開きは大きく胴部はほとんど開かない。口縁部に器壁は厚く端部が最も厚い。胴部の器壁は口縁部に比してかなり薄い。	内面頭部以下はヘラ削り、口縁部内外面はハケ目の後横ナデ、外面頭部下にクシ歯状工具による押し引き施文があり、それ以下は縦方向のハケ目。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
29	3 土壇	甕	口径 18.6	口縁部は均一に厚みをもつて「くの字」状に開く口縁部から胴部へかけて2つの垂曲点をもち、全体として頸部がやや長く感じられる。	内面頭部以下はヘラ削り、口縁部内外面は横ナデ、外面頭部以下は縦方向のハケ目の後ナデ。	内外面とも黄褐色 胎土 やや不良 焼成 良好
30	3 土壇	甕	口径 21.0	口縁部は「くの字」状に外反し、口縁端部はわずかに上下に肥厚する。	内面頭部以下はヘラ削り、他は横ナデ、外面頭部下に貝殻施文がみられるが、検出部が小さく明確ではない。	内外面とも黄褐色 胎土 やや不良 焼成 やや軟調
31	3 土壇	鉢	口径 9.2 器高 5.1	手づくねの土器で内面には多くの指頭圧痕がある。内湾は少なく、壁は厚手で口縁端部は丸く仕上げている。	内面は指頭押後ナデ、外面は縦方向のハケ目。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
32	3 土壇	鉢	口径 13.7	内湾気味に直立する胴部は口縁部に至ってわずかに外方に折り曲げている。	内面屈曲部以下はナデ、屈曲部から上方へ約5mm幅でハケ目がわずかに残り、それから上方及び外面屈曲部までは横なで、それ以下はハケ目。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
33	3 土壇	鉢	口径 14.0 器高 8.2	内湾の度は強く頸部下ではほぼ直立しながら下方に大きく折り曲げ口縁部としている。端部は平たく仕上げている。	内面頭部以下はヘラ削り後ナデ、口縁部内外面は横ナデ、外面頭部以下はハケ目の後ナデ。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 良好

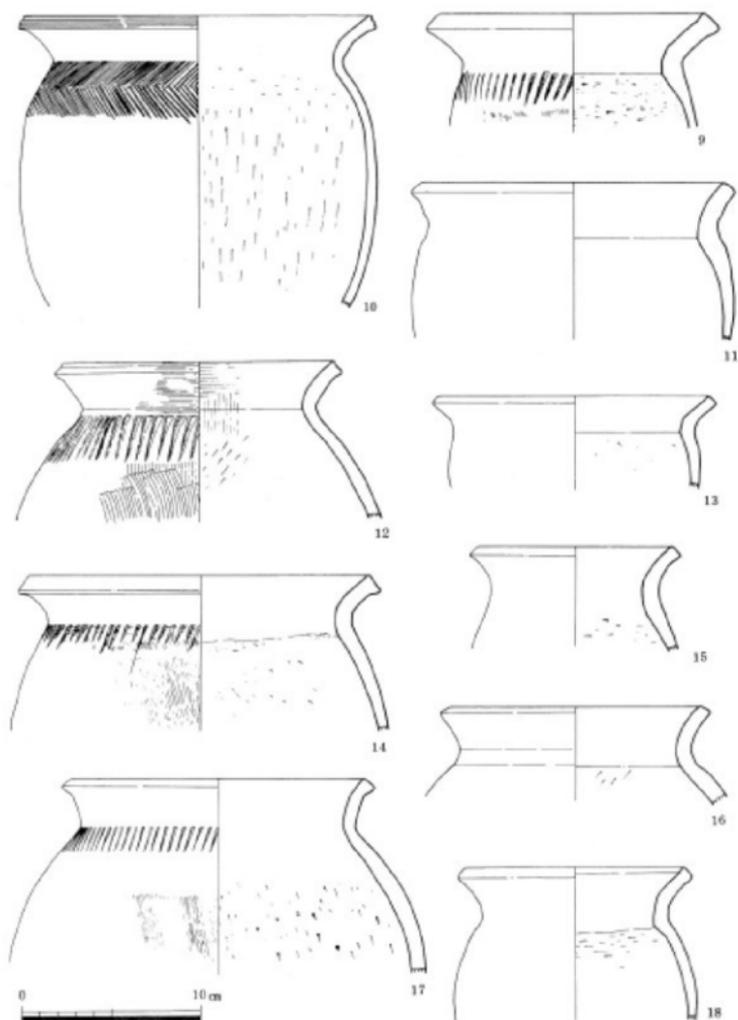
No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
34	3 土壌	鉢	口径 12.0	内湾気味に直立し, 口縁部は丸く仕上げている。口縁部内側はわずかに削られている。	内面はほぼナデを行い, 口縁部から約5mmの幅をもってヘラナデがある。外面は口縁部から1cmの幅をもって横方向のハケ目の後ナデ, それ以下は縦方向のハケ目。	内面 淡褐色 外面 淡黄色 胎土 良好 焼成 良好
35	3 土壌	鉢	口径 11.1	内湾気味に直立し, 口縁部は平らに仕上げている。口縁部内側はわずかに斜めに仕上げられている。	口縁部内面は横ナデ, それ以下はヘラ削りの後ナデ, 外面上半は横ナデ。下半はハケ目の後ナデ。	内外面とも淡黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
36	3 土壌	鉢	口径 10.5	器壁は外上方に向かってほぼまっすぐ伸びる。口縁部は丸く, 内側はわずかに斜めに仕上げている。	磨滅が著しく不明。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 軟調
37	3 土壌	鉢	口径 13.7	内湾気味に直立し, 口縁部はわずかに外反し, 端部は平らに仕上げている。	口縁部内面はハケ目の後ナデ, それ以下はナデ, 外面口縁部は縦ナデ, 以下はハケ目。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 良好
38	6 土壌	鉢	口径 12.0 器高 7.7 底径 4.5	底部は平底で, 内湾気味に直立し, 口縁部に至って大きく外反し口縁端部に1条の凹線をもつ。	内面頸部以下はヘラ削り, 口縁部内外面及び外面肩部までは横ナデ, 他は磨滅のため不明。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 軟調
39	5 土壌	甕	口径 12.0	胴部から直立してきた器壁は口縁部に至ってゆるやかなカーブをもってわずかに外反する。口縁端部は平らに仕上げている。	内面頸部以下はヘラ削り, 口縁部内面及び外面肩部までは横ナデ, 以下は磨滅のため不明。	内外面とも褐色 胎土 良好 焼成 軟調
40	10号土壌 掘り方上 端	甕	口径 11.1 器高 14.3 底径 4.5	底部は平底で胴部は膨みは少ない。口縁部は小さいが「くの字」状に外反している。端部は平らに仕上げている。	内面頸部以下はヘラ削り, 他は磨滅が著しく不明。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 軟調
41	10号土壌 人骨上部	甕	口径 11.3 器高 17.5 底径 3.3	底部は平底で胴部の膨みは少ない。口縁部は小さく, ゆるやかなカーブをもってわずかに外反する。器壁は底部が厚く, 口縁部に至るにしたがって薄くなる。胴部中央には焼成後外側からの穿孔が行われている。	内面頸部以下はヘラ削り, 口縁部内面下半に指頭痕が残るが横ナデがみられる。外面肩部までが横ナデ, 以下は縦方向ナデ。	内外面とも褐色 胎土 良好 焼成 やや軟調

No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
42	弥生墳墓群からの出土であり壺棺である。	壺	口径 17.0 器高 62.2	丸みをもった底部から胴部にかけて大きく脹む。口縁部は二重口縁を呈し、立ち上がり部は短かい。頭部に貼り付けて突帯をめぐらしている。胴部は約1/3が縦に切れ、棺としてかぶせていた。底部は焼成後穿孔されている。	内面頭部以下はハケ目、口縁部内外面は縦ナデ、外面肩部まではハケ目がみられるが、それ以下は磨滅のため不明。二重口縁立ち上がり部の外面上半にクシ歯状工具による4条の波状文がみられ、下半にはヘラによる刺突文が上下2段にみられる。突帯部は斜格子の刻みがみられる。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 軟調
43	弥生墳墓群3号墓	壺	口径 17.0 器高 42.7	丸みをもった底部から胴部にかけて内湾気味に直立する。口縁部はあさがお状に聞き端部は平らに仕上げている。	内面頭部以下はヘラ削りの後ナデ、口縁部内外面は横ナデ、外面全体ナデ、口縁端部はヘラにより刻み、肩部にはクシ歯状工具による4条の波状文がみられる。	内外面とも淡黄色 胎土 良好 焼成 良好
44	20区4号墓	鉢	口径 14.6 器高 9.9 底径 4.5	厚手の底部は平底であり、内湾気味に直立する坏部は口縁部に至って外方に向かって急角度に屈曲し、端部はわずかに上方に向かって伸びている。	調整は磨滅が著しく不明。	外面 淡赤褐色 内面 淡黄褐色 胎土 やや不良 焼成 軟調

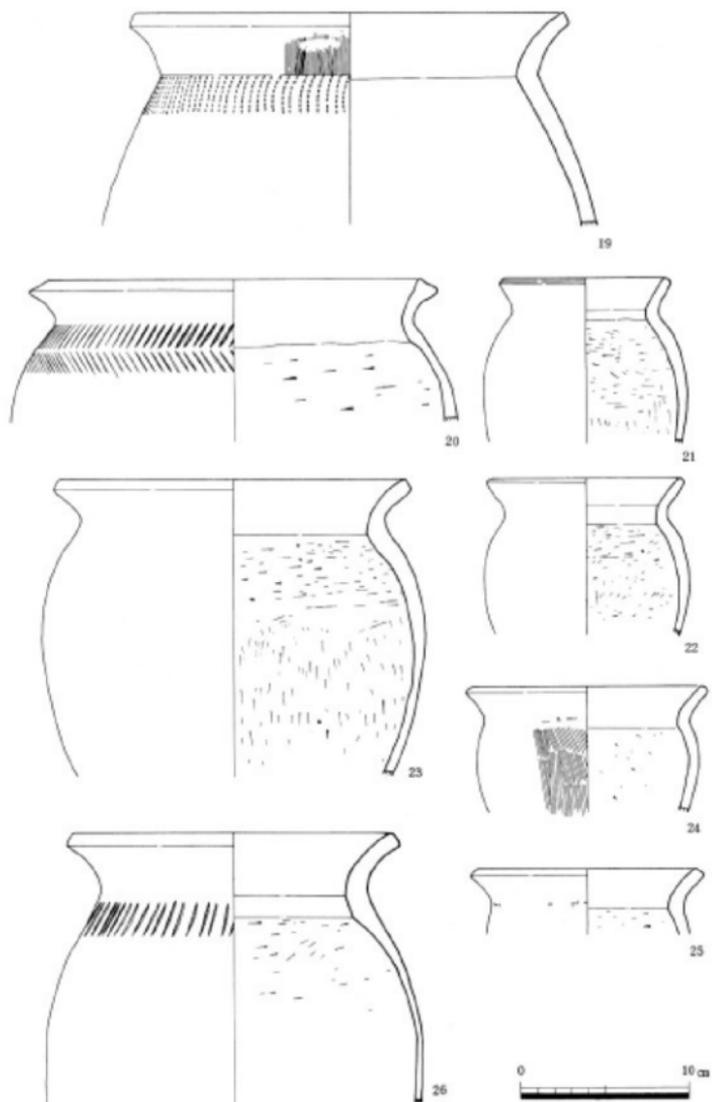
(幸田)



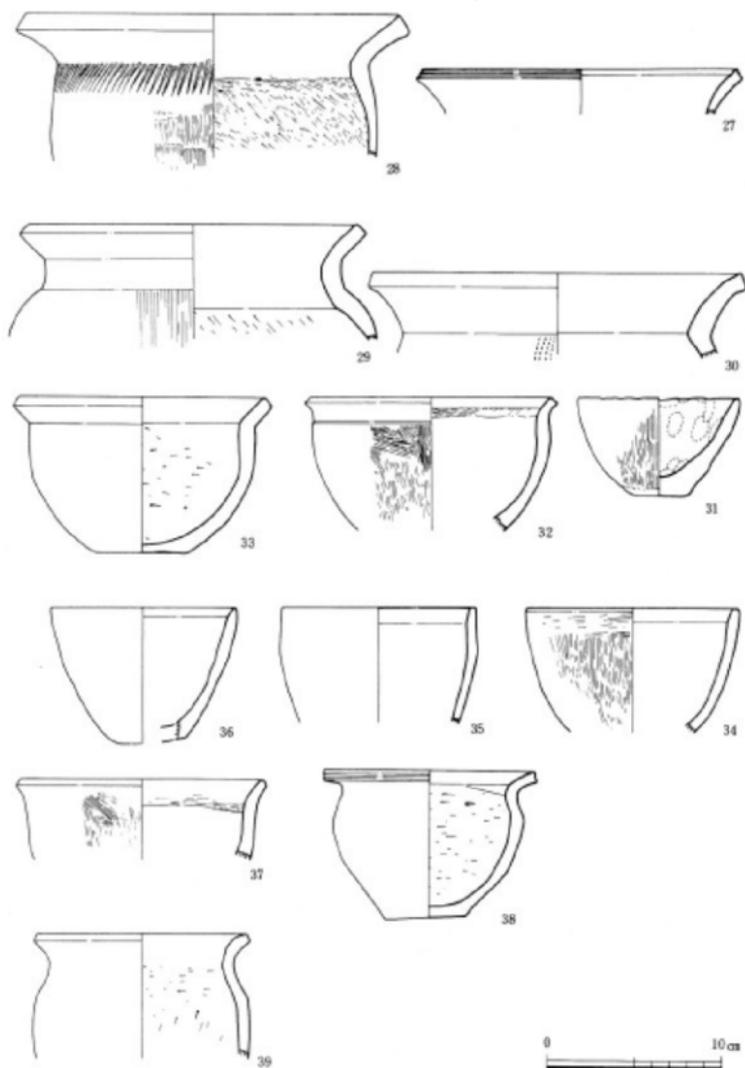
第44图 B地点出土土器实测图(1)



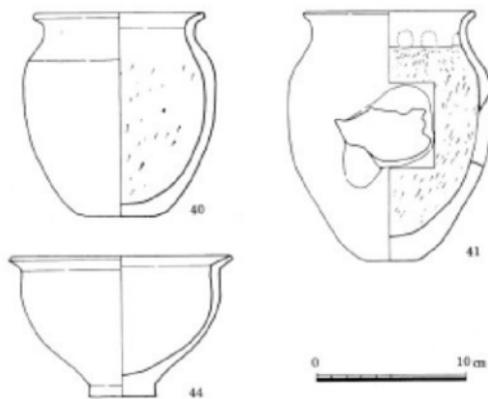
第 45 图 B 地点出土土器实测图 (2)



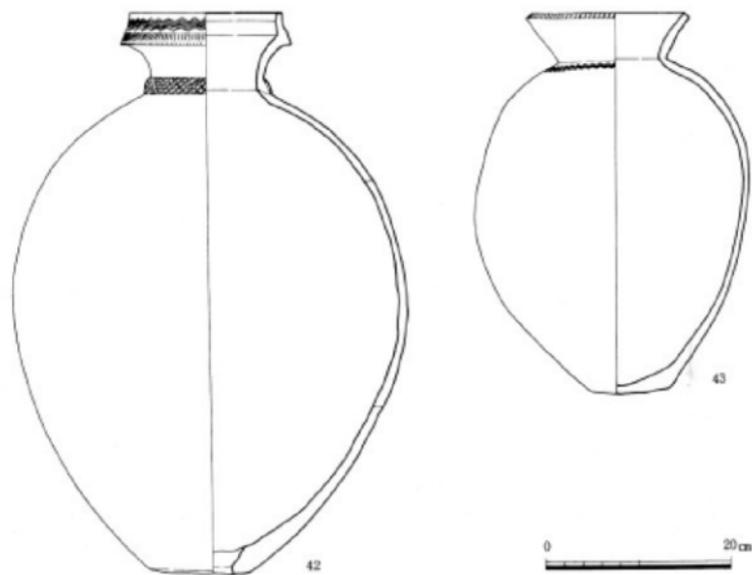
第46图 B地点出土土器实测图(3)



第 47 图 B 地点出土土器实测图 (4)



第 48 图 B 地点出土土器实测图 (5)



第 49 图 B 地点出土土器实测图 (6)

## 小 結

本地点からは、これまで述べてきたように、尾根上が畑地として削平をうけていたにもかかわらず、竪穴式住居跡、土壌、墳墓が検出され、弥生時代後期の集落であることが確認された。

住居跡は、第1グループ第1号～3号住居跡、第2グループ第4号住居跡に分けることができよう。両グループ共に、周辺に広い平坦部が展開しているものの検出されたのは既に述べた遺構にすぎない。

このような小集落は、遺跡の両側及び前面に見られる狭小な谷を生産基盤として成立した集落であると考え（注1）

えられ、現在までの調査成果と類似した傾向を示していると言える。周辺における同時期と考えられる集落跡は、大井B地点遺跡、山手A、B地点遺跡、寺迫遺跡、西山遺跡、北山遺跡があげられるが、これらの集落跡との関連については明らかにすることはできない。しかし、共に諸木川水系に成立した集落跡であることから、何らかの関連は考え得るであろう。本地点検出の集落跡は、このような集落跡群の内の1つの生産単位としてとらえ得る集落であろう。

さて、この集落が営まれた時期については、その手がかりを出土した土器に求められよう。出土した土器の特徴は、次の点があげられる。①「く」の字状の口縁部の端部に2～3条の凹線をめぐらせたもの、②「く」の字状の口縁部の端部を平たくおさめたもの、③内面はヘラ削りを施す。このような特徴は、上深川Ⅰ類、Ⅱ類に類似しているといえよう。しかし、4号住居出土の土器は、口縁部が薄くなりつつ端部を平たくおさめており、若干新しい傾向を示すところから、1～3号住居に対して、若干新しいと考えられよう。したがって第1グループは、弥生時代後期前半から中葉にかけて営まれ、第2グループは第1グループより若干新しい時期と言えよう。

本地点から検出した墳墓の内、第1地点は、第1グループと第2グループの住居跡の間に位置している。この墳墓群の周辺は平坦面が見られるが、住居跡は検出されなかった。墓域を区画する施設は見られないが、墳墓を意識していた結果である可能性が考えられよう。出土した土器は、第1～3号住居跡内出土の土器と共通の特徴を指摘することができ、第1グループである第1～3号住居に伴う墳墓であると考えられる。埋葬（注2）

主体の規模は小規模であり、幼小児用の墳墓であると考えられる。周辺の幼小児用の埋葬の例は、土器を使用した例が多く、本地点の例のように土壌の例は見られない。埋葬施設である土器の使用方法は法則性が見られないが、幼小児の埋葬地点力住居跡の近辺という共通点が指摘される。したがって、幼小児の埋葬については、埋葬場所について共通の意識があったことが考えられるが、埋葬施設については、規制ないしは共通の意識がなかったことが考えられよう。

第2地点は、第4号住居に伴う貯蔵穴を転用した墳墓と考えられる。埋土内から出土した骨は、少なくとも3体分の骨が確認されたことから、別の場所で死んだ後に骨だけを集めて埋葬したものと考えられる。しかも、骨を全て集めるのではなく、目だつ部分のみを2度に分けて埋葬したことが出土状態からうかがえる。このような例は太田川下流域では初例であり、本地点独自の埋葬例であるかどうかは、今後の類例の増加を待って検討したい。この墳墓の直近に焼失した第4号住居跡が検出されており、人骨と共に炭化物、灰層が出土していることから、この住居との関連が強いことが考えられよう。

さて、これらの墳墓の営まれた時期については少量であるが、出土した土器によって推定できよう。第1地点出土の土器の特徴は、「く」の字状の口縁部の端部を平たくまとめるという点であり、第2地点出土の土器の特徴は、「く」の字状の口縁部がわずかに薄くなりつつ端部を平たくおさめるといふ点である。このことから、第2地点は、第1地点より若干新しい時期に営まれたものと考えられよう。したがって、第1地点は弥生時代後期中頃、第2地点は弥生時代後期後半と考えられよう。（検垣）

(注)

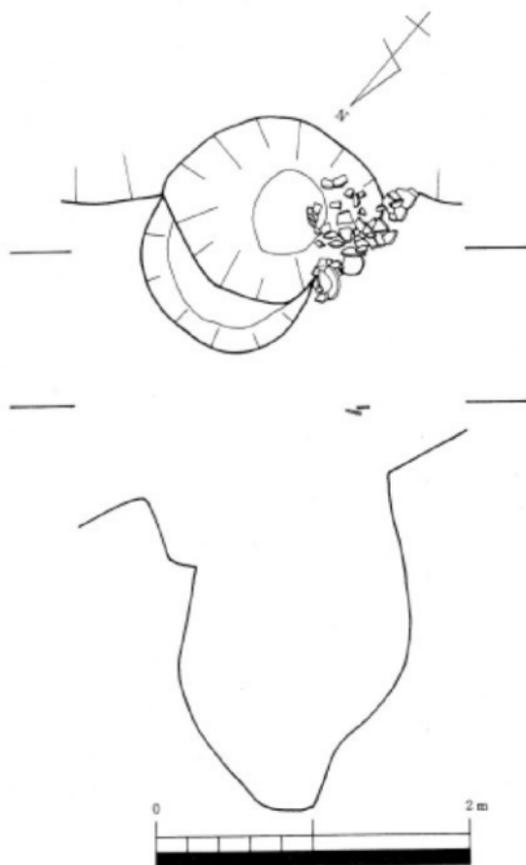
1. 河瀬正利「歴史のあけぼの」  
『高陽町史』1979年
2. 高陽町内では次の例が知られる。
  - (1) 西願寺山墳墓群B地点 壺棺1
  - (2) 寺迫遺跡 土器棺墓3
  - (3) 落合遺跡 壺棺1
  - (4) 末光遺跡A-2地点 土器蓋土壇

## V C 地点 遺 跡

C地点遺跡の概要（第50図）

本地点は、A-1地点の東方約40mの尾根斜面から検出された。土取り工事による崖面から、員層と掘り方の一部が露出していたため発見されたものである。調査の結果、円形の土壌であることが確認された。

### 遺 構



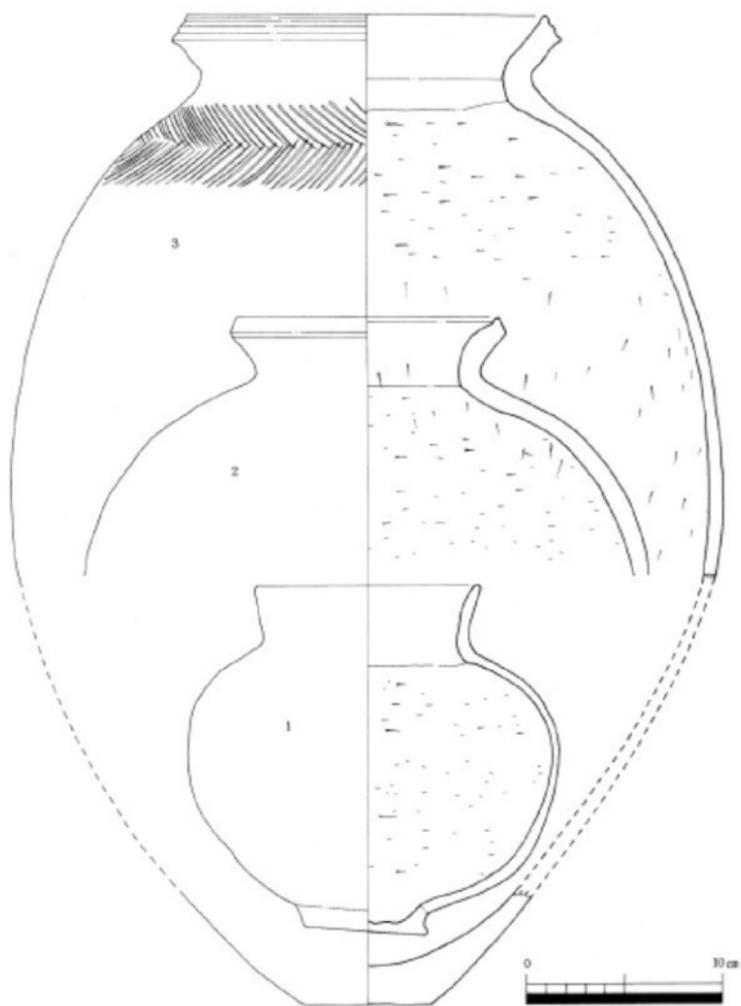
第50図 C地点土壌実測図

本土壙は、地山を口径100cm(推定)、底径30cm、深さ220cmに掘り込んでいる。断面は、中央よりやや下部で最大径140cmを測る長円形を呈している。掘り方の東半分は土取りによって破壊され、北側は、野壺と思われる土壙によって破壊されており、残存状態は良好とはいえない。埋土上面から土器が破片の状態でもたまって出土し、土器の下から少量の貝殻(ハマグリ、カキ)、炭化物が出土した。形状から貯蔵穴と考えられるが確認はできない。

出土した土器の内、図示できたのは3点であった(第51図1, 2, 3)。1はほぼ完形の壺形土器である。口径12cm、底径6.3cm、器高17.6cm~17.2cm、胴部の上半部で最大径18.8cmを測る。胴部はやや扁平な球形を呈し、口縁部はやや外反しつつ、器厚をわずかに減じつつ端部は丸くおさめている。底部は貼り付けであり、高台状としている。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面はヘラナデ、内面はヘラ削りの後粗いナデを施している。底部は貼り付け後、接合部の外面は横ナデ、底面はヘラ削りによって仕上げ、内面は棒状工具によって押しえている。内外面とも橙褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。

2は、壺形土器である。口径13.4cmを測る。器高は不明である。「くの字」状の口縁部の端部は平たくおさめている。外面は磨滅のため不明であるが、内面は口縁部は横ナデ、頸部屈曲部以下はヘラ削りを施している。内外面とも淡褐色を呈し、胎土は良好であるが、焼成はやや軟弱である。

3は、壺形土器である。口径18.2cm、底径7.5cm、推定器高50cm、胴部中央で最大径36.2cmを測る。「くの字」状口縁部の端部を上下にわずかに肥厚させ、浅い2条の凹線をめぐらせている。頸部屈曲部より1.5cm下部にヘラ状工具による刻みを2条めぐらせている。施文は上段を行った後、下段を施している。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面は施文部以下はヘラ状工具によるナデを、内面はヘラ削り後粗いナデを施している。内外面とも橙褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。



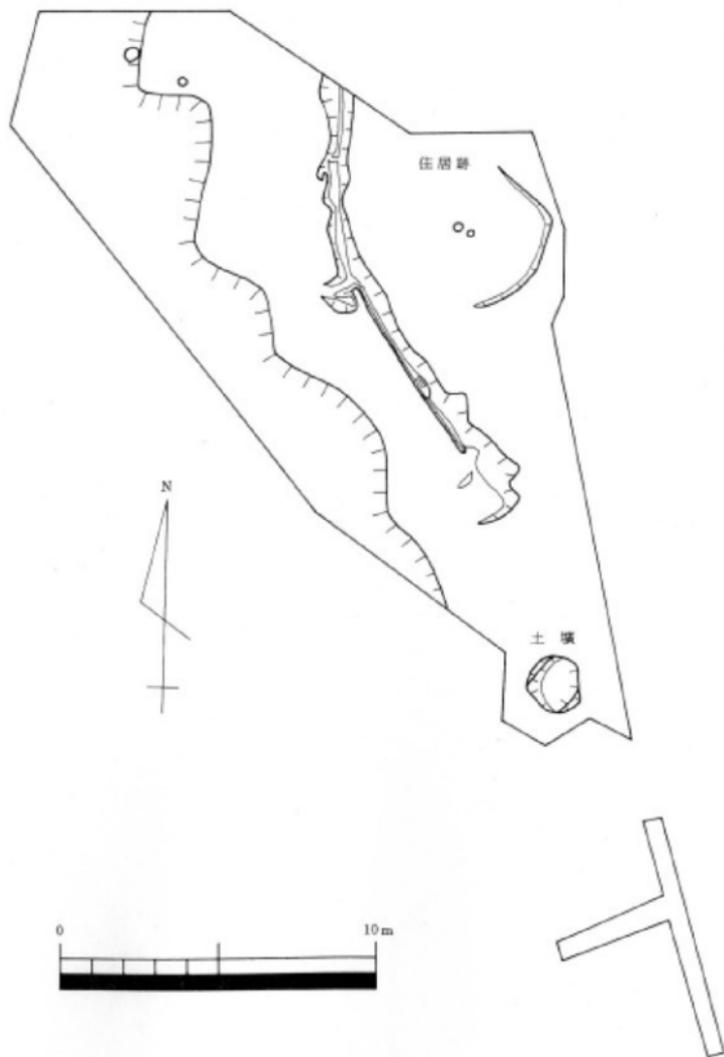
第51图 C地点出土土器实测图

## 小 結

本地点は、土壌のみが確認されたため詳細を把握することはできなかった。しかし、土取りによる削平をうける前の地形は、良好な尾根が延びていたと考えられ、この尾根上に住居跡が存在していたことが推定される。したがって、検出した土壌は、この住居に伴う貯蔵穴ではないかと推定される。

土壌の使用された時期については、出土した土器を手がかりに求められる。出土した土器の口縁部は「くの字」状の口縁部の端部を平たくし、凹線を施すものと施さないものが見られる。これらの特徴から、上深川Ⅰ、Ⅱ類に類似していることが考えられる。しかし第51図1で図示した土器は器形が球形に近く、口縁部は薄くなりつつ丸くおさめるという若干新しい傾向を示しているようである。したがって、本地点の土壌の使用時期は、弥生時代後期中葉から後半にかけての時期と考えられよう。( 桧垣 )

# IV D 地点遺跡



第 52 図 D 地点遺構配置図

## D地点遺跡の概要（第52図）

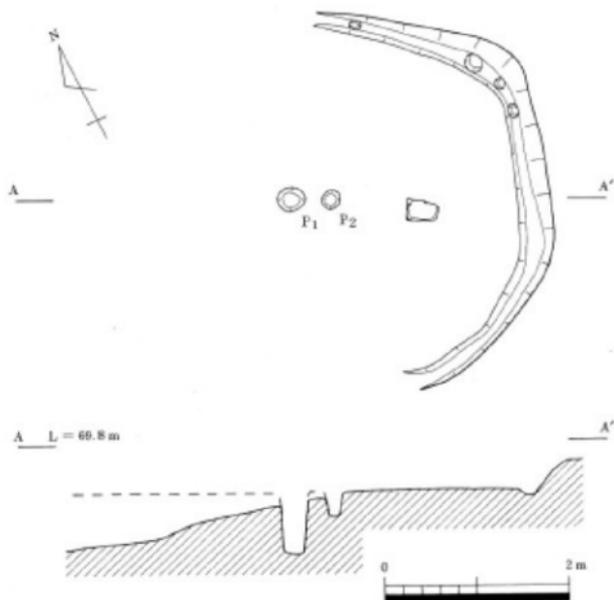
D地点は、A-2地点の約180m西南にあって、北にのびる小丘陵の西斜面に位置している。試掘調査により、住居跡の存在が確認されていたため、調査区を4区設定し、必要に応じて拡張を行ない、最終的には全面排土を実施した。その結果、竪穴式住居跡1基、土壇1基が検出された。

## 遺 構

### 1. 住居跡（第53図）

本住居跡は、D地点の東側、標高69.5mを測る小丘陵の西斜面に位置している。この住居跡は、尾根線近くの斜面に立地している関係上、東寄りの半分を最大30cmほど掘り込んで床面としており、西寄りの半分は盛土を施し構築したと考えられる。平面プランは、床面が半分程度しか検出されていないため定かではないが、東寄りの壁面から考えた場合、4.2×4.2mほどの隅丸方形に近いプランが想定できる。しかし、後述するP1を中心として考えた場合、4.2×5.6m程度の隅丸長方形に近いプランが想定できることから本住居跡の場合は後者と考えるのが妥当であろう。

柱穴と考えられるピットは2ヶ所あり、P1は残存部で径30cm、深さ60cmを測るが、本住居跡が斜面に



第53図 D地点住居跡実測図

位置していることを考え合わせるならば、実際には床面より70cm程度掘り込んでいたことが想定される。P2はP1の東約30cmの場所あり、径20cm、深さ25cmを測る。P1、P2の規模及び位置関係からみて、P1本住居跡の主柱穴とP2はP1の副柱穴と考えられる。この住居跡からは上記のピット以外には、柱穴と考えられるピットは検出されておらず、基本的に1本柱で屋根が架けられていたことが予想される。

また、床面の東側には、幅10～25cm、深さ5～10cmほどの壁溝がめぐらされており、壁溝内からは径10cm、深さ10～15cmほどの小ピットが4ヶ所認められた。さらに、P2のやや北東よりで40×30cm程度の範囲で不整形の焼土が検出されている。

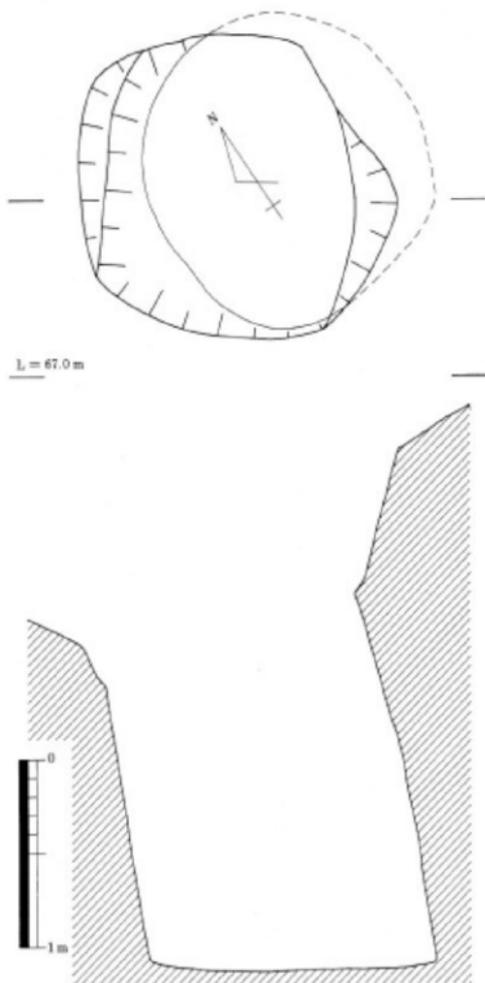
遺物は、土器片が若干検出されたがそのほとんど細片であり器形が判断できるものは1点のみであった。

## 2. 土壌 (第54図)

本土壌は、住居跡の北約15mの丘陵西斜面に位置している。上縁部は径180×165cmの不整形を成しており、底部はほぼ平坦で径160×170cmの円形に近いプランを呈している。深さは斜面に立地している関係上、東側で最大で280cmを測る大型の土壌である。

また、土壌内より遺物はわずかに検出されたが、いずれも細片であったため器形を判断するには至らず、土壌の営まれた時期については明確にし得なかった。

本土壌と前述した住居跡との関係については、①住居跡の規模が小型～中型の部類に属するのに対し、土壌は大型の部類に属する。②住居跡と土壌の距離が約15mと離れすぎている。ことなどから考えて、本土壌は貯蔵穴的な性格を有しているもの



第54図 D地点土壌実測図

の、住居跡とは直接関連はないものと思われる。

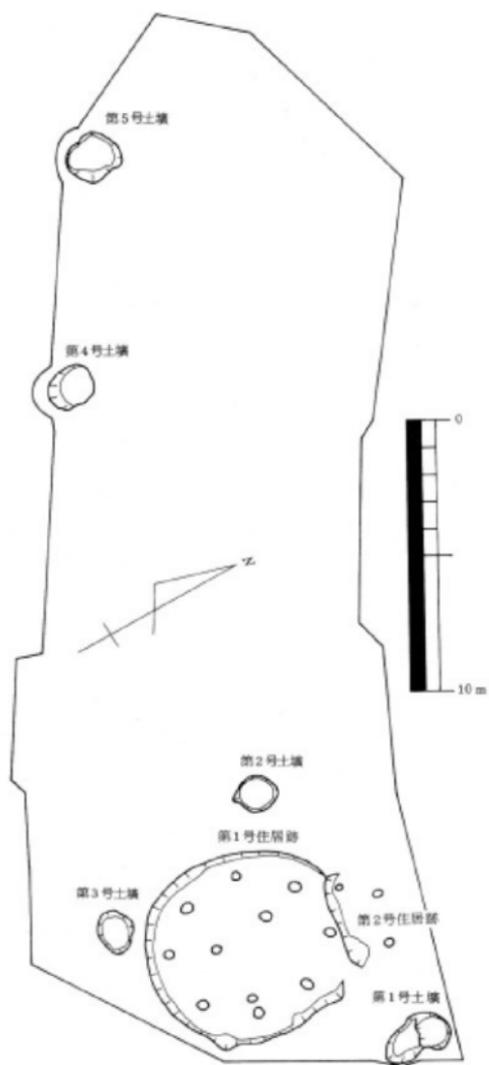
## 小 結

D地点遺跡からは、住居跡1基、土壇1基が検出された。このように検出された遺構が少なかった理由としては、D地点遺跡が現存する北に延びる丘陵自体が非常に狭小であり集落が立地するには、悪条件であったことがあげられよう。さらに、D地点遺跡の約15m北は、すでに調査開始以前に土取り工事によって、丘陵の大部分が削平されていた。この場所は、削平前の地形図を観察するかぎりにおいては、D地点遺跡より良好な丘陵が存在していたことが予想され、この地に集落が営れていた可能性もある。そのうえ、D地点の西方約120mの本丘陵と隣接する丘陵の先端部付近には、比較的広い平坦面が認められ、この平坦面からは、住居跡の存在が確認されている。

これらのことから考えて、住居跡等の生活関連遺構は、本地点より立地条件のよい隣接する丘陵の先端部付近ないしは、本丘陵先端部付近を中心に営れたものと考えられる。

さて、本地点の住居跡の営まれた時期については、遺物が皆無に近い状態であったために明確にはし得ない。であるが、住居跡内から検出された甕形土器の破片は、口縁部が「くの字」状に外反し、口縁端部には顕著な肥厚はみられず平坦で凹線がはいらないという弥生時代後期中葉頃の特徴をもっている。また、高陽町域で現在までに検出された住居跡は、弥生時代後期のものがほとんどであり、これは本住居跡の営まれた時期を考える上でわずかにでも傍証になろう。以上のことより、本住居跡の営まれた時期は弥生時代後期、それも立地条件の悪さなどを加味して考えると、後期中葉以降短期間使用されたと考えるのが妥当であろう。

(橋本)



第55图 E地点遗构配置图

## VII E 地点遺跡

### E 地点遺跡の概要 (第55図)

E 地点は、ニヶ城山から北にのびた尾根がその軸線を北西に変えた地点の丘陵上に位置している。試掘調査の成果に基づいて、尾根線を中心に南北に分け、さらに各々4区の調査区を設定し、必要に応じて拡張を行い、最終的には全面排土を実施した。その結果、竪穴式住居跡2基、土壇5基を検出した。

### 遺 構

#### 1. 第1号住居跡 (第56図)

第1号住居跡は、E地点の南東隅近くの尾根線上、標高約65mの場所に位置しており、平面形は径7.2～6.8mを測る円形に近いプランを呈している。壁高は、南側で最大30cmを測るが、住居跡の立地の関係上、北側に行くに従ってだいに低くなり、北側の一部では壁が見られなくなる。床面も北側の一部では盛土を施し構築している。

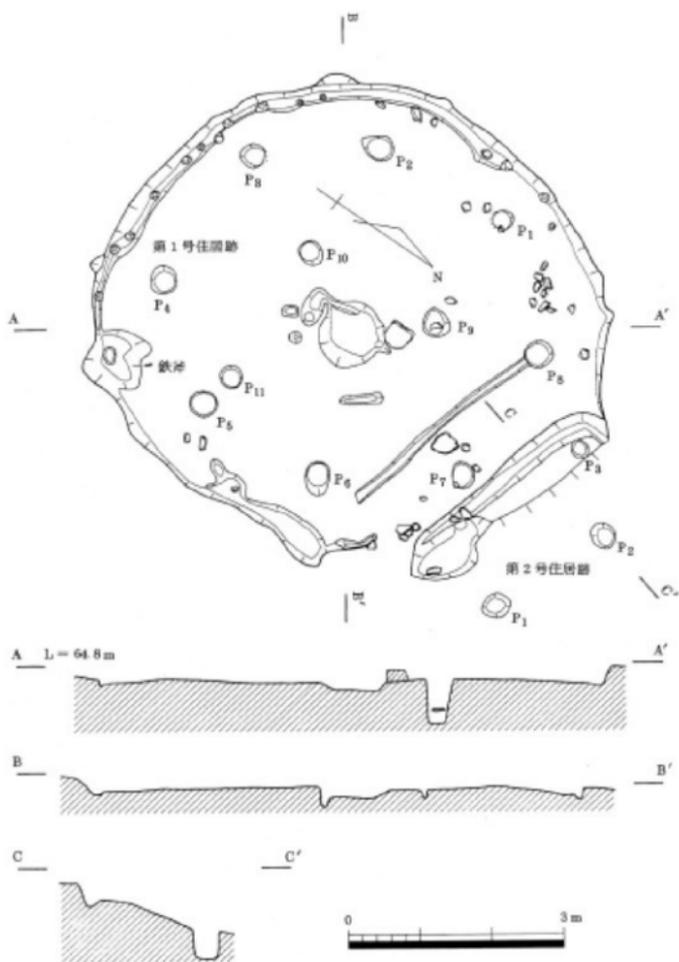
柱穴と考えられるピットは、P1～P11の11ヶ所認められ、これらは径30～40cm、深き50～66cmを測る。本住居跡は柱穴の位置関係から、2通りの屋根の構造が考えられる。まず、P1～P8を主柱とみた場合には、各々隣接する柱穴間が180～220cm、平均200cm、壁面からの距離は80～100cmを測り、それらの柱穴はほぼ円形にめぐらされている。これらのことから、P1～P8を主柱とみた場合には、種を放射状に地面まで葺きおろした寄棟造りの屋根を想定できる。また、P1、P2・P5・P6・P9・P10を主柱とみた場合には、P1・P2・P5・P6をむすぶと200×450cmの長方形ができ、P9・P10はその長方形の長軸上に見られ、P1～P2・P5～P6・P9～P10は各々平行になる。このことから、この6本の柱穴を基本にP3・P4・P7・P8を加えた計10本柱で構築された可能性が考えられ、棟の方向を東-西方向にもつ切妻造りの屋根が想定可能である。なお、P11はP5の西約20cmの場所に位置することから考えて、P5の副柱として使用されたものであろう。上記の二通りの場合のうち、本住居跡は柱穴11本をすべて使用した切妻造りの屋根を架けた可能性が高い。

壁溝は、南側半分と東側の一部に認められた。南側の壁高は、幅10～25cm、深さ5cm程度を測るもので、壁溝内には径10～18cm、深さ10～20cmほどの小ピットが14ヶ所みつかった。これは、B地点第4号住居跡の例から考えて、壁溝内に杭をうちこみ、壁面に矢板をたてかけたことを示唆している。東側の壁溝は、幅が最大30cm深さ15cmを測る。また、床面の中央部には、径90cmほどの範囲で不整形の掘り込みが認められた。ここからは焼土等が検出されなかったが、炉跡の可能性も残っている。

次に、本住居跡の出入口について考えてみると、①P1～P3の隣接する柱穴間は平均200cmを測るが、P3～P4間は220cmを測り、他の柱穴間より若干長い。②このP3～P4間の南よりの壁溝には、小ピットが7ヶ所認められる。これは、壁溝内にある小ピットの半分をしめており、特にこの壁面部分にのみ、堅固な補強が施されていることが感じられる。③床面からは、河原石が多く見つかったが、P3～P4の南よりには河原石が皆無であり、床面を踏みかためた痕跡が認められる。④住居跡の南側直下には岩ノ上川が流れ、小河谷を形成しており、この方向を意識したことは十分考えられる。以上の点からP3～P4間の南側に出入口が存在した可能性が高い。

なお、床面の北寄りから幅約10cm、深さ5cm、長さ320cmを測る一直線状の溝が見つかっており、これは、後述する第2号住居跡に伴うものと考えられる。

遺物は、若干量の土器片と鉄器数片を検出した。



第56図 E地点第1・2号住居跡

## 2. 第2号住居跡(第57図)

第2号住居跡は、第1号住居跡の北側の一部と切り合った形で検出された。本住居跡は、傾斜面に立地している関係上、壁面は南側の一部しか認められず、壁高は最大で35cmを測る。平面プランは、床面のほとんどが盛土によって構築されているため定かではないが、南側の壁面及びP1、P2の位置関係から考えた場合、一辺3.6mほどの隅丸方形に近いプランが想定できる。

柱穴と考えられるピットは、3ヶ所みられ、P1-P2は径40cm、現存する深さは40~50cmを測る。しかしながら、斜面に立地していることを考えると、P1、P2は、築造当時約70cm掘り込んでいたことが想定できる。P3は住居跡の南西隅にあり、径約30cm、深さ55cmを測る。これらのことより、P1、P2は規模、位置関係より考えて支柱と想定され、本住居跡は基本的に2本柱で構築されていたものと推測される。P3は、その位置関係、規模等から副柱として使用されたと考えるのが妥当であろう。

壁溝は南側にしか認められず、遺残する壁溝は、幅10~20cm、深さ約10cmを測る。また、床面の南東隅より、径100×50cm、深さ30cm程度の不整形の掘り込みが検出されたが、焼土等の検出はなく、その性格は不明である。

遺物は、わずかに検出されたが、器形を判断しうるものは、1点のみであった。

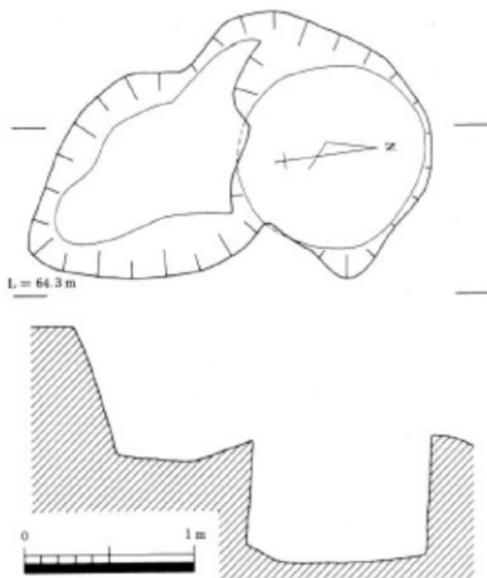
なお、前述したように、第1号住居跡の床面北寄りからは溝が検出されたが、これは第2号住居跡と平行しており、多分に本住居跡を意識したかのような造り方をしている。さらに、第2号住居跡が斜面に位置していることを加味して考えると、尾根線あたりからの水や土砂の流入を防ぐために何らかの方策が図られていた可能性も考えられよう。

## 3. 第1号土壌

(第58図)

第1号土壌は、第2号住居跡の東約2.5mの斜面にあって、2基の土壌が重複している。この重複している2基の土壌の正確な規模は定かではないが、北側の土壌の上縁部は、径150×120cmの不整形形で、底部は若干の丸みをもち、径105cmの円形を成し、深さは最大70cmを測る。この北側の土壌はその形状、レベル等から考えて、第2号住居跡の貯蔵穴の可能性がある。

また、南側の土壌については、上縁部径150×120cm、底部径100×60cm、深さ70cmを測るものである



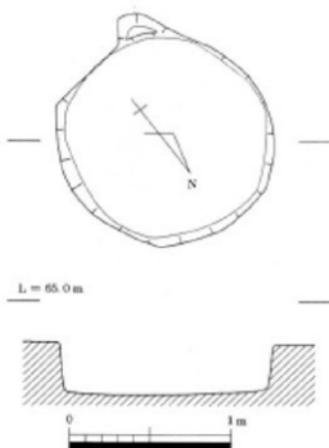
第57図 E地点第1号土壌実測図

が、形状が非常にいびつであり、土器等の検出もみられないため、貯蔵穴的な性格はないと思われる。

#### 4. 第2号土壌 (第58図)

第1号住居跡の西約1.5mの場所から検出されたこの土壌は、上縁部径135cm、底部はわずかに丸みもち、径125×130cmのほぼ円形のプランを有し、深さは最大で35cmを測る。なお、その位置関係よりみて、本土壌は第1号住居跡の貯蔵穴の可能性はある。

遺物は、若干量の土器片を出土したが、そのすべてが細片であるため器形を判断するに至らなかった。

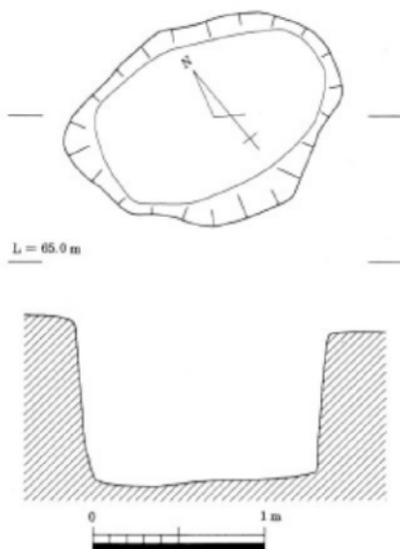


第58図 E地点第2号土壌実測図

#### 5. 第3号土壌 (第59図)

第3号土壌は、第1号住居跡の南約1mの場所から検出されたもので、上縁部のプランは不整形で径165×120cmを測る。底部はわずかに丸みもち、径140×90cmの長円形のプランを有し、深さは約100cmを測る。本土壌は、その位置関係からみて、第1号住居跡の貯蔵穴の可能性はある。

遺物は、土器片を数片検出したが、いずれも細片であるため器形を判断するに至らなかった。



第59図 E地点第3号土壌実測図

#### 6. 第4号土壌 (第60図)

第3号土壌の西約18mの斜面から検出されたもので、上縁部のプランは不整形で径175×140cm、底部はわずかに丸みもち、径140×120cmの長円形のプランを有し、深さは最大で105cmを測る。

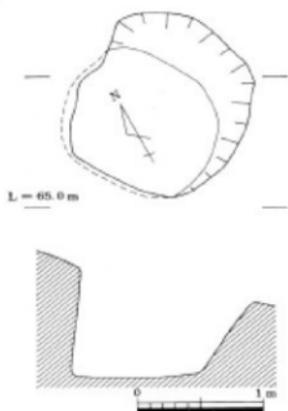
なお、土壌内より遺物は検出されなかった。

#### 7. 第5号土壌

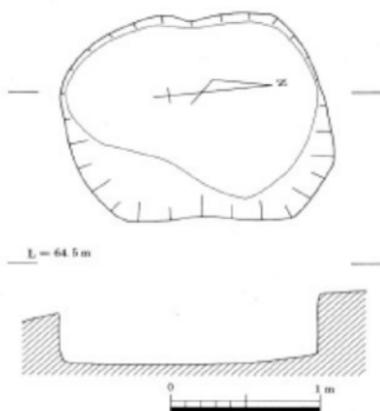
第5号土壌は、第4号土壌の北西約7mの傾斜面から検出されたもので、平面形は不整形のプランを有している。上縁部は、径175

× 155 cm, 底部はわずかに丸みもち, 径 165 × 135 cm, 深さは最大で 50 cm を測る。

なお, 土壌内より遺物は検出されなかった。



第 60 図 E 地点第 4 号土坑



第 61 図 E 地点第 5 号土坑実測図

## 遺物

E 地点からは, 若干量の土器片がみつかった。このうち, 図示できるものは 13 点であり, その詳細は, 表のとおりである。また, 第 1 号住居跡より, 鉄器 2 点が検出された。

### 1. 鉄器 1 (第 62 図)

鉄器 1 は, 全長 7.7 cm, 刃部最大幅 3.8 cm, 袋部最大幅 3.7 cm を測る有袋鉄斧である。形状は, 厚さ 4 mm 程度の鉄板を両端から折り曲げた楕円形の袋部を持っている。刃部は, 鋭利に仕上げられているが, 使用が頻繁であったためか, 片減りが認められる。また, 袋部の内面から上部にかけて木質が残存している。そのうえ, 袋部外面にも木質が残存しており, 袋部の表面に樹皮状のものを巻きしめた痕跡が認められる。

### 2. 鉄器 2 (第 63 図)

鉄器 2 は, 現存部の長さ 4.45 cm, 身部幅 1.8 cm, 身部厚さ 0.35 cm を測る鉄鐮の身部から茎部にかけての残片である。また, 身部の断面は菱形を呈しており, 身部には明瞭な錆が認められる。さらに, 閉部には造りだしが見られる。なお, この鉄鐮は大村直氏の分類によれば, 柳葉式の一つと規定されており, そのうち

(注)

の乙類と考えられるものである。

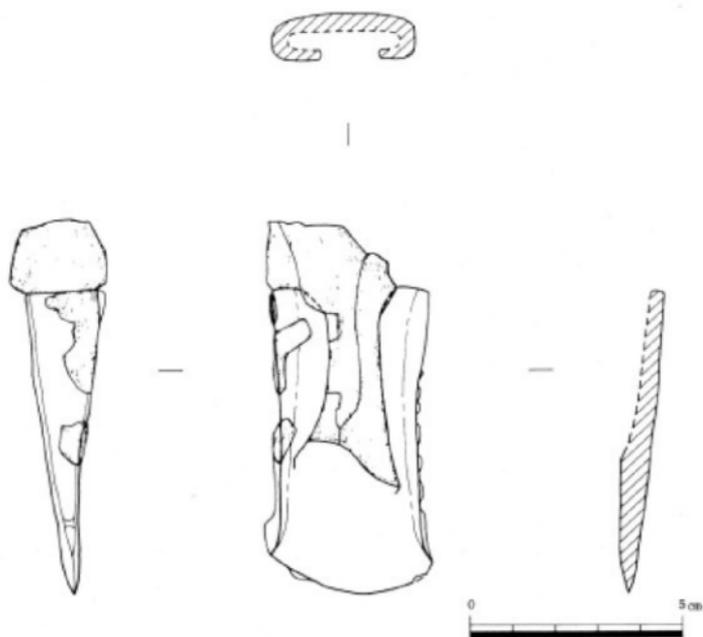
(注) 大村直「弥生時代における鉄鐮の変遷とその評価」『考古学研究』1983.12

## E地点 出土土器観察表

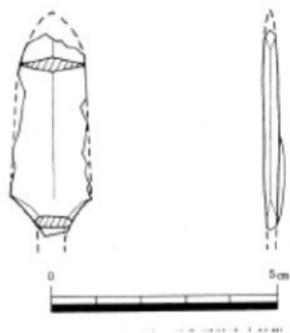
表4

Nx	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
1	1 住	鉢	口径 10.4 器高 7.3 底径 2.0	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は丸くおさめている。	胴部外面はヘラ磨き, 脚台部は指でつまんで整形しナデ調整, その後内面も含め全体に化粧土を付け, ナデを施している。頸部直下にはクシ歯状工具による刺突文がめぐらされている。	内外面 明黄褐色 胎土 若干砂粒を含むが良好 焼成 良好
2	1 住	鉢	口径 11.6 器高 9.8 底径 3.5	口縁部はやや内湾し, 端部は丸くおさめている。底部は平底である。	内外面ともヘラ磨きの後, ナデ調整を施している。	内外面 明黄褐色 胎土 石英, 長石を含む 焼成 やや軟調 外面にスス付着
3	1 住	壺	口径 12.2 器高 不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち, 端部はやや丸みを帯びながらも平たくおさめている。	外面から口縁部内面にかけえ横ナデ, 外面頸部以下はハケ目調整, 内面胴部以下はヘラ削りを施している。	内外面 黄褐色 胎土 1mm大の砂粒を含む 胴部下半にスス付着
4	1 住	鉢	口径 12.7 器高 不明	ゆるく外反する口縁部をもち, 端部は器厚を保ちつつ丸くおさめている。	外面は磨減が著しいが, 胴部はナデ調整を施している。口縁部内面は横ナデ, 頸部以下はヘラ削り。	外面 淡黄褐色 内面 黄褐色 胎土 3mm大の石英砂粒を含む 焼成 良好
5	1 住	鉢	口径 15.2	口縁部はやや内湾し, 端部は丸くおさめている。	外面はタテ方向のハケ目調整, 内面はヘラ削り後ナデ調整を施している。	外面 淡赤褐色 内面 黒褐色 胎土 若干砂粒を含むが良好 焼成 良好
6	1 住	壺	口径 13.8 器高 不明	外反する口縁端部は内側上方へ強く折り曲げ複合口縁とし, 端部は丸くおさめている。	外面口縁部下方はタテ方向ヘラ削り, 内面口縁部下方はヘラ磨きを施した後, 全体をナデ調整口縁部上方に3~4条のクシ目の波状文が見られる。また, 頸部には凸帯が認められる。	内外面 黄褐色 胎土 大粒の石英長石粒を含む 焼成 良好
7	1 住	壺	口径 22.7 器高 不明	口縁端部は肥厚は見られず平たくおさめている。	外面口縁部付近は, 横方向のハケ目調整, 以下はタテ方向のハケ目調整の後, 外面はナデ調整, 内面は横方向のナデ調整を施している。	内外面 淡黄褐色 胎土 小砂粒を含む 焼成 良好

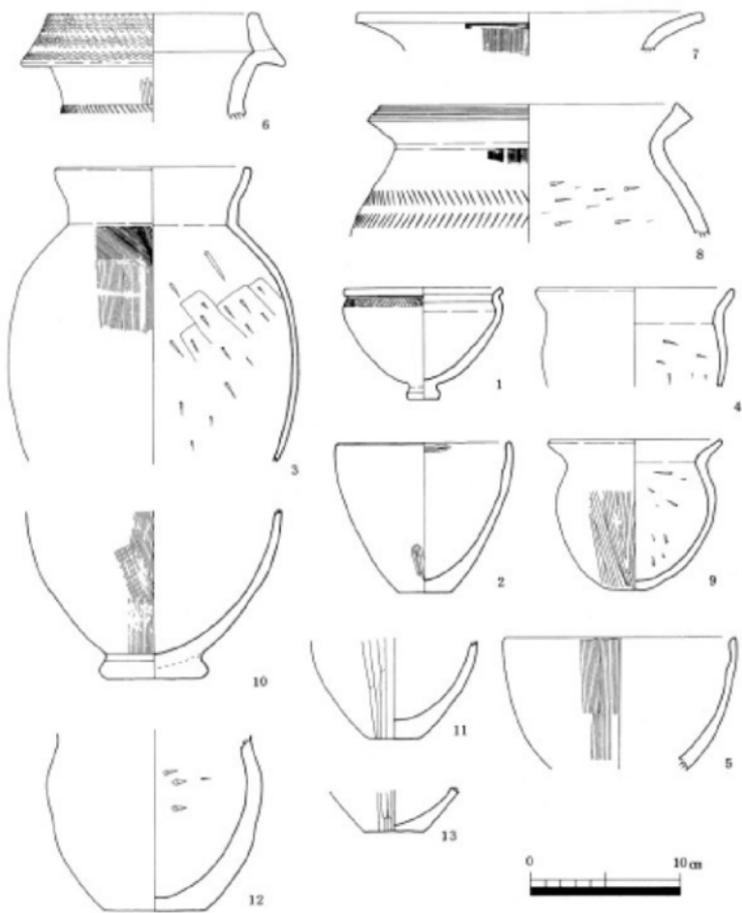
No.	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整, 成形について	備考
8	2 住	壺	口径 19.5 器高 不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち, 端部に3条の凹線がみられる。	外面頸部以下はタテ方向のハケ目調整の後ナデ調整, 口縁部は内外面とも横ナデ, 内面頸部以下は横方向のヘラ削りを行っている。頸部直下にはヘラ状工具により刻みが施されている。	外面 淡黄褐色 内面 淡赤褐色 胎土 大粒の石英, 長石砂粒を含む
9	1 住	壺	口径 11.2 器高 9.9	「くの字」状に外反する口縁部をもち, 端部は丸くおさめている。	外面は磨減が著しいため定かではないが, 胴部はハケ目調整, 内面口縁部はハケ目調整の後ナデ, 以下はヘラ削りを施している。	外面 黄褐色 内面 赤褐色 胎土 4~5mm大の砂粒を含む 焼成 軟調 外面に黒斑が見られる。
10	1 住	鉢?	底径 6.3	平底の底部としている。	外面はクシ歯状工具で縦方向の調整の後ナデを行っている。底部には接合時の痕跡が認められる。	内外面 黄褐色 胎土 砂粒を多く含む 焼成 良好
11	1 住	不明	底径 3.5	平底の底部としている。	外面はヘラ削りの後, ヘラナデ, 内面はヘラ削りを施している。	内外面 赤褐色 胎土 大粒の砂粒を含む 焼成 良好 外面にスス付着
12	1 住	不明	底径 6.7	平底の底部としている。	外面はナデ, 内面は横方向のヘラ削り後ナデを施している。	内外面 赤褐色 胎土 大粒の石英砂粒を含む。 焼成 良好
13	1 住	不明	底径 4.0	底部はやや凹底を呈する。	外面はヘラ削り後ナデを施している。	外面 灰褐色 内面 淡黄褐色 胎土 長石砂粒を含む 焼成 良好



第 62 图 E 地点第 1 号住居跡出土鉄斧



第 63 图 E 地点第 1 号住居跡出土鉄鏃



第 64 图 E 地点出土土器实测图

## 小 結

E地点からは、住居跡2基、土壌5基が検出された。第1号住居跡と第2号住居跡の築造順位は、第2号住居跡南壁付近の第1号住居跡床面同一レベルから土器が検出されており、第1号住居跡のP7付近から出土した土器と接合可能であった。このことより考えて、第2号住居跡が廃棄された後に、第1号住居跡が営まれたことがわかる。

次に、この2基の住居跡の営まれた時期について考えてみたい。第1号住居跡から出土した甕形土器の口縁部には肥厚が見られず、平坦なものと端部がわずかに丸みをもつものが認められる。また、壺形土器は、口縁部の上方を内に折り曲げた施文部に波状文をつけ、頸部に貼り付け凸帯をもつという特徴をもっている。これらの土器の特徴は、弥生時代後期中葉から後半にかけてのものと思われる。さらに、第1号住居跡から検出された鉄鍔は、兵庫県奈カリと遺跡のものと同部の断面が菱形である点、明瞭な錆が認められる点、(注)

部には造りだしが見られる点で、共通する形態を持っており規模も似かよっている。これらのことより考えて、第1号住居跡は、弥生時代後期後半、それも終末に近い頃に営まれたものと思われる。また第2号住居跡は

前述したように少なくとも第1号住居跡より古い時期に営まれたものである。第2号住居跡から検出された遺物は、口縁部が「くの字」状に外反し、口縁端部が上下に肥厚し、3条の凹線がはいっている甕形土器の破片のみであったため、時期は明確にし得ないが、概ね弥生時代後期それも中葉以前に営まれたものと考えられる。

さて、土壌についてみると、第1～3号土壌からは細片ながら土器が出土しており、その位置も住居跡と近接していることから、第1、2号住居跡の貯蔵穴的な性格が考えられる。であるが、第4、5号土壌は遺物も認められず、その近辺から住居跡等の遺構も検出されなかったため、その性格は明らかにし得ない。しかし、この部分は特に後世の削平をうけており、何らかの遺構が存在した可能性も残されるため、第4、5号土壌は貯蔵穴的な性格を有していたものかも知れない。(橋本)

(注) 兵庫県教育委員会「奈カリと遺跡の調査」『三田市、北摂ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概報』

## VIII 岩上城跡

### 遺跡の概要 (第65図)

岩上城跡は、E地点の存在する丘陵の先端部に位置するもので、第4郭と考えられていた郭の一部が造成計画地内に含まれるため、その計画地部分についてトレンチ調査を行い、さらに、城跡全体については、地権者の同意を得て測量調査を行った。

その結果、郭4、小郭1、帯郭1、縦堀2の存在が想定され、堀切1の存在が確認された。

### 遺 構

#### 1. 第1郭

第1郭は、現地表面の標高約51mを測り、本城跡の最高所に位置しており、現状は畑として耕作されている。規模は、現況で長軸23m、短軸12.5mを測る本城跡最大の郭である。

また、第1郭の西南約1.5m下には、本郭を取り囲むように長軸約20m、短軸2mの規模をもつ帯郭が配されており、第1郭の北東約3.5m下には、長軸7.5m、短軸約1.5mの小郭が配されている。帯郭の北、第2郭の南側及び第1郭の北側からは、それぞれ、縦堀1、縦堀2が認められた。

#### 2. 第2郭

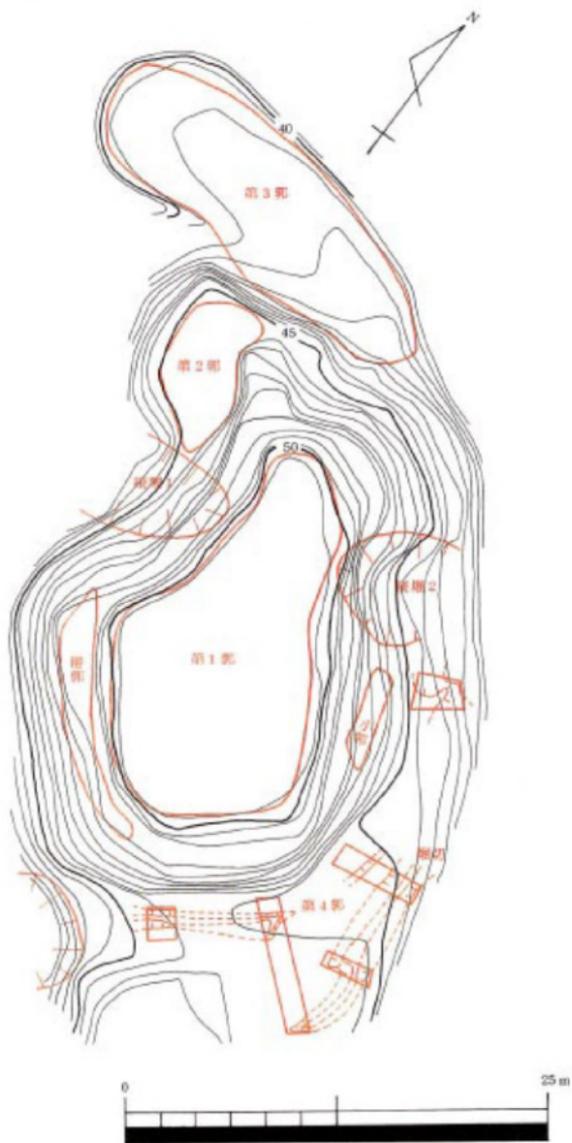
第2郭は、第1郭の北西に配された郭で、第1郭との比高差は現況で約5mを測る。本郭は、現在墓地として使用されており、規模は長軸10m、短軸4.5mを測る。

#### 3. 第3郭

第3郭は、第2郭の北に配された郭で、第2郭との比高差は約3mを測る。現状での規模は、長軸25m、短軸8mを測る第1郭に匹敵する規模をもつ郭である。

#### 4. 第4郭

第4郭は、第1郭の東に配された郭で、第1郭との比高差は6mを測る。長軸20m、短軸5m程度と予想されていた本郭は、調査の結果、長軸18m、短軸3.5mほどの郭であることが確認され、この郭の北東には、幅約2m、深さ1.8mほどの堀切が見つかった。



第 65 図 岩上城跡地形測量及び遺構配置図

## 小 結

岩上城跡は、古文書等の文献では見いだすことができないが、このあたりでは、以前よりこの地を城山と呼称しており、代々山城であることが語り継がれていたようである。

本城跡の築造方法は、広島市内に見いだされる多くの山城と同様に、丘陵の先端部に山城を築き、その後方を断ち切って築城している。この山城の南西側は急峻な斜面で、直下には岩ノ上（落合）川が流れ、北東側も急峻な斜面になっており、自然の地形を最大限に利用して築城されている。また、北東側は南西側のように小河川が流れていないかわりに、第4郭の北東に堀切を造り、より堅固な防御施設をほどこしている。大手にあたると考えられる北西側には、第2、3郭を配し、守りを堅固にしている。搦手にあたる南東部は、第1郭と尾根鞍部との比高差約6mを測り、トレンチ調査の結果、さらに1m程度の掘り込みが認められたが、これに続く背後の尾根は緩傾斜であり、手を加えた痕はみられないことから、他の部位と比較して、搦手の防御能力が低いという観は否めない。

以上のように、本城跡は、第4郭の一部の調査であったため、城跡全体を把握するには至らなかった。そのうえ、山城に関連する遺物も検出しなかったため、岩上城跡の使用年代についても明らかにし得なかった。ではあるが、トレンチ内より弥生土器がわずかに検出されており、本城跡は中世山城のほかに、弥生時代の遺構が存在する可能性をもっていることが明らかになった。

（橋本）

## IX 広島市末光遺跡群B地点出土の弥生時代人骨

長崎大学医学部解剖学第二教室

松下孝幸

### はじめに

末光遺跡は広島市安佐北区高陽町大字末光字瀬垣山に所在する遺跡で、1980年(昭和55年)に発掘調査が行われ、B地点にある第10号土壌から弥生時代人骨が出土した。

弥生時代人骨の出土例は西日本、とくに九州に多く、また保存状態も比較的良好である。従ってこの地域での弥生時代人骨の研究は他の地域に比べて、比較的進展しており、九州の北半分と山口県の西部地域については、弥生時代人骨の二つのタイプが存在することが明らかにされている。一つは北部九州、山口県西部の高顔、高身長を特徴とするタイプ、もう一つは長崎県を中心とする西北九州地域の低、広顔で、低身長を特徴とするタイプである。前者については、金関(1988, 1989, 1966)は大陸からの渡来民との混血の結果、高顔、高身長という特徴が生じたと推論している。

中国地方で大量の弥生時代人骨が出土しているのは、山口県の西海岸からだけであり、中部地域および東部地域からはほとんど弥生時代人骨の出土例がなく、この地方の弥生人の特徴は全く不明である。北部九州・山口県西部にみられる高顔、高身長タイプの弥生人の由来を解明するためにも、この中国地方の弥生時代人骨の特徴を明らかにしておく必要がある。

幸い広島市教育委員会社会教育課に本遺跡出土人骨も含め、弥生時代人骨が保管しており、これらの人骨について研究調査をする機会を与えていただいた。本人骨の保存状態は著しく悪いものであったが、大腿骨の一部について人類学的観察および計測が可能であったので、その結果を報告したい。

### 資料

人骨は出土したままの状態でも保管してあったが、保存状態は著しく悪いものであった。土壌に残存していたのは主に四肢骨であったが、これらは層状をなしており、数体分の四肢骨が埋葬されたものと考えられる。人骨の保存状態から、形質人類学的資料として観察や計測に耐えられるものではなさそうであったので、骨の種類と体数を明らかにするために、現状のまま、できる限り詳細に観察を行い、その上で人骨を取り上げることにした。保存状態が著しく悪いため、体数を明らかにすることはきわめて困難であったが、大腿骨の数から、少なくとも3体分と推定した。大部分の人骨は観察も計測も不可能なものであったが、大腿骨の骨体2本が観察および計測不可能であった。

表5 大腿骨

人骨番号	性別	年齢
大腿骨1	男性	不明
大腿骨2	女性	不明

表5に示すとおり、この2本の大腿骨のうち1本は男性で、もう1本は女性の大腿骨である。

なお、この人骨の所属時代は、別稿で述べられているとおり、考古学的所見から弥生時代後期と考えられている。

比較資料としては、広島県の弥生時代人骨の例として、佐久良弥生入



第66図 遺跡分布図

(松下, 1984)を、北部九州、山口地方の例として、土井ヶ浜弥生人(財津, 1956)、二塚山弥生人(松下, 1979)を、西北九州の例として、大友弥生人(松下, 1981)を用いた。

## 所 見

第10号土壌に残存していたのは、頭蓋および四肢骨であったが、保存状態は著しく悪いものであった。

頭蓋は頭蓋冠が残存していたが、観察も計測もできないものであった。四肢骨は大腿骨、脛骨、腓骨、距骨を確認したが、大部分は取り上げることができなかった。大腿骨は2本だけを計測ができる状態で取り上げることができたので、これらを「大腿骨1」、「大腿骨2」とした。

### (1) 大腿骨1 (男性)

右側骨体近位半が残存していた。径はそれほど大きいものではないが、粗線は、幅は狭いものの後方へ著しく突出しており、柱状を呈している。

計測値は表6に示すとおり、骨体中央部と推定される部分での矢状径は29mm(右)、横径は26mm(右)で骨体中央断面示数は111.54(右)となり、柱状形成はかなり強い。また上骨体断面示数は70.97(右)となり、骨体上部は扁平である。

骨体の径が大きく、頑丈なことから、性別は男性と考えられるが、年齢は不明である。

表6. 大腿骨計測値 (mm)

人 骨 番 号	大 腿 骨 1 (右)		大 腿 骨 2 (左)	
	男 性		女 性	
6.	骨体中央矢状径		29	23
7.	骨体中央横径		26	24
8.	骨体中央周		86	73
9.	骨体上横径		31	—
10.	骨体上矢状径		22	—
6/7	骨体中央断面示数		111.54	95.83
10/9	上骨体断面示数		70.97	—

次いで、広島市の佐久良、山口県の土井ヶ浜、佐賀県の二塚山、大友の各遺跡から出土した弥生時代人大腿骨と比較してみた。表7に示すとおり、骨体中央矢状径は佐久良2号石棺1号人骨よりは小さいが、佐久良1号石棺人骨よりも大きく、他の比較資料と大差ない。骨体中央横径は二塚山弥生人よりは小さいが、佐久良2号石棺1号人骨より大きく、その他の比較資料とは大差ない。骨体中央周も二塚山弥生人よりは小さいが、佐久良1号石棺人骨より大きく、その他の比較資料とはほとんど大差ない。骨体中央断面示数は佐久良1号石棺人骨、土井ヶ浜弥生人、二塚山弥生人よりも大きい、佐久良2号石棺1号人骨よりも小さく、大友弥生人の平均値にきわめて近い。また上骨体断面示数は土井ヶ浜弥生人、二塚山弥生人、大友弥生人よりも小さく、骨体上部の扁平性はかなり強い。すなわち、本大腿骨は粗線の発達がきわめて良好であり、こうした特徴は佐久良2号石棺1号人骨の大腿骨にも認められ、骨体の矢状径と横径がともに大きく頑丈な二塚山弥生人の大腿骨とは異なり、大友弥生人の大腿骨に比較的近いようであるが、骨体の上部はこれよりも扁平である。

表7. 大腿骨計測値 (男性, 右, mm)

大 腿 骨 1	末 光	佐 久 良		土 井 ヶ 浜		二 塚 山		大 友		
		1号石棺		弥 生 人		弥 生 人		弥 生 人		
		人 骨	1号人骨	(財津)		(松下)		(松下)		
		(松下)		n	M	n	M	n	M	
6.	骨体中央矢状径	29	25 (左)	31 (左)	56	28.6	25	30.40	41	28.85
7.	骨体中央横径	26	26 (左)	24 (左)	56	26.1	26	28.12	41	26.07
8.	骨体中央周	86	82 (左)	86 (左)	56	86.6	25	91.84	41	87.22
9.	骨体上横径	31	—	—	53	31.8	22	32.23	42	30.62
10.	骨体上矢状径	22	—	—	53	25.6	21	26.62	42	24.83
6/7	骨体中央断面示数	111.54	96.15 (左)	129.17 (左)	55	109.8	25	108.71	41	111.72
10/9	上骨体断面示数	70.97	—	—	51	81.0	21	82.50	42	81.34

## (2) 大腿骨 2 (女性)

左側骨体が残存していた。径は小さく、粗線の発達もきわめて弱い。

計測値は表 6 に示すとおり、骨体中央部と推定される部分での矢状径は 23mm (左)、横径は 24mm (左) で、骨体中央断面示数は 95.83 (左) となり、骨体中央部の断面形は横広の楕円形を呈している。

骨体の径がやや小さいことから、性別は女性と考えられるが、年齢は不明である。

次いで、「大腿骨 1」の場合と同じように他の資料と比較してみると、表 8 のとおり、骨体中央矢状径、骨体中央横径および骨体中央周は土井ヶ浜弥生人、二塚山弥生人および大友弥生人よりも小さく、とくに骨体中央周は著しく小さい。骨体は矢状径よりも横径の方が大きいので、骨体中央断面示数は小さい値となり土井ヶ浜弥生人、二塚山弥生人および大友弥生人よりも小さな値を示している。すなわち、本大腿骨は諸径が小さく、粗線の発達も悪いので、骨体の径は矢状径よりも横径の方が大きいものである。

表 8. 大腿骨計測値 (女性, 右, mm)

	末光 大腿骨 2	土井ヶ浜弥生人 (財津)		二塚山弥生人 (松下)		大友弥生人 (松下)		
		n	M	n	M	n	M	
		6.	骨体中央矢状径	23	33	25.6	14	26.57
7.	骨体中央横径	24	33	25.0	14	25.86	30	25.03
8.	骨体中央周	73	33	79.6	14	82.71	28	80.32
9.	骨体上横径	—	26	30.4	10	30.10	32	29.06
10.	骨体上矢状径	—	31	22.8	10	23.30	32	22.75
6/7	骨体中央断面示数	95.83	33	102.8	14	102.79	30	104.05
10/9	上骨体断面示数	—	31	75.7	10	77.66	32	78.42

## (3) 胫骨 (男性)

右側骨体の遠位半が残存していた。外側面が破損しているので計測はできないが、径はやや大きく、また骨体は扁平である。

骨体の径がやや大きいことから、性別は男性と考えられるが、年齢は不明である。

## (4) 距骨 (性別不明)

右側の距骨滑車の上面と外果面の一部が残存していた。径はあまり大きいものではなさそうであるが、保存状態が悪いので詳細は不明である。

性別、年齢はともに不明である。

## 総 括

広島市安佐北区高陽町大字末光字瀬垣山にある末光遺跡の発掘調査が1980年(昭和55年)に行われ、B地点の第10号土壌から弥生時代人骨が出土した。保存状態は著しく悪いものであったが、大腿骨は計測できるものがあり、また広島市では弥生時代人骨の発見例は少なく、貴重な資料なので、できるだけ詳しく観察し、他の資料と比較検討した。その結果を要約すれば次のとおりである。

1. 残存していた人骨の保存状態は著しく悪かったので、体数を明らかにすることはきわめて困難であったが、大腿骨の数から、少なくとも3体分と推定される。
2. この人骨は弥生時代後期に属する人骨である。
3. 残存していた人骨のうち、骨の種類を同定することができたものは、頭蓋大腿骨、脛骨、腓骨、距骨であり、そのうち観察が可能なものは大腿骨、腓骨、距骨で、計測ができたのは大腿骨のみであった。
4. 男性大腿骨の計測値は、骨体中央矢状径が29mm(右)、横径は26mm(右)で、骨体中央断面示数は、111.54(右)となり、柱状形成はかなり強いもので、また上骨体断面示数は70.97(右)となり、骨体上部は扁平である。
5. 女性大腿骨の計測値は、骨体中央矢状径が23mm(左)、横径は24mm(左)で、骨体中央断面示数は95.83(左)となり、骨体中央部の断面形は横広の橢円形を呈しており、粗線の発達はきわめて悪い。
6. 腓骨は右側骨体の遠位半が残存していたにすぎないが、径は大きく、骨体は扁平である。男性の腓骨と推定される。
7. 以上の様に、末光遺跡出土の弥生時代人の男性大腿骨には強い粗線の発達が認められ、また骨体上部は扁平であり、腓骨も扁平であった。このように男性の四肢骨には縄文人的な形質が認められたが、女性大腿骨の粗線の発達は著しく悪く、骨体は横径が矢状径よりも大きく、その断面形は横広の橢円形を呈していた。こうした特徴が広島県の弥生人の共通した特徴なのかは興味ある問題であるが、現在広島市の佐久良遺跡と丸子山遺跡出土の弥生時代人骨について検討を行っているので、それぞれの報告書の中でこの問題についても考察を行ってみたいと考えている。

《横筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた広島市教育委員会社会教育課の方々、ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

## 参 考 文 献

1. 金関丈夫 1959: 弥生時代の日本人。日本の医学- 第15回日本医学会総会学術集会記録-, 1:167-174。
2. 金関丈夫、永井昌文、佐野一、1960: 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について。人類学研究7: 1-36。
3. 金関丈夫、1966: 弥生時代人。日本の考古学, 3: 460-471。
4. 松下孝幸、1979: 二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山(佐賀県文化財調査報告書第46集)242-255。
5. 松下孝幸、1981: 佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書第1集)。
6. 松下孝幸、1981: 宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡(佐世保市埋蔵文化財調査報告書)93-109, 114-118, 145-146。

7. 松下孝幸他, 1982: 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報(豊北町埋蔵文化財調査報告第2集)19-30。
8. 松下孝幸, 1984: 広島市佐久良遺跡出土の弥生時代人骨。佐久良遺跡発掘調査報告(広島市の文化財第27集)付編
9. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart 429-5970
10. 内藤芳篤 1981: 弥生時代人骨。人類学講座5, 日本人1, 雄山閣, 東京, 57-99。
11. 財津博之, 1956: 山口県土井ヶ浜弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。人類学研究, 3: 320-349。

## X 考 察

### 弥生墳墓第10号墓について

本遺跡B地点第10号墓は、太田川流域においては初見であり、埋葬形態に特色が見られることから、若干の考察を加えてみたい。

既に述べたように、本例は土壌であり、その形状は断面袋状を呈しており、第4号住居跡に近いことから考えて、本来は第4号住居に伴う貯蔵穴と考えられよう。本例は、貯蔵穴としての用途が終了した時点で墓墳として利用したと考えられる。

墳内からは、上・下2層に分かれて人骨が出土した。各層は、ほぼ水平を保って検出されたが、その骨の部位の構成は異なっている。上層は、頭骨及び小片で、下層は少なくとも3体分の成人の大腿骨を中心に構成されている。骨の検出状況、部位構成から他所で白骨又は白骨に近い状態となった骨の目立つ部分のみを集めて埋葬したものと思われる。上下2層の存在から、2度の埋葬が行われていることが確認されるが、各層に伴うと考えられる土器からは時期差は見られない。したがって、2度の埋葬とはいえほとんど時期差のないほど近接した時期に埋葬したと考えられる。

人骨と共に灰層と炭化物が出土している。このことは、人骨を集める際に共に集めて埋置したものと考えられる。複数の成人が埋葬されている点、炭化物、灰層が見られる点、第4号住居跡が焼失している点とを考え合わせると、本墓の被葬者は第4号住居内で死亡した可能性が強く考えられよう。この場合、人骨が火をうけていない点が疑問点として残るが、蒸し焼き、又は白骨化しない程度で焼死したと考えるならば、火をうけていないことも首肯できよう。

太田川流域における弥生時代の墳墓の例からは、土壌墓、石棺墓、木棺墓が通常の埋葬形態であって、本例のように貯蔵穴の転用と考えられる例は他に見られない。したがって、現在のところ本例は異例の埋葬形態と言うことができ、その位置づけは将来の類例の増加を待って検討してゆきたい。(松垣)

### 焼失住居について

本遺跡B地点第4号住居跡は、焼失したものであることが確認された。住居内から出土した炭化材、焼土塊及び住居の立地から、上屋構造及び本住居の性格について若干の考察を加えたい。

炭化材は、住居内床面から多量に出土し、検出状態から、極木状を呈するもの、柱状を呈するものが見られた。炭化材は、住居壁面に近い部分ほど、その形状をよく保っている。これは、焼失による崩落の高低差によるものであろう。樺木状の炭化材は、周辺から、住居中央に向かって大概放射状を呈するように検出されており、極木材の長短はあるものの、大概放射状に構築したと推定される。使用された種木材は、検出された炭化材から、5～10cm前後と推定される。柱材と考えられる炭化材は、各柱穴の近辺から出土しており、全体の長さは明確にすることはできないが、2カ所の柱穴上の炭化材が、柱穴のほぼ中央に近い位置に立った状態で検出されており、その出土状態から、柱材として使用したものと考えられよう。出土した炭化材は各10cm、15cmを測り、木材よりやや太い木材を柱として使用したと考えられる。

床面上には、厚い灰層の堆積が確認された。この黒色土は、屋根の葺材が焼失したものと考えられるが、完全に灰化しており、材質は明らかにすることはできない。この黒色土中から、壁に接して及び近接した位置から焼土塊が検出された。壁面に接する焼土塊は、所々にその上面に炭化材が検出されている。このこと

は、この焼土塊が壁面を構成していたものと思われる。すなわち、本住居の壁は、地山壁面が崩落するのを防ぐため、壁溝上に木杭をめぐらし、その間に板材又は丸太材をわたし、地山との間に土を入れた構造としたことが推定される。木杭と木杭の間にわたした材木は板材のようであるが明確にすることはできなかった。床面からは、焼土面が比較的広範囲に見られた。このことは、本住居が完全に焼け落ちた結果と考えられ、火災に対して消火活動を行わないか、行い得なかつたのではないかという疑問を抱かせる。

炭化材の分布を見ると、南端部に若干炭化材の分布の少ない部分が見られる。このあたりは土取りによって削平をうけた部分にあたるが、検出状態から、削平をうけていない部分も含まれており、削平を考慮に入れても、炭化材の分布は少ないと言えるであろう。このことは、本地点弥生墳墓第10号墓の被葬者が、本住居の居住者又は使用者の可能性が強いことを考え合わせたと、次のように考えることができよう。第10号墓の炭化物、灰と共に人骨が集骨して埋葬されていることから、この炭化物の少ない部分から骨を集めた可能性がある。このことは、他の部分の炭化材に攪乱の様相が見られないことから首肯できよう。この部分に人骨が集中していた可能性を考えれば、本住居の入口はこの南端部に位置していたと考えられよう。即ち、火災時に脱出をはかった居住者が、入口に集まった状態で焼死したと考えられよう。

さて、本住居の立地を見ると、わずかではあるが尾根が鞍部となる部分に位置している。このような立地は、住居の立地条件から見ると不利な位置ということができよう。このことは、本住居床面が、表土より約2m下部から検出されており、大量の土砂が堆積したことが確認されたことから首肯できよう。したがって、本住居の位置選定に際して意識的に選定したことがうかがわれる。このような立地の例は、近年の調査

(注)

例からも発見されている。これらの例は、いずれも他の住居から離れた位置に単独で位置する例が多く、通常の住居とは別の性格を有する住居の可能性が高いと考えられる。本住居内からは、その性格について推定させる遺物が出土していないため、明らかにすることは困難であるが、第10号墓において、成人3体以上の人骨が検出されていること及び本例のような立地にある住居例が焼失又はそれに近い状態で検出された例がきわめて高率であることがその性格について考えるときヒントを与えてくれそうである。(松垣)

(注)

1. 九郎杖遺跡住居跡 隅丸方形 焼失
2. 大谷遺跡A地点2号住居跡 隅丸方形 焼失(?)
3. 中畦遺跡1号住居跡 円形 焼失
4. 此山遺跡住居跡 隅丸方形

## 土壌について

末光遺跡群から検出された土壌は、計39基を数える。一般的に土壌は、その形態や埋土の状況、検出される遺物等により、墓墳、貯蔵穴、農耕用の穴、水溜用の穴、落し穴、ゴミ捨て穴などの用途が考えられる。本遺跡群から検出された土壌のうち、22基は墓墳と考えられているものである。また、残りの17基のうち、12基は住居跡との位置関係やその形態などから、貯蔵穴と報告されているもので、本稿では、この貯蔵穴と住居跡との関係について論じてみたい。

貯蔵穴と考えられる土壌の規模と住居跡との位置関係については、表9ようになる。このうち、住居跡内に存在するものと住居跡に近接するものは計6基あり、B地点第2号住居跡から1基、同第3号住居跡から2基、E地点第1号住居跡から2基、同第2号住居跡から1基が検出されている。この6基の土壌は、そ

の位置関係から考えて、それぞれの住居跡に付属する貯蔵穴と推測される。また、住居跡と直接関連するかどうかは定かではないが、B地点第1号土壌のように木蓋の受け口の痕跡をもつものや、同第2・5・6号土壌のように底面周辺に溝をもつものなど、その形態から貯蔵穴と考えられる丁寧な造作を施した土壌が、本遺跡群からは6基検出されている。これらの土壌は、住居跡に最も近いB地点第1号土壌でさえ、住居跡が

表9 土壌の規模と住居跡との位置関係

No.	検出名称	規 模 (cm)			底面積 (㎡)	住居跡からの 距離 (m)	備 考
		長さ (底部)	幅 (底部)	深さ			
1	B地点 第1号土壌	120 (130)	120 (130)	150	1.33	2号住居跡より8m	木蓋の受け口の跡がある。
2	B地点 第2号土壌	100 (135)	95 (120)	120	1.28	2号住居跡より20m	底面上より土器片河原石を検出。 底面周辺には溝が認められる。
3	B地点 第4号土壌	180 (190)	180 (190)	195	2.83	3号住居跡隣接	
4	B地点 第5号土壌	200 (160)	200 (160)	250	2.01	4号住居跡より25m	大型土器片検出。 底面周辺部には溝が認められる。
5	B地点 第6号土壌	200 (140)	200 (140)	110	1.54	4号住居跡より15m	底面上から大型土器片検出。 底面周辺部には溝が認められる。
6	B地点 第10号墓	170 (170)	160 (170)	190	2.27	4号住居跡より10m	底面上50・70cmから土器片。 人骨検出。
7	B地点 第2号住居跡内土壌	200 (220)	180 (190)	140	3.30	2号住居跡内	底面上80cmから土器片検出。 底面周辺には溝が認められる。
8	B地点 第3号住居跡内土壌	160 (180)	160 (180)	140	2.54	3号住居跡内	
9	D地点 土 壌	180 (160)	165 (170)	280	2.14	住居跡より15m	底面より土器細片検出。
10	E地点 第1号土壌 北 側	150 (105)	120 (105)	70	0.87	2号住居跡より2.5m	底面より土器細片検出。
11	E地点 第2号土壌	135 (130)	135 (125)	35	1.28	1号住居跡隣接	土器細片検出。
12	E地点 第3号土壌	165 (140)	120 ( 90)	100	1.04	1号住居跡隣接	土器細片検出。

ら8mの距離に立地しており、他の土壌は住居跡から10m以上離れて立地している。以上のように、本遺跡群から検出された貯蔵穴と考えられている土壌は、住居跡に付属すると思われるものと住居跡から離れた地点に立地するものとに分けられよう。

住居跡に付属すると思われる土壌は、前述したように6基検出できているが、逆に末光遺跡群から検出された12基の住居跡のうち、貯蔵穴を伴う住居跡は4基しか認められず、貯蔵穴を伴う住居跡の数が少ないように思われる。そのうえ、A地点からは5基の住居跡が検出されているわけであるが、貯蔵穴と考えられる土壌は1基も検出されておらず、本遺跡群内の他の遺跡と比較するとき、貯蔵穴がみられない点において、貯蔵の方法に若干の疑問を残す。

さて、末光遺跡群から検出された住居跡の規模は表10のようになる。そのうちB地点からは4基の住居跡が検出されている。このうち第1～3号住居跡は同時期のものとされている。これらの住居跡のうち、第1号住居跡は末光遺跡群内で最大規模を誇るものであるが、この第1号住居跡からは貯蔵穴と考えられる土壌は検出されていない。しかし、第1号住居跡の約半分の床面積しかもたない第2号住居跡からは、上縁部径200×180cm、底径220×190cm、深さ140cmを測る末光遺跡群最大の土壌が検出されていることは注目される。加えて、この土壌は、本来柱穴のあるべき位置に掘り込まれており、同様の例は、市域において、豊谷遺跡から3基検出されているが、そのうち2基は住居跡と同時期のものではなく、1基のみ力注居跡に伴うものと報告されている。その貯蔵穴は深さが約50cmと浅く、住居跡内の柱穴とほぼ同様の深さであるた

(注1)

め、貯蔵穴内に柱をたてることは、たやすかったと考えられる。これと比較して、末光遺跡群の貯蔵穴の上縁部は住居跡の床面積の約10分の1を占め、その深さも約140cmと深いことから考えて、住居跡内にこれだけの規模の貯蔵穴が存在することにより、住居跡の使い勝手が非常に悪いものになり、住居跡と貯蔵穴の有り方に疑問を生ずる。また、第3号住居跡からは、付属すると考えられる2基の貯蔵穴が検出されている。

(注2)

このように、複数の貯蔵穴を伴う例としては、末光遺跡群E地点第1号住居跡、高陽台A地点第3号住居跡、

(注3)

真亀C地点第1号住居跡ないし第2号住居跡・同D地点住居跡・同G地点第2号住居跡等あげられる。これら複数の貯蔵穴をもつ住居跡のうち、最小規模の高陽台A地点第3号住居跡は、床面積が約23m<sup>2</sup>を測るもので、高陽町域から検出された貯蔵穴を伴わない住居跡の平均床面積は約24m<sup>2</sup>とほぼ同様の規模であるが、高陽台遺跡群内においては比較的大型の規模に属するものである。他の複数の貯蔵穴をもつ住居跡の平均床面積は34m<sup>2</sup>で、貯蔵穴をもたない住居跡とは、その床面積において明らかな差異が認められる。

ところで、末光遺跡群から検出された貯蔵穴と考えられる12基の土壌のうち、50%にあたる6基は床面積2m<sup>2</sup>以上の大型のもので、そのうち、5基はB地点に集中して見出される。これと比較して、これまでの報告例にみられる本遺跡群以外の諸遺跡から検出された大型のものは、わずかに5基しか検出されておらず、全体の約10%強にすぎない。このことは、この末光B地点遺跡が、高陽町の他の遺跡より、貯蔵物が豊富で

表10 住居跡の規模と平面形

名 称	規 模 (m)	平 面 形	名 称	規 模 (m)	平 面 形
B地点第1号住居跡	9.2×7.5	長 円 形	D 地 点 住 居 跡	4.2×5.6	隅 丸 方 形
B地点第2号住居跡	5.7×5.3	隅 丸 方 形	E地点第1号住居跡	7.2×6.8	円 形
B地点第3号住居跡	7.4×7.4	円 形	E地点第2号住居跡	3.6×3.6	隅 丸 方 形
B地点第4号住居跡	6.0×6.0	円 形			

(A地点については、平面形・規模等が定かでないため削除)

あった可能性を考えさせる。

前述したように、末光遺跡群から検出された貯蔵穴は、住居跡内ないし住居跡に隣接したものと住居跡から離れて存在するものに分けられる。このうち、B地点第1～3号住居跡付近からは第1・2号土壌が検出されており、あたかも第1～3号住居跡全体で管理されたかのような印象を受ける。これらの土壌は、住居跡内ないし住居跡に隣接した土壌に比べて、小規模であるが、これが管理形態の差なのか貯蔵物の内容の差なのかは、今後資料の増加とともに徐々に解決されていこう。(橋本)

(注)

1. 広島県教育委員会『広島県文化財調査報告』1983
2. 広島市教育委員会『高陽台遺跡群発掘調査報告』1982
3. 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977

## 総 括

末光遺跡群は、A～E地点及び中世山城で構成されるものであることは既に述べたとおりである。このうち、A～E地点遺跡はA～2地点を除いて住居跡を主体とする弥生時代後期の遺跡であり、A～2地点は弥生時代から古墳時代にかけての埋葬遺構という内容である。また、これらの遺跡は諸木川と岩上川という太田川本流に注ぐ小河川にはさまれた標高50～100mの丘陵上に点在している。

さて、ここで末光遺跡群発掘調査の結果明らかにされた問題点をいくつかあげてみると、第1にB地点検出の弥生墳墓及びA～2地点の墳墓の性格づけという点、次にB地点検出の第4号住居跡及び第10号墓との関係、さらに第4号住居の性格づけという問題もあり、また、本遺跡検出の住居跡の分布とそれに関連して貯蔵穴の分布及び性格づけなどの諸点がある。以下この3点に絞って若干の考察を加えてみたい。

B地点遺跡検出の弥生墳墓は9基の土壌墓ないし壙棺墓を中心として構成されており、出土土器から弥生後期中葉を中心に営まれたものと考えられる。また、被葬者は墓墳の形態、規模から考えて幼児を中心としたものである。ただし、第1号墓は小口部分の石材のみの出土であり墓墳の規模は確認できなかったが、長軸2mを測ることから成人用のものと考え方が妥当であろう。一般に幼児の埋葬は、民俗例などから

(注1)

住居に近接して行われることが多いといわれている。このことから本墳墓に近接する住居は、第1～3号住居と第4号住居があるが、このうち弥生墳墓と同時期といえるものは、出土土器から考えて第1～3号住居のグループであり、この弥生墳墓を構成する埋葬施設のうち多くの部分が第1～3号住居に関連する可能性が強いといえよう。しかし、遺物を出土しない土壌墓もあり、また、3軒の住居に対して8基の幼児用墓は多すぎるように思われる点など、第4号住居及び後述する第4号住居周辺に予想される住居との関連も残されている。

次にA～2地点の墳墓についてみると、この墳墓は、土器蓋土壌といえるもの1基を含んではいないが、全て土壌墓で構成されており、墓域の背後を尾根線に直交する溝で区画している。こうした墳墓の構成及び立地は周辺地区にも見られるが、このうち西願寺遺跡A地点は土壌墓42基からなる墳墓でありA～2地点の例

(注2)

に類似している。

さて、太田川下流域及び広島市域で知られている弥生墳墓としては、可部町の丸子山遺跡、白木町の佐久良遺跡、安古市町の恵木遺跡等があげられる。このうち恵木遺跡からは箱式石棺及び土壌墓が検出されてお

(注3)

り、箱式石棺を幼児用、土壌を成人用としていた。しかし、丸子山例は全てが箱式石棺であり、成人、

(注4)

(注5)

幼児の区別はみられない。このことは、佐久良例でもほぼ同じ傾向を示している。振り返って末光例をみ

ると、A-2地点、B地点とも成人、幼小児の明らかな葬制上の区別はみられない。加えて以上の墳墓例は土壌墓あるいは箱式石棺という単一の葬制が行なわれているものと、両者あるいは壘棺墓などが混在するものとに分かれる。こうした違いが時期的ないし地域的な差なのか、墳墓を営んだ集団内の何らかの規制なのかについては現段階においては即断し得ない。

次に、B地点検出の第4号住居と第10号墓の関連及び第4号住居の性格について触れておきたい。第4号住居は、B地点第1～3号住居の北約65mの地点に位置している。この地点は南から北へ向って延びる尾根の稜線上でかつ鞍部となる場所である。また、第10号墓は既に述べたように第4号住居の西方10mの斜面に立地した断面袋状を呈する土壌である。さてここで第4号住居と第10号墓との関係について考えてみる。第10号墓からは上下二層に分かれて成人3体以上の大腿骨を中心にした骨が出土しており、上下二層は出土土器から同時期のものと考えられる。また人骨とともに、多量の炭化物や灰が検出されており、第4号住居との関連を考えさせる。加えて、第4号住居についてみると、住居内東側に炭化材の攪乱がみられ、これはあたかもこの場所で焼死した者の骨を集める際に生じたもののように考えられる。これらのことから、第10号墓が第4号住居で焼死した複数の人物を集めて埋葬するために利用された施設であるとした点は首肯できる。

この場合、第4号住居が焼失し、内部で成人3体以上の焼死があったとするならば、第4号住居が日常生活に必要な什器類がみられないまま焼失しており、生活のにおいを感じさせないという点に問題が残る。これは第4号住居の性格を考える上で重要な点である。そこで第4号住居の性格について考えてみたい。すでに述べたように第4号住居は尾根の稜線上の鞍部になる地点にある。住居の南は比較的急峻な傾斜を成し、この住居検出時には大量の土砂が流れ込んでいた。北は住居からの比高1m内外のレベル差をもって良好な平坦面がある。また、東側は土砂採取のため大きく削り取られており、旧地形はほとんど残っていないが、地形図から推定すると、ここが比較的平坦な小支尾根を形成していたことがわかる。この地点からは弥生土器の表採もされており、かつ第5号土壌の存在からこの場所に本来若干の住居が存在していたものと予想される。以上の点から第4号住居が日常生活の場として営まれたものではないことがうかがえよう。そこで第4号住居が焼失している点を考慮に入ると、たとえば第4号住居は頻繁に火を使用するある種の場所として日常生活の場から意識的に離して設定されたと考えられ、第4号住居の性格が幾分限定されるようである。一例をあげるならば集落内祭祖の場といったような内容のものがあげられよう。こう考えるならば、第10号墓の本来の機能である貯蔵穴としての袋状土壌が第4号住居に伴うとは考え難く、第4号住居東斜面に存在の予想される住居との関係を考えるべきであろう。しかし、いづれにしても、推論の域を出ないため、今後十分な検討を進める必要がある。

最後に住居跡及び貯蔵穴の分布について考えていきたい。本遺跡群からはA-1地点5軒、B地点4軒、D地点1軒、E地点2軒の計12軒の住居跡が検出された。また貯蔵穴と考えられる土壌はA-1地点0、B地点8基、D地点1基、E地点3基の計12基であった。

B地点は諸木川に向かって開く谷奥の尾根上にあり、特に西側の谷は湧水点をもち、潤潤で可耕地として適していたといえよう。さらにB地点の背後はニヶ城山へ続く森林地帯となっている。また、B地点の4軒の住居のうち第1～3号住居については互いに近接しており、出土遺物はそれらが、同時期のものであることを示している。この第1～3号住居は尾根西側の谷水田あるいは諸木川への谷の開口部周辺を生産基盤として成立していた集団と考えられる。また貯蔵穴と考えられる土壌は第2・3号住居内に各1基、第3号住居に控えるようにして第4号土壌があり、第1・2号土壌は住居と離れた地点に存在している。こうした分布から考えられることが、貯蔵穴の管理形態によるものか、貯蔵物の違いによるものかについては明らかに

し得なかった。しかし、いずれにしても、これらの土壌が生産物の貯蔵用であるなら、その数、容量あるいは住居との数的関係、位置的关系は、その集団の生産力と対応するものとみるべきであろう。こうした観点に立つならば、小集団内における住居と貯蔵穴の関係を明らかにすることは、小集団間の社会的関係のあり方を知る上で重要な手掛りとなろう。この意味で、末光B地点遺跡は良好な資料を提供したといえるであろう。

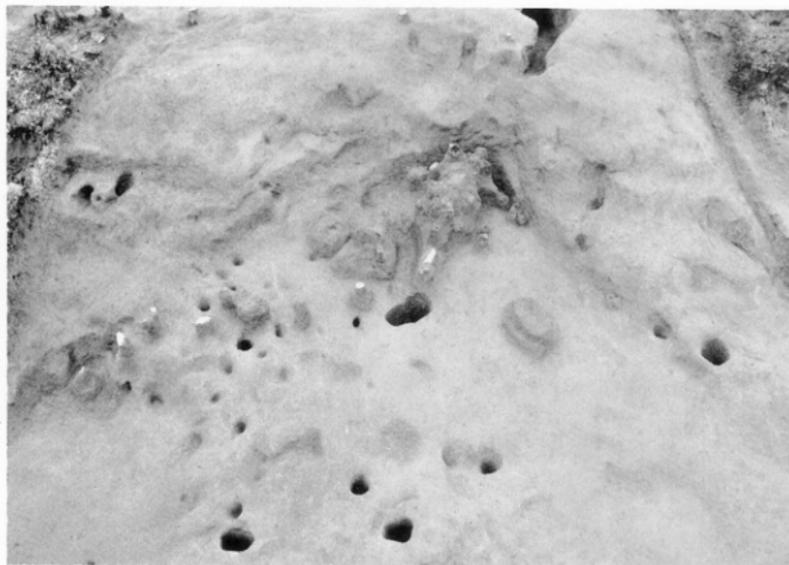
なお、最後になるが、今回の発掘調査にあたっては実に多くの方々のご協力、ご援助、ご指導を頂いたことをここに改めて記して感謝め意を表わしたい。(幸田)

(注)

1. 佐原真「農業の開始と階級社会の形成」(岩波講座日本歴史1)1975
2. 広島県教育委員会「西願寺遺跡群」1974
3. 恵木遺跡発掘調査団「恵木遺跡発掘調査報告」1982.3
4. 石田彰紀「丸子山遺跡」(「日本考古学年報」第29号)1978
5. 広島市教育委員会「佐久良遺跡発掘調査報告」1984.3



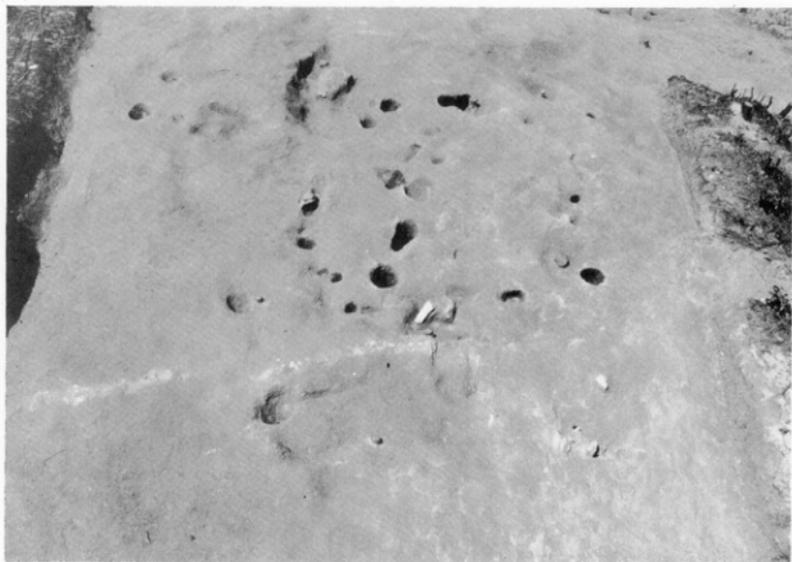
末光遺跡群全景（航空写真）



a. A-1 地点第1号住居跡



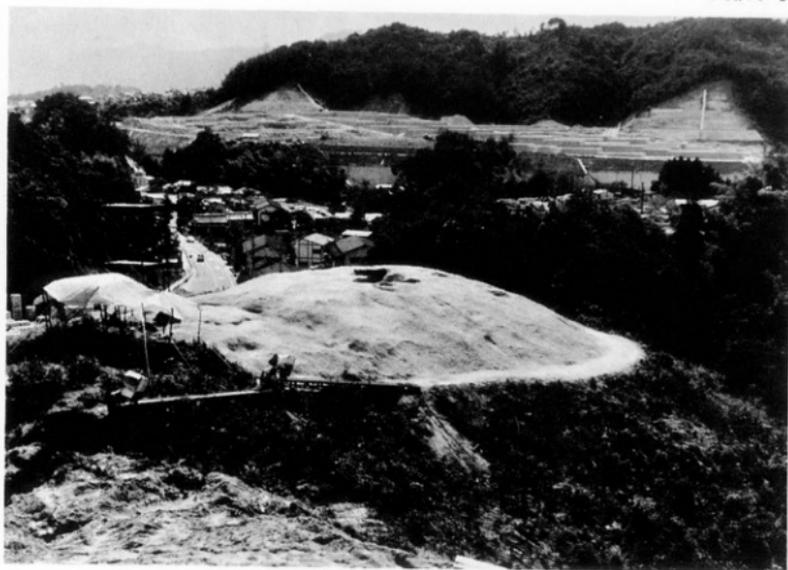
b. A-1 地点第2号住居跡



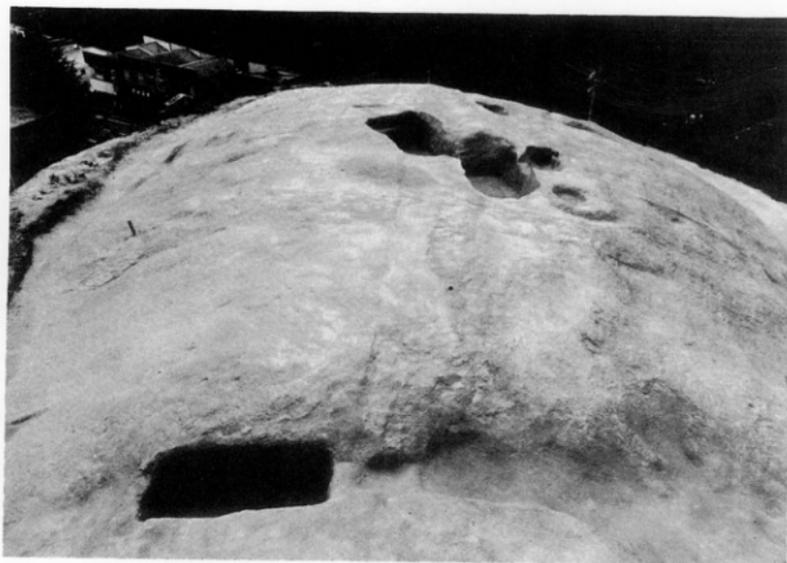
a. A-1 地点第3号住居跡



b. A-1 地点第4号住居跡



a. A-2 地点遠景 (調査後)



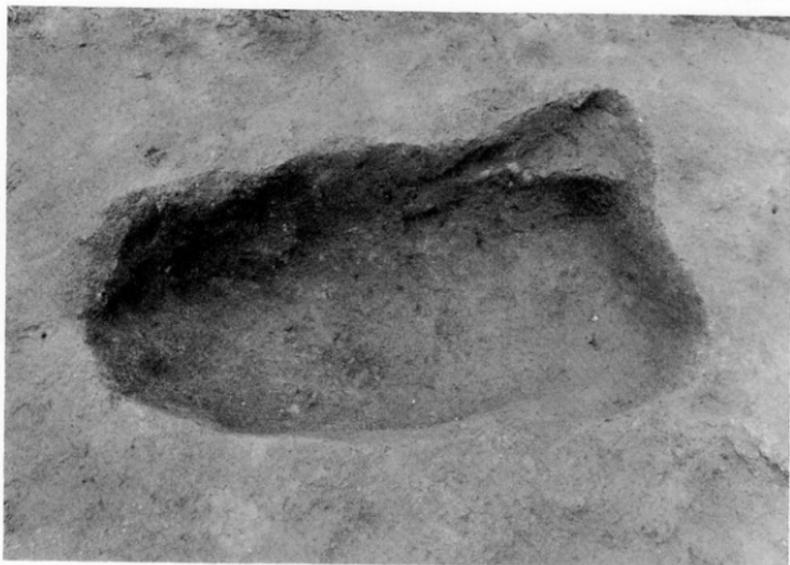
b. A-2 地点近景 (調査後)



a. A-地点 第1・2号土坑



b. A-地点 第3~7号土坑



a. A-2地点 第8号土坑



b. A-2地点 第9号土坑



a. A-2地点 第10号土坑



b. A-2地点 第11号土坑



a. B地点 遠 景 ( 調査前 )



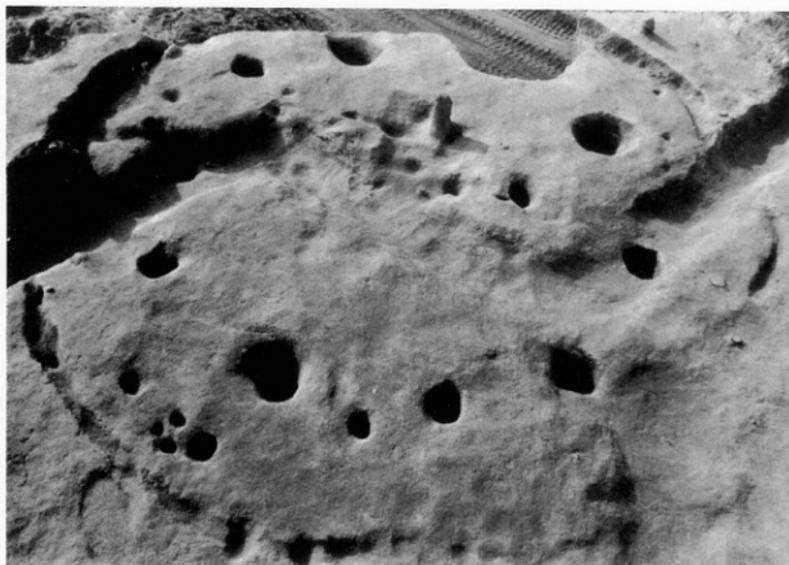
b. B地点 近 景 ( 調査前 )



a. B地点 第1号住居跡



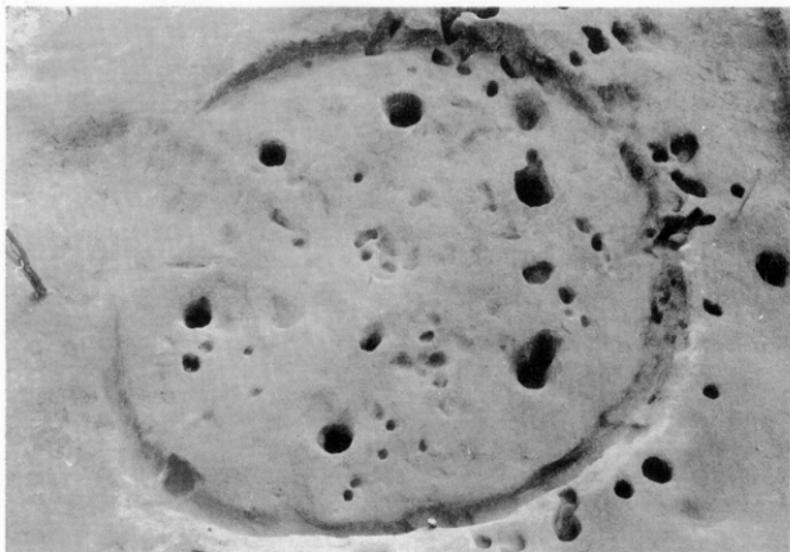
b. B地点 第2号住居跡



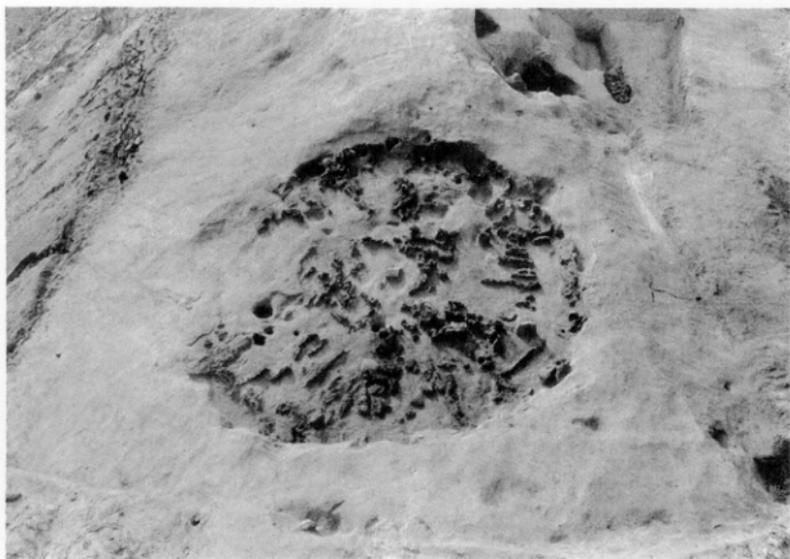
a. B地点 第3号住居跡



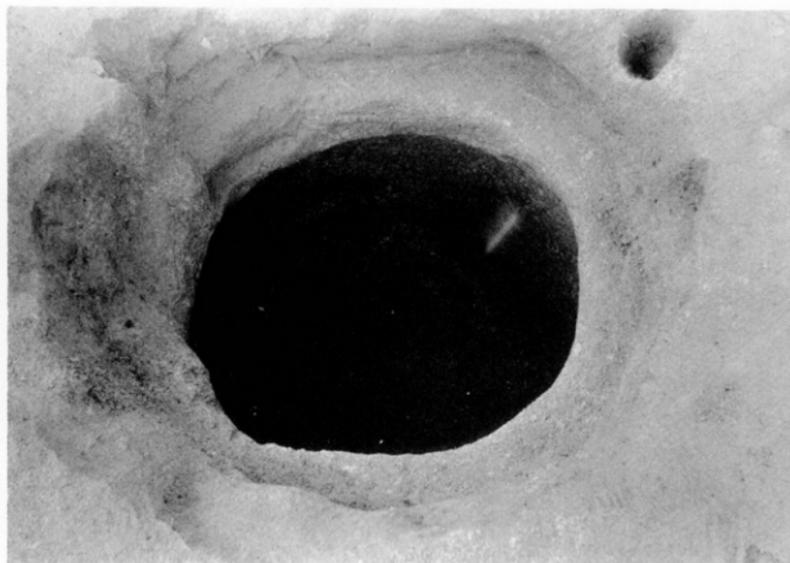
b. B地点 第4号住居跡



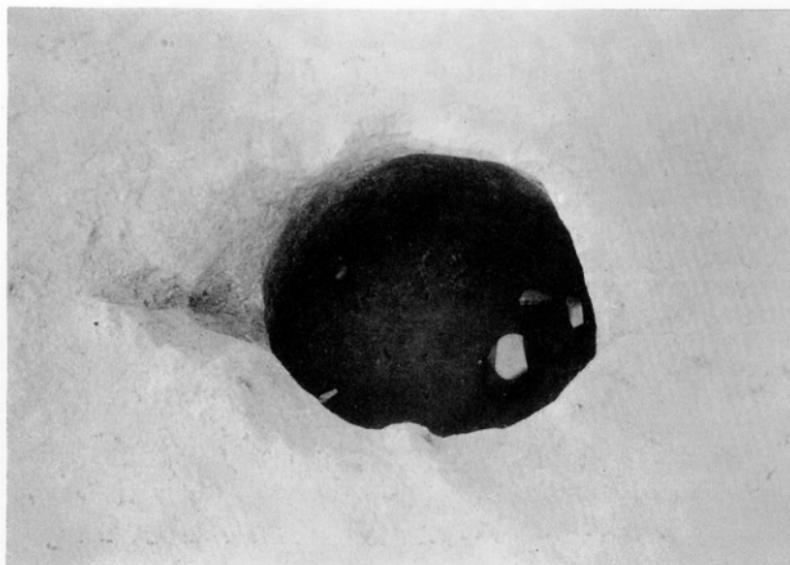
a. B地点 第4号住居跡



b. B地点 第4号住居跡



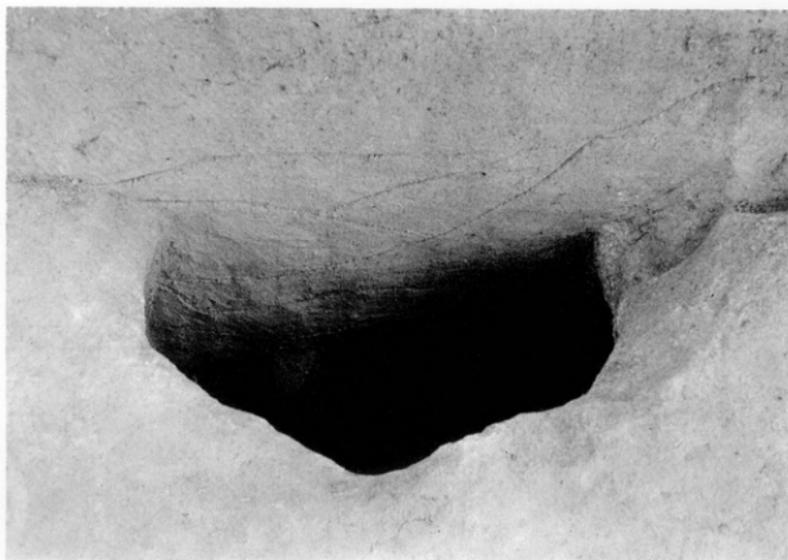
a. B地点 第1号土坑



b. B地点 第2土坑



a. B地点 第3号土坑



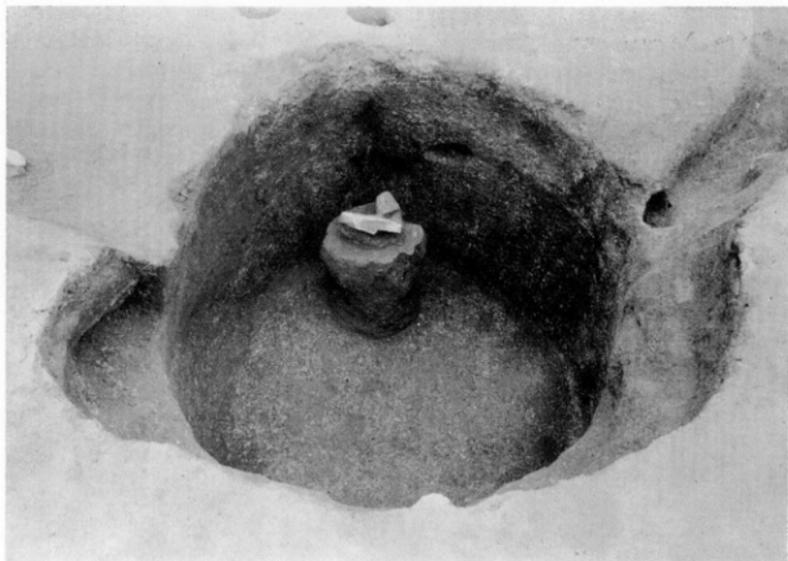
b. B地点 第4土坑



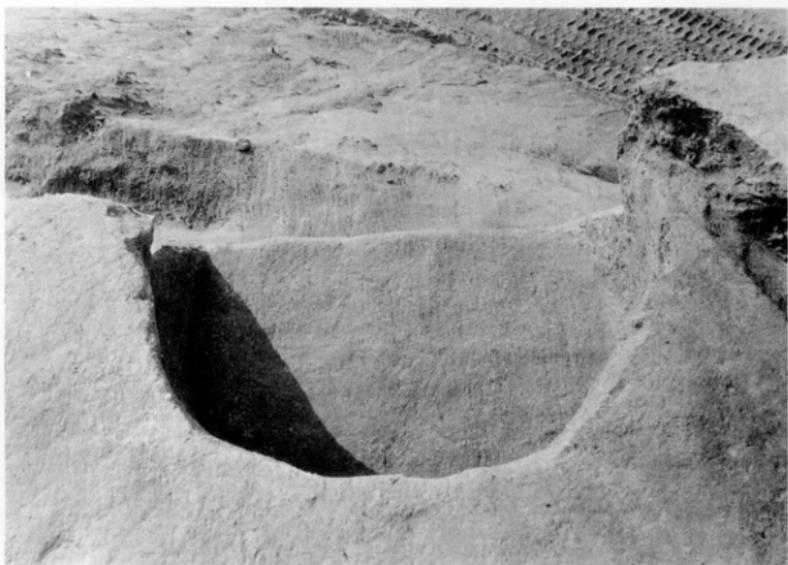
a. B地点 第5号土坑



b. B地点 第6号土坑



a. B地点 第2号住居跡内土坑



b. B地点 第3号住居跡内土坑



a. B地点 弥生墳墓群第1~9号墓



b. B地点 弥生墳墓群及び第7号土壇



a. B地点 第1·3号墓



b. B地点 第2号墓



a. B地点 第4号墓



b. B地点 第5·6号墓



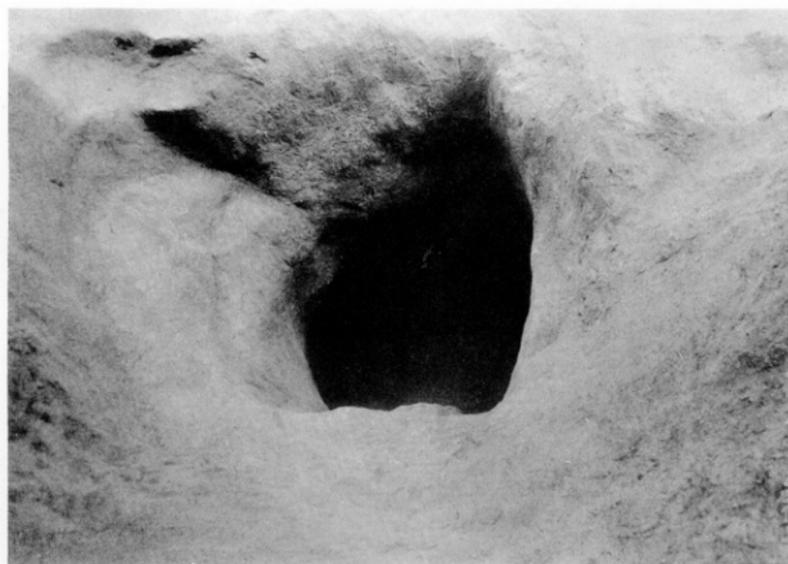
a. B地点 第7号墓



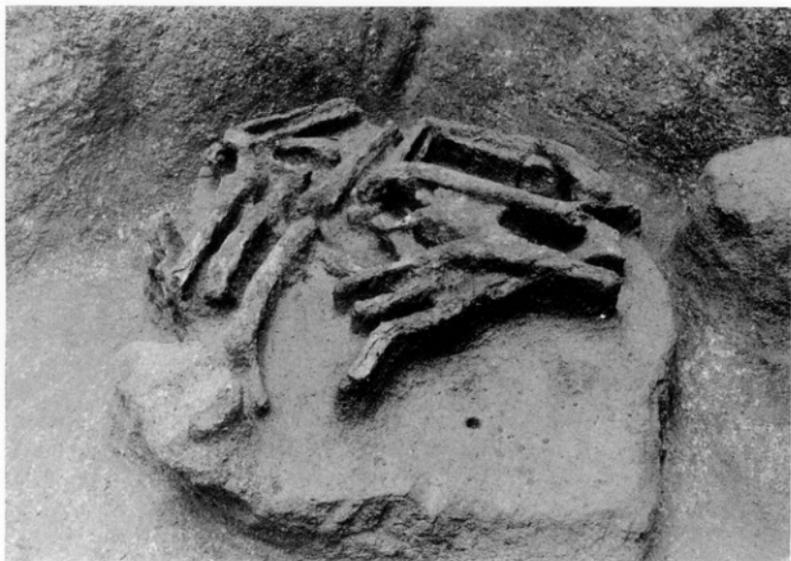
b. B地点 第8号墓



a. B地点 第9号墓



b. B地点 第10号墓



a. B地点第10号墓下層人骨出土狀態



b. B地点 第10号墓上層人骨出土狀態



a. D地点 全 景（航空写真）



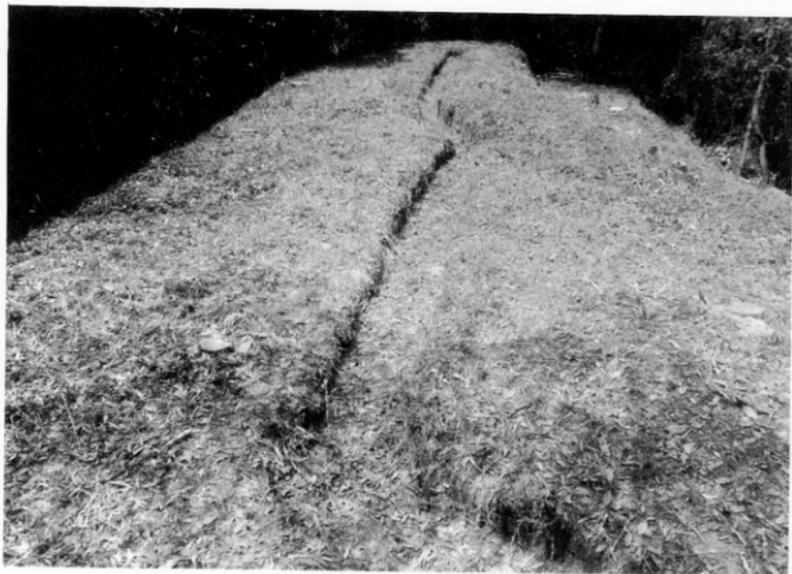
b. D地点 近 景（調査前）



a. D地点 住居跡



b. D地点 土壤



a. E地点近 景（調査前）



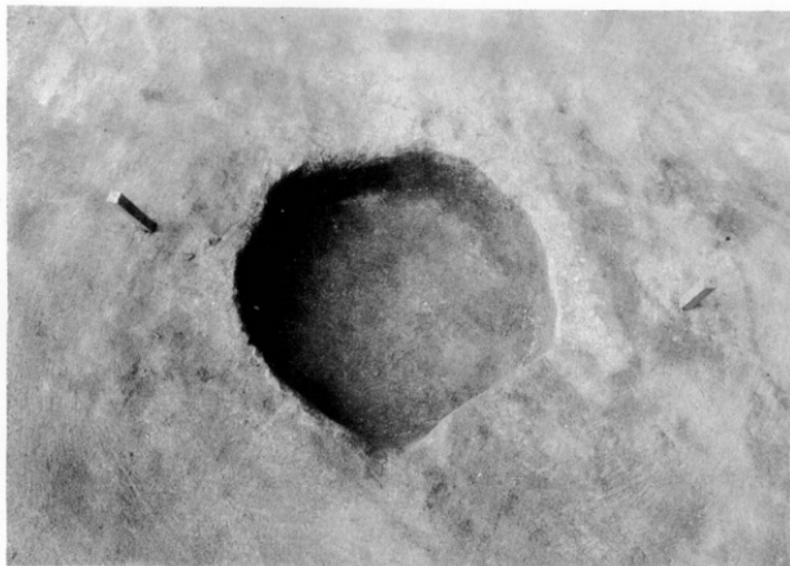
b. E地点近 景（調査後）



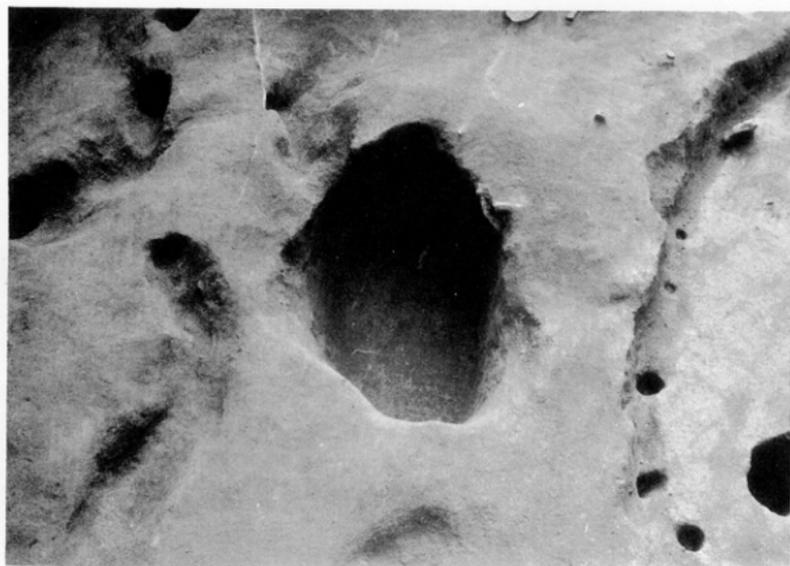
a. E地点 第1・2号住居跡



b. E地点 第1号土坑



a. E地点 第2号土坑



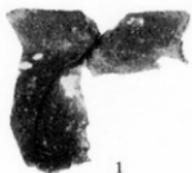
b. E地点 第3号土坑



a. E地点 第4号土坑



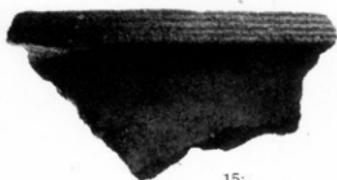
b. 岩上城跡遠景



1



7



15



16



5



18



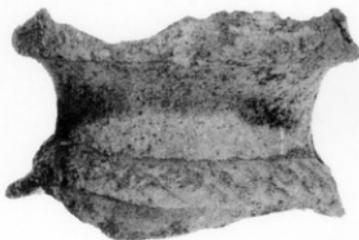
19



22



28



35



38



39



1



2

A-2 地点 出土土器



3



1

C 地点 出土土器

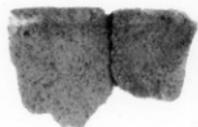
A-2 地点及びC地点出土土器



1



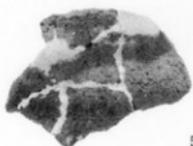
2



3



4



5



6



7



8

(縮尺は1/3)



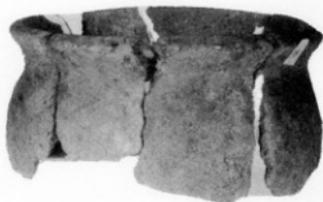
13



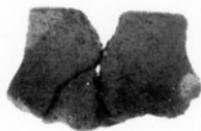
9



14



11



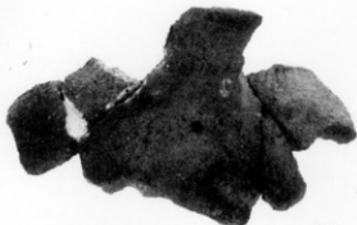
15



12



16



17



18



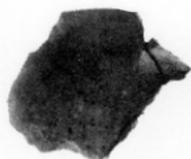
20



19



23



21



22



26



24



25



28



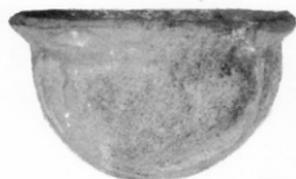
27



29



30



33



32



31



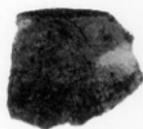
36



35



34



39



38



37



40



41



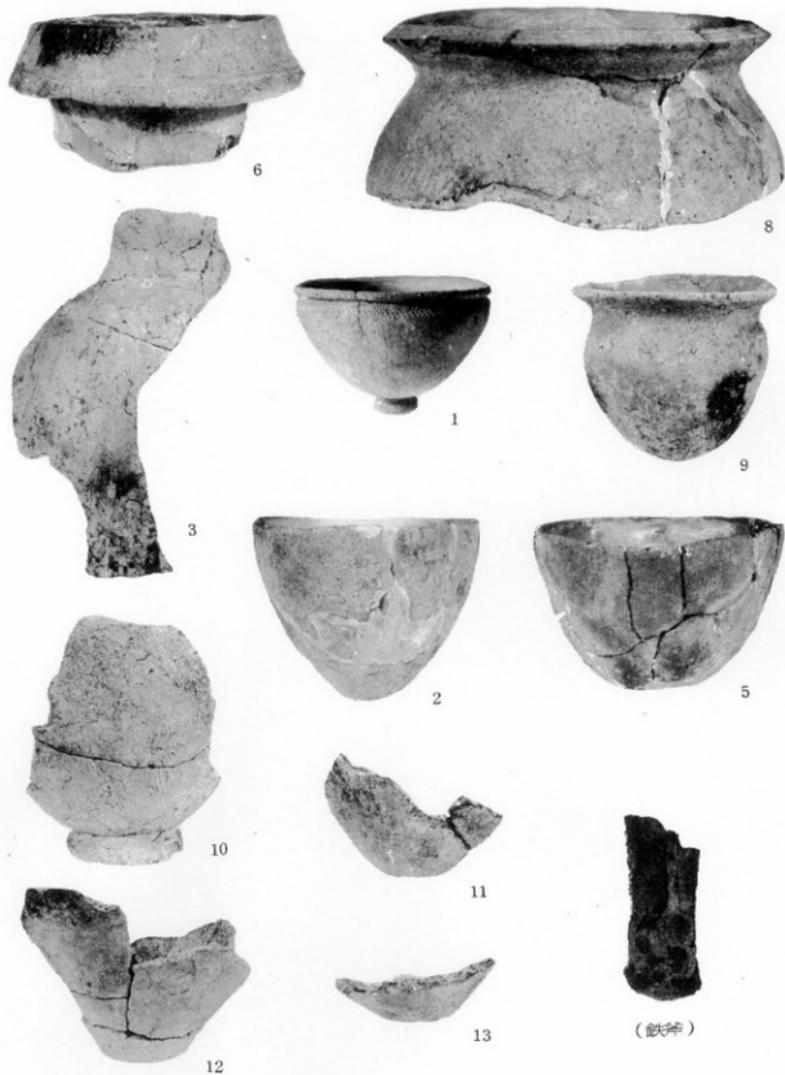
42



43



44



E地点 出土土器及び鉄器



①

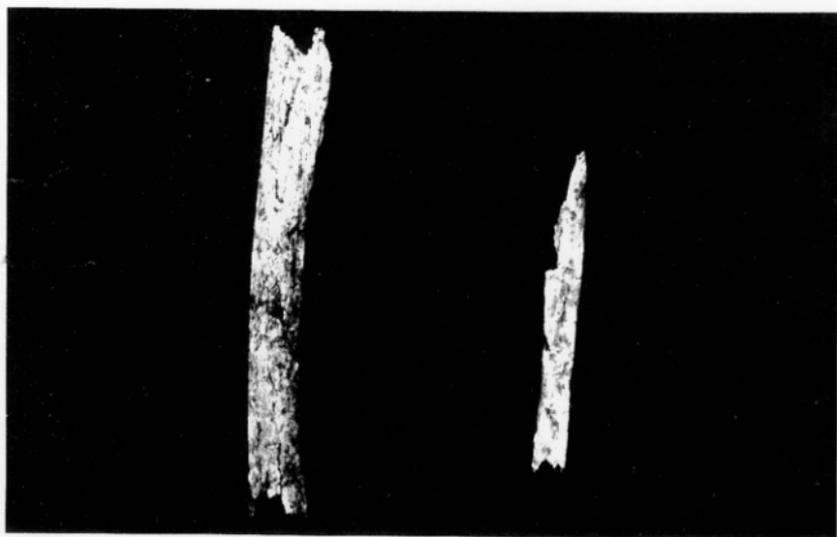


②



③

大腿骨 1 (男性) [左=後面, 中央=前面, 右=側面]



④

左=大腿骨 2 (女性) 右=腓骨 (男性)

